註三　A. Aftalion, Monnaie. pp. 229-230.〔前掲邦譯書　二三一―二三二頁參照。〕

この貨幣價値を決定すべき質的要因の強調からしても明らかなるがごとく、單に稀少性なる量的要因にのみ固執せる貨幣數量說には、アフタリオンのくみし得ざりしは當然である。これ彼は、貨幣數量說にあつては貨幣價値の根據に關してはなにらの關心も拂はれてゐない、と斷ずるにいたれる所以でもある(註四)。さうして彼は貨幣の價値の根據を心理的要因に求め、それをもつて貨幣の固有な主觀的價値を究明し、貨幣の客觀的交換價値の基礎としてのそれを强調するにいたつたのである。

註四　A. Aftalion, Monnaie. pp. 230-231.〔前掲邦譯書　二三二―二三三頁參照。〕

しかれども豫測效用の固有性は、遂に、アフタリオンにおいては論證されることが出來なかつた。アフタリオン自身も明らかに、貨幣は直接效用 (d'utilité directe) を持つてゐないと主張して、その謂ふところの豫測效用も同じく一種の間接效用であり、反映的性格のものであることを認めてゐる(註五)。それにも拘らずウィーザーの主張するがごとき間接效用を棄てゝ豫測效用を强調する所以のものはなにか。吾々はこゝに彼の貨幣心理學說の面目を看取すべきである。

註五　A. Aftalion, Monnaie. p. 235.〔前掲邦譯書　二三七頁參照。〕

すなはち、ウィーザーにあつては貨幣の主觀的價値は、最終所得單位の獲得し得るところの商品效用に依存する。この商品效用なるものは、商品が財貨として消費することによつて得らるべきものであるがゆゑに、それは謂はば「消費效用」とも言ひ得やう。從つてウィーザーにあつては、貨幣の主觀的價値は「消費效用」に依存するといふことゝなる。このことは貨幣の評價を商品の評價に歸して、それと同一視することである。そうして貨幣をば商品から獨立に、すなはち純粹に貨幣的な特性から評價すること、貨幣を貨幣として評價することを否定するの結果となる(註六)。この故にアフタリオンは、貨幣を貨幣として評價すること、よし貨幣は結局において商品を購買するものではあらうとも、それによつて得られる商品に直ちに結びつけずに、貨幣をかゝる購買力として評價すること、を主張する。從つて、貨幣の主觀的交換價値をば「直接」それによつて購買し得られる商品效用からでなしに、貨幣の貨幣としての效用、すなはち購買力としての有用性、したがつて貨幣單位に豫測し期待せる效用、一種の將來效用でもつて、基礎づけんとしたものゝごとくである。この消費效用と豫測效用との間におけるニュアンスの差異は、まことに微少なるものではあらうとも、これを看過することは許されない。それを無視してすべてを消費效用に歸してもつて貨幣の主觀的交換價値の反映性を强調せんとする見解は、アフタリオンの意圖をまつたく沒却せるものと言はねばならない。

註六　A. Aftalion, Monnaie. pp. 205, 204.〔前掲邦譯書　二〇六および二〇五頁參照。〕

前述のごとくウィーザーにあつては、貨幣の主觀的價値は最終所得單位で得られる商品の效用、すなはち消費效用によつて制約されて居り、從つてそれは「常に」貨幣の客觀的交換價値を前提せるものなるがゆゑに、これが變動の基礎であり、要因たることをまつたく得ざるものなのである。そうして貨幣の客觀的交換價値はたゞ所得數量の變化を通じて、詳言すれば貨幣所得と實質所得または社會的總生產物との關係においてはじめて決定されるものであり、それを通じて變化するものなのである。かくのごとく貨幣の客觀的交換價値に對するそれの主觀的價値あるひは主觀的交換價値の消極性を意味することのうちに、謂はゆる消費效用の意味規定が存するのである。貨幣數量說が、この貨幣の客觀的交換價値を決定し制約すべき要因としては、單に貨幣の數量、それの量的要因をのみ考へて、質的要因を看過したる所に、その學說の根本的缺陷があつたかのごとくである。詳言すれば、貨幣數量說は貨幣の客觀的交換價値をも商品價値の反映と見、したがつて貨幣價値の根據に關してはなにらの關心をも拂つてゐないのである(註七)。ところで所得數量說にあつては貨幣の主觀的交換價値を說き、それを制約するものとして消費效用なる質的要因を擧げるが、それは、結局、得られる商品そのものの效用であつて、純粹な貨幣的性格に依據せる質的要因ではない。そうして貨幣の客觀的交換價値を制約するものではなく、むしろそれによつて常に制約されてゐるものなのである。

註七　A. Aftalion, Monnaie. P. 231.〔前揭邦譯書　二三二—二三三頁參照。〕

しかれども、アフタリオンが貨幣の主觀的交換價値をば豫測效用をもつて基礎づけんとせし所以のものは、實に、貨幣の客觀的交換價値の基礎であり、根抵をなせるものであつて、それが變動を制約し、決定するものとしての貨幣の主觀的（交換）價値を論證せんがためであつたのである。貨幣は直接效用を有つてゐないので、貨幣に對して期待する滿足は、交換によつて獲得されんとする商品に對して期待される滿足に過ぎない。從つて貨幣單位に關する質的な評價は商品に對して期待する滿足に比例するものである。併しまた貨幣單位の質的な評價は貨幣單位が獲得するであらうと考へられる商品量の多少による。かくして豫測效用なるものは、所詮、反映的なものであり、從つて、それに依據し、制約されてゐる貨幣の主觀的交換價値は、過去の貨幣の客觀的交換價値によつて決定はされる。それにも拘らず、豫測效用に依據せる貨幣の主觀的交換價値は、また、將來の貨幣の客觀的交換價値を制約し得る。こゝにこそ消費效用と豫測效用との表現上の差異の持てる深き意味が存するのである。前者の客觀的交換價値に對する消極性に對比して、後者の積極性、これこそがアフタリオンの貨幣心理學說の主張の全部の懸つてゐる重心なのである。この點を看過せる批判はまつたくアフタリオンの見解の根抵を沒却せるものたるにすぎない。豫測效用も結局は、消費效用と同樣に商品效用の反映で

あり、かくてはそれに基づける主觀的價値も客觀的交換價値の反映なりといふことは正當であつても、それが故にアフタリオンを非難することは、なにら當らないのである。消費效用的貨幣價値の物價への消極性に對して、豫測效用的貨幣價値の物價への積極性を否定し得たることにはならないからである。むしろ消費效用中心的な論者の見解こそは、アフタリオンの豫測效用的貨幣價値理論へと進むことによつて、はじめて、主觀的價値の客觀的交換價値への影響性、積極性を主張し得るにいたるといふべきであらう。

ミーゼスは、貨幣の價値の歴史的連續性の構想をもつて貨幣の主觀的交換價値を貨幣商品の使用價値に依據せしめることによつて、貨幣の客觀的交換價値の、したがつて物價の變動原因を、貨幣の主觀的交換價値に求めることが出來たのである。いまやアフタリオンは、連續性の構想をとらないが故に、消費效用に依據せる貨幣の主觀的交換價値には、貨幣の客觀的交換價値への積極性を否認せざるを得なかつた。そこで消費效用に代つて豫測效用をもつて、はじめて、貨幣の主觀的價値の物價への能動性を主張し得たのである。

然れどもこれをもつてしては、貨幣の客觀的交換價値の變動の機構を明らかにし得たるがごときも、いまだ貨幣の價値性は少しも解明されたとは言ひ得ない。換言すれば「貨幣の價値は如何にして變動するか？」といふ問題には答へ得たとしても、「貨幣の價値とは何にか？」といふことにはいまだ答へてはゐない。これ豫測效用の反映性にその根本的缺陷があるものと言はなければならない。これがためアフタリオンが最初に意圖せる貨幣の主觀的固有價値の基礎づけは不可能に終つてゐる。從つて變動の理論もいまだ眞の解決を得たるものとは言ひ得ないのである。これアフタリオンの心理的原因は實は物價變動の眞の原因ではなくして、たゞまさに形成さるべき物貨に對し影響を與へ、それの變動傾向を強める拍車的な、あるひは加速度化原因たるにすぎずとされる所以である(註八)。

註八　Cf. J. Greidanus, The value of money. 1932, p. 137.

吾々は、アフタリオンが貨幣の主觀的固有價値の重要性を強調し、貨幣の價値性の究明によつて、貨幣の客觀的交換價値の變動の要因を明らかにせんとせし功績は、これを高く評價すべきであらう。併し彼はこれを心理的な要因をもつて基礎づけんとして、ついに、失敗せざるを得ざりしものゝごとくである。彼が限界效用原理の貨幣の理論への適用に、消費效用のほかに豫測效用の重要性を唱導して、限界效用理論に新生面を開拓せしことは大いに偉とすべきである。これ彼の豫測效用の一面性にのみ捉はれて、客觀的事實への反省の足らざることをもつて恰かも彼の根本的缺陷なるかのごとく主張する論者の批判にくみし得ざる所以である。むしろ私は、アフタリオンの貨幣心理學說の失敗のう

ちに、主觀的價値理論ことに限界效用學說の宿命的なる脆弱性を看取せざるを得ない。このことは、豫測效用的貨幣價値理論にあつても、論述が常に貨幣の客觀的交換價値の、從つて物價の變動に關聯して論理の運ばれざるを得ざらしめたる所以であつて、貨幣心理學說の動態論的性格は、限界效用學說の價値性の說明原理としての不充全性に基因せるものゝごとくである。

かくして吾々は、アフタリオンの貨幣價値理論と商品價値理論との一元性の强調を想起するとき、より一層、商品價値理論への反省の必要を痛感せざるを得ない。まことに、商品價値理論への正しき洞察こそ、貨幣の價値の理論への輝かしき光明を齎らすものなることの示唆が、こゝに、看取さるべきではなからうか！

第二編　貨幣必然性の理論

第四章　貨幣必然論の諸相

第一節　序　説

貨幣はなにゆゑに生成したのであるか？　それの存在はなにがゆゑに必然なのか？

この問題に對してこれまで色々な解答がなされて來た。併しながら、それらの解答のうち多くは、いづれも、充分に滿足なものであつたとは言ふことが出來なかつた。ことに、貨幣の必然性に關する問題そのものについての理解の不充分なることは、論者をしていたづらに貨幣發生の事實史的なる穿鑿に終始せしむるにいたつたのであつた。このやうな事情は、貨幣の必然性の問題があたかも經濟史の取扱ふべきところのものであるかのごとき情勢を招致した。そうして貨幣の「理論」の研究對象としては、これを採りあぐべきものにはあらずとすら論斷せられしこともあつた。吾々は、もちろん、このやうな反對論がその主張の根據となせるとてろのものに關しては、それが正當なる所以をばあへて否認しやうとは考へてゐない。むしろこれとは反對に、かゝる批判に共鳴すべき多くの點を認めな

ければならない現狀を、遺憾と思はねばならないのである。然れども、このやうな理由をもつてしても、貨幣の必然性の問題そのものが、貨幣の「理論」的研究の分野より排除さるべしなすことについては、これを肯定しそれに承服すべき理論的根據を見出すに、吾々は苦しむのである。といふのは、吾々が貨幣の必然性の問題において尋究せんとするところのものは、――貨幣が何時、いかなる時代に、如何にして發生したか、あるひは如何なる交換財貨がはじめて貨幣として使用されるにいたつたか、といふことにあるのでは決してないからである。

しからば吾々は、如何なる意味において、貨幣の必然性を問はんとするのであらうか。貨幣の必然性の理論は、もともと、それが生成の歷史的な事實について問題とするのではない。それはむしろ、貨幣生成の必然的なる理論的構造を明らかにせんとするものなのである。いふまでもなく過去において、牛や羊が貨幣として通用しておつたこともあつた。これは疑ふべからざる歷史的な事實である。牛や羊は遊牧民族にあつては唯一の重要なる動的財產であつたであらう。從つてそれは人々の欲求し、需要するところおほき財貨であつたであらう。併しながら、この事實からして、直ちに、それらの家畜が貨幣商品となり得たと主張することは許されない。また子安貝のごとく、宗教的に重要であつたがゆゑに人々の愛好し珍重せしところであつたとはいへ、それが偶々貨幣商品でもあつたといふ事實と因果的に結びつけて、貨幣の必然性を子安貝の持つ宗教的な意義のうちに看取せんとすることもまた是認さるべくもない。蓋し、ある財貨の有用性とかあるひは宗教的な意義とかは、貨幣のいまだ存せざる場合にあつても、なほ、それら財貨に特有の屬性であつたといふことが出來るからである。從つてある財貨をして貨幣たらしめる所以のものは、斯かるものそのものに伴へる自然的屬性のうちに看取さるべくもない。むしろ後天的に、そのものに與へられるにいたつた屬性、歷史的な發展の所產としての特殊な形式規定のうちに求められねばならない。すなはちそれは、特殊な社會的條件のうちに貨幣必然性の根據を看取することであつて、貨幣なる形式規定こそは社會發展の特定の段階においてはじめて現はるべき歷史的な所產たることを明らかにすることである。かくして貨幣の必然性の問題なるものは、貨幣生成の史的事實の單なる敍述、もしくは描寫をことゝするものではない。むしろこれら歷史的な事實のうちに、貨幣の必然性の論理を汲みとつて、それを基礎づけんとすることにある。從つて吾々は、この貨幣の存在の論理的な構成を强調し、昂揚せんがために、貨幣の「生成」なる表現をさけて、とくに、貨幣の「必然性」について說かんとする所以なのである。

併しながら、貨幣の必然性の問題をもつて貨幣の成立の構造をば論理的なる意味聯關において跡づけることであるとしても、このことは、正當にも、貨幣の生成論が貨幣の「理論」の體系總體を構成

する一つの部分體系たるべきことを、同時に、含意せるものとなすことが許されるであらうか？　貨幣の必然性の究明が貨幣の「理論」の有機的構成の一部分となり得るやいなやの問題と、貨幣の論理的必然性の問題とは、もとより嚴密に區別さるべき二つの事柄であり、從つてまたそれらはいづれも別個に相獨立して論ぜらるべきものゝごとくである。さればこそ貨幣の本質が論者にあつては、しばしば、貨幣の必然性の問題とは全く無關係に、それ自體獨自に究明されたことも決して稀なことがらではなかつた。いな時には、それら二つの問題がたがひに相矛盾せるがごとき立場において、論ぜられしことすらもあつたのである。このやうな論者に從へば、貨幣の「理論」とは、貨幣の基本的機能を直截に考究し、貨幣の價値を吟味し、さらにそれが變動を論ずることにあるもののごとくである。そうして貨幣の心然性の問題は、貨幣そのものゝ理論的考察のうへには重要なることがらであるとはいへ、いまだ貨幣の「理論」の部分內容を成せるものではないとされてゐる。

かくのごとき見解は、それが立てるところの方法論的な根據においては、著しく深きところに根ざしてゐるもののごとくである。すなはちシュムペーターは、ものゝ本質がそれの歷史的な生成のうちに看取すべからざることを常に强調する。そうしてそれが如何に發展しきたつたかといふことと、それが現在において如何なる作用をなしてゐるかといふことは、全く相こととなる別個のことがらなりと述べてゐる(註一)。從つて彼は貨幣の生成の歷史的なる說明を極力排擊する。もちろん貨幣存在の論理的な必然性をば交換機構のうちに看取してゐるとはいへ、なほ、貨幣の必然性の問題をもつて貨幣本質論の理論的內容となすことには反對してゐるがごとくである(註二)。人々はこゝにシュムペーターの心理主義的な認識論への反對的な立場を看過してはならない。

註一　Vgl. J. Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. 2. Aufl., München u. Leipzig 1926, SS. 113-114. なほ拙著「貨幣本質の諸問題」一五六―一五七頁參照。

註二　私は、かつて、シュムペーターの貨幣生成論が論理的なる必然論なることを示した。そうしてそれが貨幣本質論の理論體系の構成的部分なることをもつて自明のことがらとなし、彼の貨幣理論の交換論的なる性格を强調したのであつた。從つてそこでは、貨幣必然性の問題が貨幣の「理論」の內容として認むべきやいなやといふ、かゝる理論的價値如何の問題の存在が、まつたく看過されておつた。それといふのも、シュムペーターにあつては貨幣の必然性が間接交換の必然性のうちに看取されて、彼の貨幣の本質的機能觀もそのうちに基礎づけられてゐるかのごとくであつたからなのである。

しかれどもシュムペーターは、貨幣の必然性に關する見地が、貨幣の基本的機能觀を如何に制約するか、從つてそれら二者の間に密接不可離な聯關の存することについては、實際、ふかく考ふるところがなかつたやうに思はれる。そうしてむしろ、貨幣の必然性に關することがらが貨幣「理論」の內容的構成の一部分であるとなすことに對しては、彼も、畢竟は、消極的なる態度をとれるものと斷ずべきであらう。このことは貨幣必然論についてのシュムペーターの理解の不充分なることに因ることではあるが、それはまた彼が交換論的なる貨幣理論の樹立に成功するを得なかつた根本的な原因であつたとも言ふことが出來やう。拙

著「貨幣本質の諸問題」第二章　第三節參照。

併しながら貨幣の必然性に對する立場の如何は貨幣の本質的なる機能についての態度を決定する。後者はまた後者で貨幣の價値の問題に關して制約をあたへる。これら三つの問題は相互に制約し、規定しあひて、もつて貨幣本質論の全體を構成するのである。從つて貨幣の必然論における一定の立場は、貨幣の根本的機能論における一定の立場を要求し、さらにまた貨幣の價値の理論における特定の見地に通ずるものなのである。たゞ自己の立場に徹底せざる論者にあつては、それぞれの問題において、相互になにら內的な聯關を有せざる見地に立ち、時にはたがひに相矛盾せるがごとき立場をも包攝して說かれてゐる。そこには、一見、まことに多樣なる貨幣本質論が看取し得られるやうに思はれる。併しこれらはいづれも自己の立場を反省せざることより生じたる假象であるに過ぎない。斯くして貨幣の本質如何の問題は、從つて貨幣の質的靜態的な問題は、これら三つの側面の究明を通じて、はじめて、明らかにされるものと言はねばならない。さうしてそれら三つのものは相互に有機的なる全一體をなし、もつて貨幣本質の「理論」に內包せらるべきものなのである。このことは、まことに、肝要であつて、貨幣の理論の多くが、その生產性を誇示し得ないのは、一つに、これら相互の內的聯關を看過せることに緣由せるものと言ふべきであらう。

私は以下において、從來の貨幣の必然性に關する諸見解をば概觀し、これを批判して、第五章において展開せらるべき貨幣必然性の問題とするところの奈邊にあるやを明らかにしておかう。

第二節　貨幣の因果混淆的生成論

交換形式のうちでもつとも單純なる直接的卽時的交換、あるひは物々交換は、非常なる煩瑣と困難とを伴ふものであるとされてゐる。それは、まづ第一に、交換當事者がおたがひに交換し、獲得せんとするところの財貨をそれぞれ持ち合せてゐるといふことが非常に稀有のことであり、かつまたまつたく偶然のことがらに屬するからであつて、こゝに生産物の直接的交換の成立を阻害すべき事情としての謂はゆる質的齟齬がある。併しかゝる質的な齟齬がかりになき場合を想像し得ても、なほ交換財貨相互の量的な一致は必ずしも容易ではなくして、直接交換を阻害すべき第二の事情として、こゝに謂はゆる量的な齟齬が存するのである。かくして生産物の直接的な卽時的な交換の成立することが、如何に偶然的な事由に依存し、それの困難いなまつたく不可能ですらもあることが論者によつてしばしば强調されてゐる所以なのである。

かくのごとき直接的なる生産物の交換が當面し、逢會すべき不便や不都合のうちに、かゝる交換を媒介し、これを容易ならしむべき貨幣の生成することを說く論者は、昔より非常な多數にのぼつてゐる。そうしてそれらの論據にはそれぞれ多少の差異があつて、雜多なるニュアンスを示してゐるとはいへ、いづれも大同小異のものである。彼等はその主張するところの必ずしも架空ならざる所以をば實證し、裏書するものとして、未開社會旅行記などから色々な材料を援用してゐることは、吾々のよく見受けるところである(註一)。

註一　Z. B., C. Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 2. Aufl., Wien u. Leipzig 1923, SS. 245-246 Anm.; C. Gide, First principles of political economy. London 1922, pp. 49 et seq.; W. S. Jevons, Money and the mechanism of exchange. 25 ed., London 1923, pp. 1 et seq.

例へばしばしば多くの著書において引用されてゐるところのカメロン中尉のアフリカ大陸橫斷記の一節には、貨幣なき未開社會において所要の物件を入手することの如何に煩勞のおほくかつ困難のことがらであるかゞ、非常に面白く描かれてゐる。すなはちそれに從へば、——

「タンガンイイカ(Tanganjika)湖巡航をひき續き行ふがために、私は、まづ、一隻の小舟を手に入れなければならないと考へたのである。……ところでサイド・イブン・ハビブ(Syde ibn Habib)の所有してゐるよいのを見付けて……、借り賃は減法高いものではあつたが、彼の代理人からその小舟を借りることゝした。その賃借りの手續がまた面白いものなのであつた。サイドの代理人は象牙で支拂ふことを要求したのであつたが、私は相憎くとそれを持つてはゐなかつた。併しモハメッド・イブ

ン・サリブ（Mohamed ibn Salib）が象牙を所持して居つて、布を欲しがつてゐることが分つた。それでも私は布を持ち合せてゐなかつたものだから、モハメッド・イブン・ガリブ（Mohamed ibn Gharib）が布を所持してゐるが針金を欲してゐるといふことを聞知するまでは、どうともするすべがなかつたのである。幸に私には針金の持ち合せがあつた。そこで私はモハメッド・イブン・ガリブに必要とするだけの針金を與へ、それと引きかへに彼はモハメッド・イブン・サリブに布を手渡し、モハメッド・イブン・サリブは、今度は、サイド・イブン・ハビブの代理人に望みの象牙を與へたのである。かくして彼は私に小舟の使用することを許してくれたのであつた」と（註二）。

註二　V. L. Cameron, Across Africa. 1877, I, pp. 246 et seq., zit. bei C. Menger, Grundsätze. S. 245 Anm. und C. Gide, First principles. pp. 49-50.

このやうな面倒なかつまた迂回的な過程を經て、はじめて、交換の所期の目的が達成せられ得るに過ぎない。從つて即時的、直接的交換にともなふ質的な並びに量的な齟齬の克服は、まつたく容易なるわざではなく、交換の圓滑なる遂行はたゞ間接的交換においてのみ可能となるのである。そうしてこの間接的な交換を媒介する財貨が一般に需要せられるところのものであればあるほど、間接的交換そのものはますます圓滑に行はれることゝならう。この間接交換を媒介する財貨は、あるひは人々の普遍的な消費の對象であるところの食料品であつたり、あるひはその他の生活必需品である場合もあれば、また稀少な寶石や貴金屬のごとく、たゞ少數の人々の裝飾欲望を滿し得るにすぎざるものであつたこともある。間接交換のこのやうな媒介財貨が媒介財貨として固定化することによつて、こゝにその財貨は貨幣となるのであるとされてゐる（註三）。

註三　Z. B., C. Gide, First principles. pp. 49 et seq.

人はこのやうな貨幣生成の牧歌的な情緒のうちに、因果の混淆を看取することが出來るであらう。後に述べるがごとく、原始社會における交換なるものは、たゞある一種の生產物と他の一種もしくは數種の生產物との間における交換であつたにすぎない。それの特質が、特定生產物と特定生產物との交換であるといふ點に存してゐるとされてゐる。といふのは原始社會にあつては交換はまつたく偶然であり、偶發的なる現象にすぎなかつたからである。そうして交換に提供されるものは、單に餘剩生產物のみであつて、相互に相手の餘剩生產物を欲する時にのみ交換が行はれたるに過ぎない。從つて論者が强調するがごとき、生產物の直接的交換に伴ふ質的なおよび量的な齟齬なるものは、生じ得べくもないであらう。たゞこのやうな原始的交換の特異性を顧みることなき論者にあつては、ながき發展の結果たる高度に發達せる交換經濟の意識をもつて、未開社會の狀態を律し、傳統にとらはれたる

原始的直接交換のうちに、すべての財貨がすべての財貨と交換されてゐる現在の交換を見出さんとするがごとき時代錯誤の犯せるものあるを看取し得られるのである。ことにヂェボンズの物々交換論にいたつては、このやうな過去と現在とを同一視し、原因と結果とを混淆せんとするところの主張のもつとも典型的なるものであると言ふことが出來る。

すなはちヂェボンズの説くところに從へば、バリーのある女歌手のッェリィー嬢（Mademoiselle Zélie）が歌行脚においてある島で得たる報酬は、フランス貨幣にしておほよそ四千フランに價ひするところの豚や鷄やそのほか多數のバナナ、レモンなどの果實であつた。併しながらその島には貨幣なるものが僅少であつたがため、それらのものを貨幣にかへることが出來ずして、遂いには一人で食べきれなくなり、その果實でもつてかの豚などを飼育するに費消したといふのである。またマレー群島における旅行中のこと、そこには貨幣がなかつたのでそれがため食料品の獲得に多大の困難を感じ、小刀とか布などの類をもつて食料品にかへねばならないといふ斯かる不便について説いてゐる。そうして現在の文明國にあつては、このやうな幼稚な交換の方法の不便も知らずして、はやくより貨幣の使用になれてそれの莫大な利益を意識せず、たゞまつたく異なれる社會狀態を回想してはじめて貨幣のなき場合に生ずべき諸々の困難を理解することが出來るのみである。この不便、困難を理解して、また、貨幣の數種の本質的な職務も知り得るものであつて、種々の商品にたいする評價や分配や契約の手段たる貨幣がなくしては、近代社會の繁盛は期すべくもないと述べてゐる（註四）。

註四　Cf. W. S. Jevons, Money and the mechanism of exchange. pp. 1 et seq.

かくしてヂェボンズは、貨幣なき場合に現代經濟社會の逢着すべき不便や困難からして過去の未開社會を推論し、もつて生産物の直接的交換の伴ふべき不便や不都合のうちに貨幣の生成すべき根據を看取せんとするのである。併しながらこのことは直ちに是認さるべくもない。むしろ左右田博士も言へるがごとく、「貨幣の生成するは、直接物々交換にあたり幾多の不便とかつ不都合とをまぬがれ得ざるがゆゑにあらずして、一つに、現在の交易組織において、貨幣が撤廢せられたる場合、おそらくかかる不便を忍ばざるを得ざるべしと言ひ得むのみ」である。かゝる見解はまことに、「過去、現在の狀態を同一に觀むとする、かの古典經濟學通行の缺點に惱みつゝあるもので」、原因と結果とを混淆し、部分と全體とを同一視せんとする謬論にすぎずと言はねばならないであらう（註五）。

註五　左右田博士「クナップ新貨幣學説と貨幣の本質」同博士全集　卷第二　九六―九七頁參照。

づれも過去の未發達なる經濟狀態と現在のごとき發達せる經濟狀態とを同一に視んとするの誤りを犯し、原因と結果との混淆をあへてせんとするものにほかならないのである。そうして貨幣をもつて單に間接交換の媒介者であるとなし、貨幣のこの側面にのみ固執するところの論者は、ほとんどこのやうな貨幣の生成觀をとつてゐるものゝごとくである。もちろん斯かる貨幣生成の必然論のうちにあつても、色々なニュアンスが存するのである。すなはち、同じく生產物の直接的交換にともなふ諸種の困難を克服すべきものとし貨幣は生成するものであるとはいへ、この場合あるひは國家の干與を必要條件となし、かゝる克服手段として、國家または法律によつて制定されたるものが貨幣であると說くものがある。またあるひは斯かる困難を回避せんとする人々の協定の所產として貨幣を論ずるものも存する。これらはいづれも同じ貨幣の生成觀に屬するものであつて、それの亞種たるに過ぎない。

かくのごとく、貨幣をもつて直接交換に固有の不便や困難を克服せんがための人々の作爲の所產なりとなし、彼等の意識的活動の創造物なりと說くことは、經濟的な歷史的な範疇としての貨幣の特種性を抹殺するものといふべきである。しかれども斯かる見解はその淵源するところまことに古く、すでに遠くアリストテレスの昔に溯りうるがごとくであつて、爾來、おほくの論者によつて支持されしところであつた。

アリストテレスはその著「ポリティカ」において、貨幣の起源に關し、つぎのごとくに論じてゐる。すなはち、

物にはいづれも二つの用途がある。それらの用途はともに物そのものに屬したものなのである。併しながらその一つは物そのものに固有ではあるが、他は物の第二次的な用途なのである。すなはち、物の消費對象としての用途と、交換のための用途とがこれである。そこで交換は、最初は、一方の者が所有することあまりに少なく、他方の者は過多であるからして、そこにおのづから生ずるわけなのである。自給自足の家族社會にあつては交換なるものは起らない。しかれども家族社會が發達し、分化してきて、それらおのおの家族が異なれるものを所有するにいたつて、それら家族相互の間に交換のことが起るにいたるのである。この單純なる物々交換からして複雜なる交換が生じてきたのであつた。それぞれの國民がお互ひに依存的となり、お互ひにその必要品を輸入し、餘剩物を輸出するに及んで、貨幣（νόμισμα）が、必然に、使用せられることゝなつた。それといふのは、生產の必要品なるものは、必ずしも、その輸送が容易でなく、從つて物々交換は困難とならざるを得ないからなのである。そこで人人は彼等相互の取引において、例へば鐵とか銀などのごとき實質的な有用物であつて容易に生活の目的に用ひることの出來るものをば、使用せんと協定したのである。それの價値は、はじめは、大いさおよび重さによつてはかられたのであつたが、後にあつてはそれらの煩勞も省き、價値を示さんがために、そのうへに極印がおされたのである（Aristotle. Politica. The works of Aristotle. Ross' ed., 1921. Vol. X. Bk. 1. 9. 1257a.）。

このやうに貨幣とは物々交換を容易ならしむべき取引の媒介手段として人々の協定によつて出來たのであるが、さらにアリストテレスは價値の尺度としての貨幣の生成に就いてもその便宜論を次ぎのごとくに說いてゐる。

すなはち、すべて交換せられるものはともあれ比較可能のものでなければならない。この比較の可能なるがために貨幣は導入されるにいたつたのである。そうして貨幣はある意味において一つの媒介物となる。蓋し貨幣はあらゆるものを測定し、それゆゑに過剩と不足とを、すなはち幾足の靴が一軒の家屋に、あるひはある與へられし分量の食料に等しきかを測定するからである。このやうに相互の提供するものとは必ず相等しくしなければならないが、もしも相等しからざる時には、そこに交換もなければ交易もなくなるであらう。而してこの公正な割合なるものは、財貨がともかく相等しくなければ生じ得るものではない。從つてすべての財貨はある一つのもので測定されなければならないわけなのである。この測定の單位なるものが、實はすべてのものを結合させるところの需要（けだしもしも人々がおたがひに財貨をまつたく必要としなければ交換なるものは起るものでは

ないから）なのであつて、貨幣こそは慣習によつてこの需要の一種の代表物となつたのである。かくして貨幣はそれの存在が自然によるものではなく、むしろ慣習的に、從つてまた法律（νόμος）に因るものであり、かつまたそれが吾々の自由に變更し、無價値のものたらしめることすらもが可能であるがゆゑに、貨幣はノミスマ（νόμισμα）とも呼ばれてゐる所以であると（Aristotle, Ethica Nicomachea, op, cit. Vol. IX. Bk. V. 5. 1133a. 1133b.）。

こゝに謂はゆる貨幣（νόμισμα）とは法律によつて定められたる一定の極印を帶びたる貨幣すなはち法貨とも言はるべきものゝごとくである。從つてアリストテレスがこゝに述べてゐるところのものは、法貨の起源であつて、經濟的な意味における貨幣、すなはち交換手段としての貨幣なるものも、同樣に法律や協定の所產なりと考へて居つたかいなかに關し、なほ問題が殘るであらう。それはともかくとしても、アリストテレスが貨幣をもつて物々交換の不便を除去し、取引の圓滑をはかるものとして生成せしものなりとなせることに就いては、これを疑ふを要しないであらう。

貨幣をば交換に必要なるものとして生じたとなすところの見解は、もちろん、プラトンにおいてもすでに看取せらるところである。すなはちプラトンの主張するところに就いて見るに、――國家の生成は人類の缺乏に基づけるものなのである。すなはち人類は多くの欲望を有し、自己のみをもつて滿足をなし得ず、お互ひに助け合はねばならないのである。これらお互ひに扶助者たちが相集まつて國家が形成されるのである。そうして彼等は相互に交換しあひ、もつて相互の需要をみたすが、これがために彼等は市場と交換の目的のための貨幣標章とを必要とするであらうと（Plato, The Republic. Jowett's ed., 1888, Bk. II. 369-371.）。

アリストアレスにあつてはプラトンにおけるよりも、貨幣の生成觀が明確に表示せられてゐる。それは貨幣の生成が交換の技術的困難に依據せしめたる合理的解釋であり、貨幣存在に關する一種の便宜理論（Convention theory of money）より以上に出ずるものではない。それにも拘らず貨幣生成の社會的條件として漠然とではあれ、物の二つの用途に言及してゐることは、彼の卓見と言はねばならないであらう。ことに彼の天才は、諸商品の等一性なきところに交換の起り得ざること、その等一性の通約性なくして存在し得ざることを洞見して、一物と交換に與へらるべきものが、他の財貨であらうと、あるひはそれの貨幣價値であらうと、そこになにらの本質的な差異なきことを說いてゐる。それにも拘らず、彼は質的にかくも著しく相異なつてゐる諸々の財貨が通約されるといふことは眞實にはあり得べからざることがらであるとなしたのであつた。これはアリストテレスの生活した社會が奴隸經濟の社會であつたといふ歷史的なる限界が彼を制約したによるものとされてゐる。それはともあれ、彼が多種多樣なる商品間の質的等一性をもつて眞にあり得べからざるものと考へたればこそ、そうしてただ必要に應じて諸商品の充分に通約し得ることを說けばこそ、この通約を可能ならしめ、等一化せしめ得るところの貨幣をもつて協定の所產となすにいたれる所以のごとくである（Aristotle, Ethica Nicomachea. Bk. V. 5. 1133b.）。

アリストテレスのこのやうな貨幣生成觀は、時代により幾多の紆餘曲折はあれ、一つの傳統的な見解となつてながく奉持され、近代においても斯かゝる見解をとれるものきはめて多し。たゞし現代にあつては、貨幣の生成が物々交換の困難に出づるとは言へ、協定やその他人爲の所產なりとする一點は漸時否定されるにいたつた（Vgl. Constantin Miller, Studien zur Geschichte der Geldlehre. Die Entwicklung im Altertum und Mittelalter bis auf Oresmius. 1925; A. E. Monroe, Monetary theory before Adam Smith. 1923; Montgomery Butch rt, Money, selected passages presenting the concepts of money in the English tradition 1640-1935. 1935; C. Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Erster, allgemeiner Theil. 1871.（安井琢磨譯「メンガー國民經濟學原理」二五八頁以下參照。）。

貨幣の生成をもつて、それがなにらかの人間の意識的活動の所產なることにその說明の根據を求め

んとするところの前掲のごとき謂はゆる「合理的解釋」に反對して、貨幣の生成の自然發生的なる所以を强調せんとするものに、メンガーやヘルフェリッヒのごときがある。もちろんメンガーの貨幣の生成觀は、この點においてはヘルフェリッヒのそれとその軌を一にせるものと言ふことが出來るのではあるが、併しメンガーの生成論の特徴は次節において詳說するがごとく、むしろこの點に存するのではないからして、こゝにはもつぱらヘルフェリッヒの所說について觸れておくことゝする。

しからばヘルフェリッヒは貨幣の生成の非人爲性、それの歷史的產物なることを如何に說かんとするか。彼に從へば貨幣とは、特定の經濟社會のもとに、生產物の直接的交換の逢着すべき諸種の困難を排除し、もつて交換を容易ならしむべき媒介的手段として、自然的に發生したるものであるといふにある。それは、なにら人間の作爲的なる所產であるのではなくして、自然的に生成せる社會的制度なのである。この點さきの謂はゆる「合理的解釋」とは根本的に異なるところであるとされてゐる(註六)。併しながら貨幣の生成の自然發生的なること、それの非計畫性、あるひは人間の無意識的行動の所產なることをもつてしても、ヘルフェリッヒの貨幣生成觀が、いまだ、因果錯倒的見解の一種なることにはなにらの變りもない。

註六　Vgl. K. Helfferich, Das Geld. 5. Aufl., 1921. SS. 218, 245, 219 et passim.

なほ拙著「貨幣本質の諸問題」第一章、第二節「貨幣の生成」、ことに二八頁以下參照。

ヘルフェリッヒが貨幣の生成をば分業と私有財產とのうへに立てる特殊の經濟社會制度との關聯において捉へ、貨幣の歷史性を强調せる點は、まことに、卓見なりと言はねばならない。この點、他の因果混淆的貨幣生成觀をとれる論者と同日に論ずべくもなき所以である。それにも拘らず、貨幣生成の社會的條件の特殊性に想到せるのみであつて、かゝる特定の社會狀態のもとにおける交換の一定の發展段階にあつて、そこに必然的に生ずべき內生的な交換阻害の事情に突き入ることを彼は少しもしてはゐないのである。そうして現在のごとき經濟社會から貨幣の消失せし場合に、當然かんがへらるべきところの諸々の不便や不都合に顧みて、それらをそのまゝ過去の物々交換のうちに移してもつて、貨幣の生成の必然なる所以を論證せんとせしものなのである。この場合の交換の當面すべき諸種の障害なるものは、實は、發達せる交換事情から生じたるものであつて、物々交換の當初にはかゝる交換阻害の事情なるものはなにら考へられ得るものでは決してないのである。このやうな交換阻害の事情の特殊性の看過にこそ、彼の貨幣生成論の因果混淆論的性格が存してゐるのである。

生產物の直接的交換の段階にあつては、いまだ、ヘルフェリッヒの想定するがごとき交換阻害の事情なるものゝ發生を看取すべくもない。もともと原始社會にあつては交換はいまだ偶然的であり、經

濟生活の規則的な、原則的な社會的過程とはなつてゐない。生産はもつぱら自給目足の基調のもとに行はれ、その生産物をもつて交換に供するがごときはかなつた。たゞ餘剰生産物のありたるときにおいて、はじめて、これが交換に供せられしこともあつたといふに過ぎず。しかもこの交換はまつたく偶發的な例外的な現象であつて、それはつねに個人間の交換ではなく、むしろ團體と團體との交換をもつてはじまつたと言はれてゐる。從つて交換にして二次的な、偶發的な現象たるかぎり、交換物相互間の質的齟齬とか、量的齟齬とか、論者の想定するがごとき交換取引を阻害すべき事情のごときは本來こゝでは起り得べくもないのである。このやうな交換阻害の事情は、むしろ、交換の一定の發展段階において、すなはち交換がすでに原則的な、規則的な社會過程として現はれるにいたれる段階において、はじめて、現はれるところのものたるにすぎない。この交換阻害の事情の特殊性を注視せざるところにヘルフェリッヒの根本的缺陷が存するのであつて、これは分業と私有財産制にもとづける經濟社會の本質についての洞察の不充分なることに基因すべく、このことはまた財貨と商品との間の本質的な差異性に對する自覺の不徹底なることのうちにも、よく看取し得るところである。この點は貨幣生成の因果混淆論をとれる論者に共通するところの根本的な缺陷である。

もちろんヘルフェリッヒの見解は、同じく貨幣の因果混淆的生成觀のうちにあつても、他のものゝ追隨を許さゞる卓越性をもつてゐる。貨幣の歷史性、それの經濟的な形式規定などを强調せるがごときは、その例である。しかれども貨幣の發生を單に特定の社會事情に關聯せしめたるのみであつて、そこに考へらるべき交換阻害の外見に捉はれて、それが眞にその特殊の社會事情に如何に制約され、そのうちに基礎を持てるかを追求することもなく、諸々の不便、不都合をもつてすべてを代辯せしめて、直ちにかゝる困難を除去し、交換を媒介すべき手段としての貨幣に想到してゐるにすぎないのである。しかしながら交換が一定の發達段階に達したるときに生ずべき困難は、直ちに間接的交換手段を必然ならしむるものではない。また間接的交換手段をもつて除去し得るがごとき交換阻害の事情なるものはあり得ない。まことにこれら交換阻害の事情こそは、財貨が商品たる特定の歷史的な形式規定をとるにいたつたことのうちに含まれてゐるのであつて、こゝに生産物はその生産者にとつては商品、すなはち他物購買力の保持者、換言すれば直接的交換手段となるのである。それは決して間接的交換手段となるのではない。しかるにこの交換阻害の事情の眞の意味を捉へ得なかつたヘルフェリッヒは、直ちに間接的交換手段の生成の必然を結論したのであつた。これ貨幣經濟または交換經濟の特殊性の認識にして不充分なりしに基因すべく、また財貨の商品への形式規定の轉換の意味を深く反省せざりしに因由せるものと言ふことが出來る。

かくしてヘルフェリッヒは、貨幣の生成の非計畫性、それの自然發生性の强調によつて、貨幣の本質の把握に一歩を進めたりとはいへ、それが發生の特殊社會條件の認識の不充分は、ついに過去と現在とを同一視し、原因と結果とを混淆する時代錯誤的なるあやまちを犯すにいたつたことは否定すべくもない(註七)。

註七　拙著「貨幣本質の諸問題」三二頁以下參照。

第三節　貨幣の自然的生成論

メンガーは、從來の貨幣生成觀のごとく、單に、生産物の直接的な交換が當面すべき諸種の不便や困難を除去し、これが克服の手段としての貨幣のそこにおのづから生成するにいたるべきを說くことには、滿足しなかつた。彼はさらに一歩を進めて、一定の財貨がしからば如何にして貨幣となるにいたつたかの事情をもあはせて、闡明せんとしたのであつた。そうしてこの點にメンガーの貨幣生成觀の中心的主張がおかれてゐるのである。すなはち彼は、まづ、往時、貨幣として用ひられしことのある財貨に關して、それがなにゆゑに貨幣となるにいたりしかについての從來の主張にあき足らざる所以を、かく述べてゐる。

交換取引をなすにいたれるすべての民族の市場において、家畜や獸皮や寶貝や、さらにカカオ豆や磚茶などの財貨が、あるひはまたさらに未鑄のないしは鑄造されたる金屬のごとき特定の財貨が、漸時に、あらゆる人達によつて、よろこんで商品と交換せられ、而かもそれらの財貨を直接欲せざる人達や、またはそれらの財貨をばすでに十分に持つてゐる人達によつてさへ受けとられるといふこと、要約すれば、交換取引市場において、特定商品がすべての他の商品のうちから抽出されて、交換手段、

すなはち最廣義の「貨幣」になるといふことは、如何に說明さるべきか？

從來これが答へとしては、貨幣をばあるひは「交換のために協定された標章」（プラトン）であるとか、あるひはまた、貨幣を「協定ないしは法律の所產」（アリストテレス）なりとなす見解が、往々、行はれたのであつた　併しながらメンガーに從へば、かゝる見解はこれを根本的に誤まれるものとして却けることは出來ないとしても、いまだ十全のものとなすことは許されない。かくして貨幣理論の使命とするところは、むしろ、經濟的文化のある發展段階では、合意や立法行爲がなくとも、特定の商品が他の商品群のうちから抽き出されて貨幣となる過程を說明することによつて、貨幣制度を理解せしめることに存するものゝごとくである（註一）。

註一　Vgl. C. Menger, Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der politischen Oekonomie. The collected works of Carl Menger. Vol. II. London School of Economics and Political Science. Series of reprints of scarce tracts in economic and political science. No. 18. 1933, SS. 172 ff.

メンガーは、そこで、まづ物々交換の當面すべき障碍に就いて述べ、これが除去すべき手段としての貨幣の生成に關して、次のごとく說明してゐる。

すなはち、物々交換にはこれを狹溢なる限界に制約すべき大いなる障碍が存するとはいへ、その限界を打破し、かつ諸種の障害を除去すべき手段は存在してゐる。詳言すれば、非常に一般的な欲望に應ずる特定の商品に對しては、他の商品に比し、市場のより大なる需要があること、從つてこれらの財貨を所持しておれば、賣れゆきの少ない商品を市場に出す場合よりも、より容易に、その所期の財貨の提供者の見出されることが看取された。例へば遊牧民は、それぞれの經驗から、家畜を市場にもつて行けば、わづかな受容者しかもたない他の商品を市場にもつて行く場合に比し、より容易に、この家畜を替取らうとする多數の人々のうちから、彼の渴望せる財貨の提供者を見出しうることを知つてゐた。かくして前揭のごとき意味で販賣可能性のより少ない財貨の提供者にとつては、それを自己の所要財貨と交換せんとするのみならず、さらに所期の財貨の入手困難なる場合には、彼自身の直接欲するところではなくとも、彼の所有財貨よりは販賣可能性のより多い財貨と、まづ、交換しておかうといふ考への生ずることは、自然と言はねばならない。蓋し、彼はこれによつて、所期の目的を直接的にではなくとも、とにかく達せられたからである。從つて、個々の經濟主體は、その經濟的關心によつてその個人的利害の認識のたかまるにつれ、あらゆる合意または立法的强制がなくとも、いな、公共の利害をもまつたく顧みることなく、その商品を他より賣れゆきの多い商品に對して讓り渡すことゝなる。よし直接の使用目的のためには、かゝる商品を必要とせざるときにあつてもさうする。か

くしてこのやうな慣習が確立してゆくに從つて、一定の諸財貨が、しかも時と所の事情に應じて、もつとも賣れゆきのある、もつとも可搬性、耐久性、可分性、のある財貨が、何人によつても交換において受取られ、それゆゑにまた、「流通する (gelten)」、すなはち提供する (leisten)、「支拂ふ (zahlen)」といふ言葉から、吾々の祖先が貨幣(Geld)と呼んだ財貨が、總べての他の財貨と取り替へられるにいたつたのである(註二)。

註二　Vgl. C. Menger, Untersuchungen. op. cit. SS. 174–176.

かくして、貨幣制度なるものは、他の社會制度とひとしく、國家的な、宗教的な影響などに依つても、ことに立法的にも發生することがあり得るし、あるひはその自動的な發展において促進も、もちろんまた、阻害もされることがあり得る。しかしながらそれにも拘らず、貨幣のこの發生の仕方は、唯一のものでも、またもつとも根源的なものでもない。貨幣は、もともと、法律や、協定によつてではなくして、「慣習」に依つて、すなはち社會的に共同生活を營んでゐる同じやうな諸個人の行動に依つて、彼等の個々人の努力の無反省的なる結果として、發生したのである。そうしてついには次第に模倣されて一般に流通するにいたつたのである。そうして、この事情こそは、また、國家の創意あるひは干渉を容るゝ餘地を與ふることゝなつたのである(註三)。

註三　Vgl. C. Menger, Grundsätze. SS. 254–256.

人はメンガーのこのやうな貨幣生成觀のうちに、ヘルフェリッヒと同樣な因果の錯倒あるひは過去と現在との混淆を看過してはならない。彼は、ヘルフェリッヒと同樣に、貨幣をもつて國家や法制の所產となすところの貨幣生成の意識的計畫性にはあきたらず、それの自然的な生成についてはやくより强調するところがあつた。しかれどもメンガーの貨幣生成觀の特徵はもちろんこゝにあるのではない。彼の貨幣生成觀をもつて特にヘルフェリッヒのそれとは異なり、これを「自然的」生成觀となせる所以は、貨幣生成の非計畫性、それの自然發生的な主張に基づくものではまつたくない。むしろ、メンガーは、かゝる直接的交換に伴ふ障害を克服すべきものとして、ある特定の財貨が貨幣となれる根據をば、財貨そのものに內具の自然的性質に求めてゐるのである。すなはち、貨幣生成の非計畫性を積極的に貨幣商品の「自然的」屬性のうちに看取せることこそ、メンガーの見解の特質とも言ふべく、こゝにヘルフェリッヒなどの因果混淆的な生成論と區別せらるべき一點が存するのである。從つてメンガーの貨幣生成論にあつては、その生成の自生的非計畫性を基礎づけるべき規定としての財貨の謂はゆる「市場流通性」なるものが重大なる意味をもつてくる。

然らばその謂ふところの「商品の市場流通性 (Marktgängigkeit, Absatzfähigkeit, Gangbarkeit)」とは

何か？　それは、商品が一般的に――それゆゑあるひは非常價格でとか、ながくぢつと待つた後にはじめて――賣却し得られるといふことに、實は、あるのではなく、商品が通例、その都度、一般的な市場情勢に對應せる、從つて正常的な（あるひは經濟的な、自然的な）價格で賣り得られるといふことに存するのである（註四）。換言すれば、それは商品がそれの有用性のゆゑに一般に需要せられてゐるにも拘らず、それの稀少性のためにその充足の不充分なることに基因すべく、從つて財貨そのものゝ本性すなはちそれの自然的性質のうちにその根抵を有するものと言ひ得られる（註五）。ことに商品の市場流通性は外延的にも內包的にも制約されてゐるところであつて、それの大小を規定するところの諸原因は、いづれも商品そのものの自然的屬性に關聯してゐるものゝごとくである（註六）。これ、蓋し、左右田博士が商品の市場流通性を解して「使用價値」なりとせられし所以であらう（註七）。かくして、貨幣の生成の根據をかゝる貨幣商品の市場流通性のうちに看取するメンガーの見解が、貨幣の自然的生成論と呼ばれる所以は、實に、こゝにいづものなのである。

註四　Vgl. C. Menger, Geld. H. d. Sw. 2. Aufl. 1909, IV. Bd. S. 65 Anm. 1.; ditto, Grundsätze. SS. 232-233 passim, 239, 250.

註五　Vgl. C. Menger, Grundsätze. SS. 247, 249.

註六　Vgl. C. Menger, Grundsätze. Kap. 8. § 2.

註七　左右田博士「クナップ新貨幣學說と貨幣の本質」（前揭全集、卷第二）五三頁參照。

かくのごとくメンガーの貨幣生成論にあつては、その發生の條件がもつぱら貨幣商品の特殊性のうちに求めらるべきものゝごとくである。これ彼の貨幣生成論の「自然的」生成論なる所以が、その生成の「自然」發生的なる點に基づけるのではなくして、むしろ貨幣商品の「市場流通性」なる「自然的」屬性のうちに貨幣の生成を看取することに因由せるわけなのである。從つて彼の貨幣生成論における商品の「市場流通性」の規定が如何に重要なるものであるかゞうかゞひ得られる。いまこの市場流通性に富める貨幣商品について、メンガーの擧ぐるところを見やう。

(i)　つねに、自由となる數量に制限があり、それを澤山に所有することはその人の威信と權力とことにその社會的な地位を表はし、從つてそれに對してはもつとも交換力のある人々の不變的な、かつ實際的に解して、殆んど無制限なる需要（恒常的な公然の需要）の存する財貨。それゆゑに（諸々の事情や、ある地域の人々を支配してゐる考へのそれぞれ異なれるに應じて）、家畜または一定種類の家畜、奴隸、立派な裝飾品（指輪、腕輪、貝殼および貝殼裝飾品）、貴金屬――これに屬するものには、こゝに考察の發展段階にあつては、しばしば、銅や銅合金、錫などがある――

である。

(ii) 國内的な消費に限定されしその國の生産物であり、もつとも普遍的な欲望の對象ではあつても、交換力ある多數の人々の家内經濟においては生産されないか、あるひは豐富には生産されることなき、それゆゑそれに對しては廣汎なるかつ恒常的な、あるひは絶へず繰返し充足さるゝことなき需要の存する國内生産物、例へば武器、裝飾品、綿布、莫蓙、絨氈、穀物、カカオ豆。

(iii) ひろくかつ不變的な需要と使用の財貨にして、ある地域では生産されないか、あるひは豐富には生産されず、そうしてこの事情のために輸入貿易の對象となり、從つてそれに對しては廣汎かつ不變な需要の存する財貨、例へば多くの國々では板鹽、磚茶、貴金屬、もつともよく用ひられてゐる有用金屬(銅、黄銅、鐵、鉛およびこれらの金屬で出來てゐる特殊な腕輪や針金)、毛布、貝殼裝飾品、文身用色素、事情によつては穀物、米、乾魚、綿布など。

(iv) 社會的慣習あるひは現存の權力關係によつて、しばしば繰返されるある一方的な給付に供せられる、または供せられねばならない財貨、(すなはち慣習的に、または强制關係によつて酋長、僧侶、醫師などに對してなされる特定財貨の贈物や貢物(Abgabe)、特定財貨できめられた財産利子(Vermögenszinsen)、殺人賠償金、購買婚(Brautkäufen)に慣例的に提供さるべき特定種類の財貨など)、同時に丁度、もつとも交換力のある社會成員に依つてさなくとも大抵は心から欲求されしこれらの財貨に對して、なは、前掲の目的のため、常に新たに起つてくる特殊な需要が加はる。

(v) 輸出對象物であつて、輸出を媒介する商人の出張所における自然的交換取引の市場では、その都度、國内の人々の一般に欲するところのこれら商人の用意してゐる種々の財貨と交換され得る、そうしてそれによつて國内人にとつては、通例、確定づけられし價格でほとんど無限な(人爲的に造られし)販賣可能性を獲得しかつこの理由からしてまた國内の人々の間では一般に交換取引の際に容易な賣れ口を見出す財貨、例へば獸皮、鱈、安息香塊(Benzoëkuchen)およびその他の重要物産、

などである(註八)。

註八　Vgl. C. Menger, Grundsätze. SS. 249-250.

これによつて示されてゐることがらは、貨幣として從來用ひられたことのある諸々の財貨が、いづれも謂はゆる「市場流通性」に富み、人々の一般に愛好し、需要するところの大なるものであつたといふだけのことである。この點はまつたく疑ひのなきところである。併し問題は、貨幣となれる財貨が他のものに比して、その市場流通性が大であつたかいなかといふことに存するのではない。むしろ

貨幣なるものがなにゆゑに特定の社會では必要とならざるを得ないのかといふことに、問題は存するのでなければならない。かゝる貨幣の必然性の解明されたる後にいたつてはじめて、如何なる財貨がかゝる貨幣となるかが問題とされ得るのである。

おもふに貨幣の生成の問題が、ある財貨の貨幣たる所以をその特定財貨の自然的性質に歸することによつて解かんとするかぎりにおいては、それは、ついに、貨幣の歴史性を抹殺する結果とならう。ヘルフェリッヒも言へるがごとく、貨幣は特定の經濟社會においてはじめて存在し得るものなのである。その意味において貨幣は一つの歴史的な生産物である。然るにメンガーのごとく、ある財貨が貨幣となり得るの根據を、その財貨の自然的性質に歸するとは、貨幣の存在と經濟社會との聯關を無視するの結果とならざるを得ない。それは貨幣の歴史的規定を根據づけるには、貨幣商品の市場流通性のごとき自然的な、したがつて超歴史的なる規定をもつてしては不可能であるからである。こゝに貨幣の自然的生成觀の根本的缺陷があると見なければならない。貨幣生成の問題は、如何なる財貨が貨幣となつたかではなくして、むしろ貨幣はなにゆゑ必要となつたかといふことである。詳言すれば、貨幣の必然性が一定の社會的構造との聯關において究明されることであり、一定の財貨が特定の社會關係において貨幣としての規定を獲得するにいたる所以をその社會の特殊事情からして明らかにすることになければならない。一定の自然的性質を具へたる對象物が貨幣たり得るのは特定の社會的關係の下においてはじめて可能なのであつて、かゝる對象物の自然的性質そのものゝゆゑに貨幣となるのではない。從つてある特定の財貨がその自然的屬性のゆゑに貨幣となつたと說明しても、いまだそのことをもつてしては、貨幣そのものがなにゆゑに必然なるかが少しも解決されてはゐない。そうしてこの後の點こそ貨幣生成論本來の問題なのである。

しかれどもあるなにらかの自然的特質を具へたる對象物が、特定の社會關係のもとにおいて、ひとたび間接交換の媒介物として現はれるにいたるやいなや、かゝる媒介的な機能そのものが、かゝる對象物自體の本性に基づくかのごとき考へが生ずるにいたる。メンガーも貨幣の生成の意識的、計畫的ならざる所以を强調して居るが、その存在がいづれも自然發生的であるものは、往々にして、自然的なもの、事物そのものゝ自然的本性に因由するものと考へられ勝ちである。これメンガーのごとく財貨の市場流通性を說き、あるひはヂェボンズの貨幣理論におけるがごとく貨幣商品の諸性質や種類に就いての敍述に多くの紙幅がさかれて居る所以でもある(註九)。これは一種のフェティシズムであつて、貨幣商品の物的規定性に固執するメタリズムの迷妄は、こゝに發するものゝごとくである。

註九　Cf. S. Jevons, Money and the mechanism of exchange. 25 ed., 1923, chap. IV-VI.

第四節　貨幣の偶然的生成論

貨幣の起源をば交換、すなはち双方的流通の媒介のうちに見る謂はゆる因果混淆的生成觀とか、あるひは物財の自然的性質のうちにかゝる媒介物の生成の根據を見んとする自然的生成觀と相並んで、財貨の一方的流通のうちに貨幣の生成を說かんとする偶然的生成觀が存する。そのもつとも典型的なるものとしては、貨幣の宗教的起原說を擧げることが出來やう。

貨幣の諸機能のうちで、その支拂手段としての規定をもつて中心のかつ根本的なる機能とする貨幣の本質觀は、一般に財貨の双方的流通よりも財貨の一方的流通の歷史的先行性を强調し、こゝに貨幣の起源を看取せんとしてゐる。

內田博士に從へば、「原始の拂渡現象は、その發生の因由種々ありと雖、もと一般に贈遺の性質を有したるものゝごとし、前段に擧げたる交易以外種々なる因由より生ずる拂渡現象のごときは、いづれも皆もと贈遺の性質を有するといふことを得。而して物々交易の場合にありても、そのはじめの有樣は、蓋し當事者相互の贈答に外ならず。すなはち一方の相手は、他の望むところの物を與へ、これに對し、他の對手または先方の所望する貨物を贈りたるなり」と(註一)。このやうな原始的拂渡しの最初の形式は、「該社會におけるすべての主要なる拂渡し得べき財物を、時と場合とにより、いづれも一樣に混用したるものなりとす。……而して最初は拂渡の必要あるときは、適宜にこれら種々の財物（奴婢、各種の器具、武器および裝飾品など）をもつてその用にあて、いまだ一種もしくば數種の特定物品をもつて拂渡の通用品とする慣習なかりしなり。この時にありては、いまだ貨幣あるとなし。貨幣はいまだ萌芽せず、すなはちこの最初の時期は、拂渡の現象あるも、いまだ貨幣なき時期と稱すべきなり」(註二)。

註一　內田銀藏博士「日本經濟史の研究」下卷　五〇九頁參照。

註二　內田博士　前揭書　下卷　五一〇頁參照。

かくして內田博士は、ロッツの謂はゆる諸貨物組合せ貨幣制度の時代（Die Periode eines aus verschiedenen Waren kombinierten Geldsystems）を否定し、それら數種の貨幣のうちより、特定の財貨のみが拂渡の用を果すにいたつてはじめて、貨幣の存在なるものについて語られ得るとしておられる(註三)。すなはち、「一つの社會において、その社會の情況に照し、とくに拂渡の用に適當せる一種もしくは數種の財物あるときは、かゝる財物は、他の財物よりも、自然多くの拂渡の場合において重に使用せらるゝにいたらざるを得ざるなり。而して特定の貨物おもに拂渡に用ひらるゝこと慣習となり、やうや

く時をふるときは、特別なる仕來り、もしくは別段なる理由ある場合の外は、通例一般に拂渡にさいしこの特定の貨物を使用授受することゝならん。このごとくにして普通に拂渡に使用し授受せらるゝ貨物生ず。すなはちこれ初期の貨幣なり」と(註四)。

註三　内田博士「日本經濟史の研究」下卷　五一三―五一四頁參照。
Vgl. W. Lotz, Die Lehre vom Ursprunge des Geldes. Eine methodologische Studie. Jahrb. f. Nationalok. u. Stat. Bd. 62. (III. F. Bd. 7.) 1894 (I.), SS. 344-345.

註四　内田博士　前掲書　下卷　五一四　五一五頁參照。

而して奴婢とか家畜とか、あるひは獸皮、貝殼などのごとく、それぞれの社會における重要貨物にして人々の愛好しなるべく多く保藏蓄積せんと欲するところのものが、拂渡の用に供せられ、それがまた交換の媒介物ともなりたるものゝごとくである。これマックス・ウェーバーも貨幣をもつて本來、欽定的支拂手段(oktroyiertes Zahlungsmittel)なりとなす所以であつて、それはもと交換をなさざる貨幣であつた。交換のなき經濟にあつても、それは、例へば朝貢、首長贈與物、結納料、持參金、殺人罰金、贖罪金、罰金などのごとく、經濟から經濟への給付が存し、從つてかゝるための支拂手段が必要とせられたからである(註五)。

註五　Vgl. M. Weber, Wirtschaftsgeschichte. 1923, S. 209.〔黒正博士譯「マックス・ウェーバー社會經濟史原論」四〇八頁參照。〕

この見解のごとく、「拂渡の通用品」(註六)または「欽定的支拂手段」として偶々選ばれしものが、交換手段ともなつたといふことのうちに貨幣の生成を說かんとするのは、一種の偶然論的な說明たるにすぎずと言はねばならない。これが偶然性を根據づけんがために諸種の主張がなされたのであつて、あるひは贖罪起源說とか、呪的宗教起源說とか祭祝起源說とかはいづれも同一の範疇に屬するものなのである。吾々はまづ、福田博士の贖罪起源說について見ん。

註六　内田博士「日本經濟史の研究」下卷　四九五頁參照。

福田博士に從へば、「歷史上より見れば、單に一方より他方に價値を移轉する一方的流通まづ起り、續いて相互に價値を移轉し合ふ相互的流通發達したるものとす。從つて貨幣は一方的價値移轉のためにまず發生したるものにして、なかんづく神祇、君主への貢獻の資料たるもの最もはやく貨幣となれり」と(註七)。すなはち、わが國の貨幣は身の瀆れを取除かんがために神に獻げるところの祓柱(はらへつもの)に發するものであつて、神に對して罪を贖ふところの祓柱、祓具、祓物、經濟上において他人に對して負ふてゐる債務を決濟するために充てるところの代物、これがすなはち貨幣なのである

(註八)。このやうに貢納もしくは奉幣はもつとも原始的なる價値移轉の現象であるが、これに續いて君主の代表者または神の使徒たる者に對する價値の移轉、すなはち貢獻、婚禮の贈物、罰金などの幾分報酬的な財貨の流通生じ、かくして純然たる双方的報酬的な價値の移轉が行はれるにいたつた。そうしていままで一方的流通の要具であつた諸財貨が、また同時に双方的流通にもその媒介物として用ひられるにいたつた。これが一般に謂はれてゐる交換の要具たる貨幣なのである(註九)。

註七　福田德三博士「經濟原論教科書」一一〇頁參照。

註八　福田博士「經濟學原理」流通篇(下)　改造社版經濟學全集　第四卷　四四三頁および四四六―四四七頁參照。

註九　福田博士　前掲書　五一二頁以下參照。

これによつて明らかなるがごとく、ある特殊の財貨が貨幣となるにいたりし所以をば、原始社會における宗教の重要性、あるひは主長への依存性の大なりしことにかへりみて、貢納奉幣の對象物と貨幣商品との偶然的一致のうちに、その根據を見んとするものである。併しこの見解にあつては、原始社會に於いて一般に尊重せられし財貨が貢納、奉幣の具として用ひられ、それがまた偶然にも事實上貨幣と稱せられしものと同じいことを物語るものにすぎず。貨幣なるもの、存在のなにゆえ必然なるかは、いまだ解決を與へられてはゐない。

また多產的呪的起源說 (Theory of origin of fertilization-magic) とも言はるべきペアリイあるひは西村博士らの貨幣生成觀に從へば、子安貝の持つ呪的宗教的なる意味のうちに貝殼貨幣の起原を看取して居る。すなはち、「(一)古代人はすべての初めに、まづ生命を要求、尊重し、從つて生命の賦與者と考へられた婦人の產官を崇拜した。(二)婦人の產官を崇拜した結果、それに類似した形態を有つ貝殼、とくに子安貝を愛重した。(三)子安貝の愛重は、遂にそれのマジカルな力を信ぜしめ、それを護符として裝飾具に纏絡した。(四)子安貝に類似した貝殼はすべて愛重せられそれらの得難い場所では、その模造品が造られるにいたつた。(五)子安貝ならびにその模造品は、ついに全人類の要求の的となり、從つて生命と對價的位置を占めるやうになつて、貨幣として流通するにいたつたといふ」のである。かやうな子安貝が貨幣となるにいたつたのは、まつたく「裝飾あるひは護符として用ひられるためにそれの大需要を生じ、それと他の諸物質とを交換することが行はれ」るにいたつたがゆゑであつて、子安貝の呪術のうちに貨幣の生成を說かんとするものなのである(註一〇)。

註一〇　西村眞次博士「日本古代經濟」交換篇　第四册　貨幣　三〇―三一頁參照。

併しながらこの見解は、貨幣たる財貨がその當時の社會において一般に需要せられしものなること、しかしてその需要せらるゝ所以が、その財貨の自然的屬性のうちにではなくして、それが偶然もつて

おつた所の宗教的な意味のうちにあることを指示せるに過ぎない。問題は、貨幣たる財貨の需要せらるゝことの多き根據が、その財貨そのものゝ自然的性質にあるか、あるひはその宗教的な意味に存するかではなくして、かゝる特定の財貨がなに故に貨幣たるの關係規定の把持者となるにいたつたか、すなはち貨幣そのものがなにゆゑに必要となつたかといふことになければならない。すなはち、かゝる特殊の財貨が常に貨幣たるのではなくして、それが一定の歴史的な社會的な條件に依存することが明らかにされねばならないのである。このことは同じくラウムの貨幣生成觀にも言はれ得るところである(註一一)。

註一一　Vgl. B. Laum, Heiliges Geld. Eine historische Untersuchung über den sakralen Ursprung des Geldes. 1924.

第五節　結　論

吾々はしばしば繰返し強調せしがごとく、貨幣の必然性の問題とは、貨幣なる規定の歴史的性、それの發生の社會的條件の究明でなければならない。しかるに從來の諸説の多くはいづれもこのことには想到せずして、あるひは現在の狀態をたゞちに過去にあてはめ、そこに想定せらるべき交換阻害の事情のうちに貨幣の生成を見んとするがごとき原因と結果との混淆に陷り、あるひは貨幣商品の自然的屬性のうちにその生成の根據を求めたり、またあるものは貨幣商品の用途に關する偶然的な事情のうちに看取せんとするなど、いまだその問題の核心に觸れたるものではなかつた。

もちろん、ヘルフェリッヒのごときは貨幣生成の前提條件として、特殊な社會制度に言及するところがあつた。それにも拘らず、彼が貨幣の特殊な社會的歴史性の究明に失敗せるは、貨幣の生成を物物交換の逢會すべき諸種の困難に歸して、それにすべてを代辯せしめてもつて足れりとなし、それらの困難の社會的根據に想到せざりしによるものといふべきであらう。貨幣生成の非計畫性、自然性、非人爲的なることを强調しながらも、結局は、國家の意識的活動の所産となせるがごとき合理的説明と合流せざるを得ざるにいたれるは、實に、こゝに歸因せるものなのである。このことは、やがてま

た、ヘルフェリッヒの貨幣本質觀が指圖證券說的本質觀へといたらざるを得ざりし素因ともなつたのである。

これに反して、メンガー流の貨幣生成觀は、彼も主張するがごとく、交換關係のうちにおける貨幣の自生的なる存在のために、遂に貨幣商品のなんらかの自然的屬性にその生成を歸屬せしむるにいたつたのである。併しながら貨幣の生成の問題は、如何なる財貨が貨幣となつたかにあるのではなくして、むしろなにゆゑに貨幣は必然かといふ點になければならない。財貨の物的規定性のうちにその根據はなく、一定の社會的關係のうちにあるのであつて、この社會的關係の下においてはじめて、特定の財貨が貨幣たり得るにすぎないのである。かくして後、こゝにはじめて、如何なる財貨が貨幣たるに適するかといふ問題がとり上げられるにいたるものと言はねばならない。しかるにメンガーにあつては、この問題をもつて謂はゆる貨幣生成の根本問題とされ、このやうな貨幣商品の物的規定性への固執は、やがて彼の貨幣本質觀をして金屬主義的なるものたらしむるにいたれるがごとくである(註一)。

註一　拙著「貨幣本質の諸問題」八五頁以下參照。

しかるに第三の貨幣生成觀は、宗教上重要なりし財貨がたまたま貨幣商品と同一なりしことよりして、この偶然的事情のうちに貨幣の生成を看取せんとするものなのである。もちろん貨幣の生成するに及んで、宗教上重要なる財貨が貨幣として用ひられるにいたれることは、これを否定すべくもない。併しながらこのことは、なにら貨幣生成の必然性を解明するものでは決してない。前說と同樣に、貨幣生成に關する謂はゞ第二次的なる問題を究明せんとするものに過ぎない。

アッシュレーもラウムの「神聖貨幣論」に對する新刊批評において、謂はゆる「貨幣」と稱せられるがごとき多くの側面のもつたものの起源が、なにゆゑに唯一つでなければならないかその理由の理解に苦しめるものゝやうである(註二)。言ふまでもなく、貨幣商品は時代により、場所により、まことに種々雜多であつた。從つて如何なる財貨が貨幣となつたかといふ意味においては、貨幣の起源はまつたく多樣なものであつた。併しこのことをもつて、多元論的貨幣生成觀の成立の可能なることを意味するものであるとなすことは許されない。蓋し貨幣必然性の理論の問題とするところは、こゝに存するのではないからである。

註二　Cf. W. Ashley's Review of "Bernhard Laum, Heiliges Geld: eine historische Untersuchung über den Sakralen Ursprung des Geldes. Tübingen 1924." The Economic Journal. Vol. XXXV. 1925, p. 289.

然らば貨幣の必然性の問題の中心は何處におかるべきか。前述來くりかへして强調せしがごとく、貨幣はなにがゆえに必要なのか、といふことになければならない。如何なる財貨が貨幣となつたかは

第二段の問題である。前述の諸説に滿足し得ざりし吾々は、然らばこの生成の問題をば如何に説かんとするか。吾々の方向は、諸説への批判のうちに、消極的にではあるが、すべて與へられてゐる。それは貨幣の生成の歴史的必然性を明らかにすることであり、その社會的な前提條件の究明になければならない。これこそが次ぎに述べられるべき貨幣生成に關する私の積極論なのである。私はこれを第五章において説かう。併しこゝに大體の見通しをつけておかう。

すなはち、人間社會の存續のためには、各社會構成員の生産的協力が必要である。この協力の仕方が、社會制度の相違するに從つてそれぞれ異なる。原始共同社會にあつては各構成員の協力の仕方は直接的であつたが、現在のごとき社會にあつてはそれが間接的である。換言すれば、今日の社會では各人の生産的協力は、それぞれの生産物の交換を通じてはじめて實現されるのであつて、この直接的には私的な行爲が、社會的な協力たり得るのは、たゞ交換を通じてのみである。この交換の過程こそは、各自の生産的協力が社會的な協力全體の一部分たることを實證する過程であつて、このことは特定の一商品をもつて總べての生産物が尺度されることによつてはじめて可能となるのである。そうしてこの特定の商品が貨幣となる。こゝに貨幣生成の必然があるのであつて、貨幣の社會的歴史性は、實に、社會的生産への協力の仕方、したがつて社會そのものの特殊性のうちに看取されねばならないのである。

このやうに社會的生産への間接的な參與の仕方は、こゝに必然、間接交換を生ぜしむるにいたり、このことは同時に價値の尺度であり交換の手段なる貨幣を生ぜしむるにいたる。詳言すれば、「間接交換の生ずるは、生産者にとつて使用對象物であつた財貨が、いまや、生産者にとつては使用對象物ではなく、他人のための使用對象物、すなはち商品となつたからである。この商品は他人に移讓されねばならないのであつて、他人の手において使用對象物としてその歸趨を見出すがためには、それが生産者以外の人々にとつて幾何の價値あるか、謂はゞ社會的な値ぶみをされねばならないのである。それは、他の一切の商品とゝもに、特定の一商品によつてその價値を尺度され、その價格を實現することによつて、その特定商品の一定量のうちに、みずからの社會的價値を見出す。こゝに生産者は、みづからの生産物の社會的な價値を實現せし特定の商品の一定量をもつて、自己の欲する他の商品を獲得するのである。かくして、私有財産と分業とのうへに立てる現在の經濟社會にあつては、各獨立の個々の生産者は、交換を通じてのみ、社會への依存性をあらはにし、かゝる社會のもとにあつては、間接交換は必然であり、從つてまた財貨は商品となり、そのうちの特定の一商品は爾餘一切の商品のための價値の尺度となつて、現實に交換を媒介し、みづからは貨幣となるのである」(註三)。

このやうに貨幣の必然性の問題は、貨幣生成の歴史的なる事實の單な記述にあるのではなくして、それら歴史的な事實のうちから貨幣存在の論理的な意味聯關を汲みとることなのである。然るに、貨幣の生成の必然性を條件づけて居るこれら諸々の社會的事情は、あるひは外面的に交換を阻害する事情として把握され、この一面においてのみ考察されて、この外見的な交換阻害の事實が、如何に特殊な社會制度のうちに根差してゐるかゞ究明されざるまゝに終つてゐる。またある論者にあつては、交換の機構のうちに自然發生的な存在を得たる貨幣をもつて、貨幣商品自體の自然的屬性のうちにそれの存在の根據が看取されたり、あるひはその社會の偶然的な事情からして特種の宗教的に重要な財貨が貨幣となつたことのうちに、却つて貨幣生成の必然性を見んとされたのである。かくして貨幣の必然性に關する從來の諸說は、貨幣の必然的な生成を制約してゐる特定の社會的條件に基づける外的な部分的事情に固執し、貨幣生成の二次的な事情をむしろ根本的な條件となせるなど、いづれも、事態の根抵に觸れざる一面觀なりと言はねばならないであらう。

註三　拙著「貨幣本質の諸問題」一六三―一六四頁參照。

第五章　貨幣必然性の論理

第一節　序說

貨幣の生成に關する研究は、これまで、經濟史の取扱ふべき分野として、貨幣の理論の埒外におかれることが通例のごとくに考へられておつた。このやうな傳統の育まれるにいたつたことについては、それぞれ相當の理由のあることであつて、敢てこれを否定しやうとは思はない。そうしてそれはむしろ從來の謂はゆる貨幣生成論なるもの、方法論の罪に歸せらるべきがごとくである。すなはち、それは、何時あるひは如何なる財貨が貨幣となつたかといふがごとき貨幣發生の史的事實の穿鑿が、つねに關心の對象におかれておつたからなのである。

しかしながら貨幣生成の問題とは、もともと、斯かる貨幣史的なる諸事實の單なる穿鑿にのみ存するものではない。いな斯かることにあつてはならないのである。むしろこれら生成の史的事實のうちに貨幣の必然性の論理を汲みとり、それを跡づけることになければならない。この貨幣存在の論理的

性格の究明にこそ、貨幣生成論本來の課題が看取されねばならないのである。吾々はこの貨幣存在の論理的構造を強調し、從來の貨幣生成論にまつはる多くの非難をもあらかじめ回避せんがために、「生成」なる表現をさけて、とくに貨幣の「必然性」について述べんとする所以なのである。

貨幣の生成の問題をもつてこの意味に解するかぎりは、これまでこの問題に對して投げかけられし非難の多くは、一應、これを排擊することが出來る。そうして貨幣必然性の問題が決して經濟史の問題ではないといふ主張の消極的な基礎づけは、これで與へられてゐると言ふことが出來やう。併しながらこのやうに、貨幣の必然性の問題をば貨幣の成立の構造を論理的に跡づけることであるとは言つても、このことはいまだ、貨幣必然性の理論が貨幣の理論の全體系を構成するところの一部分體系たるべきことを理由づけるに足るべき積極的な根據となり得るものでは決してない。貨幣の論理的必然性の問題と、貨幣の必然性の理論が貨幣の理論の有機的構成の一部分たり得るやいなやの問題とは、もとより嚴密に區別さるべき二つの別箇の問題である。「こゝにおいて論者にあつては貨幣の本質が、しばしば、貨幣の必然性の問題とはまつたく獨立して說かれ、時にはそれと相背馳するがごとき見地にたちて論ぜられしことも決して稀ではなかつた。」その主張するところに從へば、貨幣の理論とは、貨幣の本質を直截的に究明し、貨幣の價値を吟味し、さらにそれの變動を論ずるものゝごとくなのである。そうして貨幣の必然性の究明は、貨幣そのものゝ理論的考察にとつて重要なることがらではあるとはいへ、いまだ貨幣の理論的體系の內容を成すものではないとされてゐる。

しかれども私は、貨幣の必然性の問題をもつて貨幣の理論の重要な構成部分であることを强調するものなのである。いな貨幣の必然性の問題こそは、貨幣の本質の問題の一部を成し、貨幣の基本的機能論および貨幣の價値の靜態理論とゝもに、貨幣本質論の三つの內容部分を構成せるものなのである。これら三つの部分的理論は、相互に有機的な聯關を有し、相制約し合つてもつて貨幣本質論の全體のもとに統合されてゐるものである。すなはち、貨幣の必然性の理論における一定の立場は、貨幣の基本的機能に關する特定の見解と必然に結びつき、その基本的機能觀は、また、貨幣の價値の靜態理論を制約してゐるのである。從つて貨幣の基本的機能觀あるひは貨幣の價値に關する見解における缺陷は、そのよつて來たるところがすでに貨幣の必然性に關する見解のうちに胚胎せるものと言ふべきものである。たゞ貨幣の必然性に關する正當なる理論に立ちてのみ、それの基本的機能についても、價値についても、正しき洞察がこゝにはじめて可能となるにいたる。

このことは、シュムペーターなどとは反對に、ものゝ本質がそれの歷史的な發展のうちに看取さるべきものなることを强調する見解によつて、積極的に基礎づけられてゐるのである。このやうな思惟

方法の優位性は、貨幣必然論が貨幣の理論の有機的構成部分たり得ることを積極的に論證するのみならず、貨幣本質論の體系部分たり得ることをも併せて根據づけてゐるのである。併しこの思惟方法に對しては、從來、おほくの反對論があり、哲學の分野におけるものゝ心理發生的なる見方に對して與へられたる批判を想起するとき、思ひなかばに過ぎるものがある。歴史學派の誤謬を痛烈に批判してあますところなかりしカール・メンガーの流れを汲めるオースタリー學派の人々、ことにシュムペーターなどが、ものゝ本質はそれの歴史的なる生成のうちに看取すべからざることを常に强調して、それが如何に發展し來たつたかといふことゝ、それが現在において如何なる作用をなしてゐるかといふことゝはまつたく相異なれる別個のことがらなりと說いてゐることは、これ蓋し當然のことゝ言はねばならない。そうして貨幣が往時にあつては商品貨幣の形態をとつておつたことを一つの歴史的な事實として敢て否認しやうとするものではないが、そのことのゆゑに現在にあつても貨幣が商品貨幣でなければならないと主張することは誤まりであるとなす論者も少くはないのである。

併しながらこのやうな批判は、必ずしも、吾々の主張するところの思惟方法を反駁し得るものではない。それは、吾々は單に事象の歴史的な發展を單に事實としてこれを敍述してもつてそのものゝ本質が捉へられたりとなすものではないからである。むしろ、これら事實の發展のうちに論理的な意味聯關を看取せんとするものなのである。論者の言ふがごとく、もしも過去において貨幣がなにらかの有價値の素材をもつて形成されしがゆゑに、貨幣はつねに商品貨幣でなければならないとしても、そうしてそのことが歴史的な事實として動かすべからざるものであるとしても、この同じ立場に立ちて、少なくとも現在においては貨幣が無價値の素材から形成されており、一片の紙切れもがなほ貨幣として流通してゐることも、これまた眼前の事實として否定さるべくもない。かくして一方においては、過去において商品が貨幣であつたから、貨幣は商品のごとく有價値のものでなければならず、他方ではまた同じく現在において紙片もなほ貨幣たり得るがゆゑに、無價値のものでもなほ貨幣たり得ると言はねばならないわけである。しかれども吾々が事實の本質をその歴史的な生成のうちに見ると言ふことは、單に事實を事實としてそのままうけいれるといふことでは決してない。貨幣が商品貨幣として發生しながら現在は一片の紙きれの存在となつてゐるといふ、この動かすべからざる現實の事實のうちに、一つの論理的な必然の連鎖を探り、それが史的發展のうちに貨幣そのものゝ本質の展開を跡づけんとするにある。

このやうに歴史的な事實を單に事實として見ることなく、むしろかゝる史實のうちにものゝ本質の論理的な展開を跡づけんとするにある。それ故、貨幣の本質をもつて商品貨幣のうちに看取しても、

單に論者のごとく發生當時の歴史事實をもつて貨幣の本質と見ることゝまつたくその主張の根據を異にするものなのである。それは紙幣の背後にもつねに貨幣の本質體としての商品貨幣の存在せることを主張する。かくしてシュムペーターのごとく現在の貨幣の紙幣的存在の根據を究明することなく、かゝる存在をもつて單にかゝるものとして與へられたる前提となすこと、にも反對する所以である。むしろ、貨幣は商品貨幣でなければならないとしても、なほ現在のごとく紙幣的存在をもとり得る所以をば究明せんとするのである。

このやうな思惟方法の生産性のうちにこそ、貨幣の必然性の理論が貨幣の理論の部分的內容たり得る所以が積極的に理由づけられてゐると言ふべきである。さらに、貨幣必然論が貨幣本質論の重要なる構成部分たり得るやといふ貨幣必然性の理論そのものゝ理論的價値の問題も、結局、貨幣本質論そのものゝ生産性にかゝるものといふべく、かゝる生産性にして實證されるにおいては、貨幣必然論の貨幣理論ことに貨幣本質論上の重要性、必然性が間接的にも論證せられるわけである。

吾々は貨幣存在の必然性を究明することによつて、その存在の仕方がまた貨幣の基本的機能を制約すること、從つて貨幣必然性の理論がやがて貨幣の基本的機能論へ、それはまたさらに貨幣の價値の靜態理論へと論理的な聯關のあることを看取しなければならないであらう。

第二節　貨幣必然性の論理

貨幣の必然性についての從來の諸見解は、いづれもその生成の必然的根據をばなにらかの外的な事情とか、または偶然的な事情のうちに看取せんとして、それの特殊な社會的事情に歸屬せしむることをしてゐない。こゝにそれら諸見解の根本的な缺陷が存するものと言ふことが出來やう。それは、貨幣ことに鑄貨の存在が、とほく幾千年の昔に溯り、特殊な社會關係のうちに、それが自生的な存在を徐々に獲得しきたれることとよりして、貨幣の存在が恰も貨幣商品そのものゝなにらか自然的なる性質に依據せるものゝごとくに考へられるにいたつたからなのである。併し人は、このやうな事象の外見にのみ捉はれることなく、貨幣生成の特殊的な社會的條件、したがつて貨幣そのものゝ歴史的な必然性を看取すべきである。

言ふまでもなく貨幣の存在は、交換のうちに發生する。このことは、いづれの貨幣生成論にあつてもひとしく認められてゐるところである。併しながら、貨幣生成の前提條件として、單に、生産物の直接的交換の不便や困難を指示し、それにすべてを代辯せしめてもつて足れりとなすことなく、さらに、これら諸種の難點そのものゝ性質を吟味し、それらの背後に伏在せる特種の社會的事情に深く突

きいつて、そこに貨幣の必然性の看取すべきことが強調されねばならない。かくして問題は、生産物の直接交換の當面すべき諸々の難點を單に指摘することにあるのではなく、むしろ、それらこそある特定の社會事情のうちに胚胎せることを究明することになければならない。

しからば規則的なる交換は、なにゆゑに貨幣を必要とするのであるか？　それは、單に、交換に伴ふ諸種の不便不都合のゆゑばかりでは決してない。いなそれよりもむしろ、その謂ふところの不便や不都合なるものは、生産物の直接的交換の段階にあつては、いまだ生じ得べくもなきところのものなのである。それら交換阻害の事情は、交換の一定の發展段階においてはじめて現はれるものである。すなはち、左右田博士の謂はゆる評價社會（Bewertungsgesellschaft）の成立とゝもにそこに當然生づべきものであつて、從つて貨幣の生成こそはむしろ、この特殊な評價社會の成立のうちに洞察さるべきものなのである（註一）。

註一　Vgl. K. Soda, Geld und Wert. 2. Aufl., 1924, Kap. VI.〔左右田喜一郎全集　卷第二　三〇七頁以下參照。〕

人間は、アリストテレスの謂はゆる政治的動物（Zoon politikon）である。彼等は、つねに、社會のうちにおいてのみ生活し、その存在を續け得るにすぎない。彼等の生活は、なにらかの形式における集團生活でなければならない。この集團生活において、人々は一定の生産的な協力の關係を結ぶのである。從つて人間社會の一面をば、このやうな人々の生産的協力關係の總體として考察することも出來やう。換言すれば、人間社會の存續には、それが一つの生産共同體（Produktionsgemeinschaft）あるひは勞働共同體（Arbeitsgemeinschaft）であることを必要とする。すなはち、社會の構成員はおたがひに特殊の關係を結び、そうしてその特殊な社會的關係においてのみ生産を行ひ、それを通じて社會の存續に寄與し、協力してゐる。かくしてまた彼等はその社會の構成員たるの責務を果すのである。ここにはじめて社會そのものゝ存續が可能となる。このやうな共同勞働の自生的な存在は經濟史の教ゆるところに從へば、すでに總べての文化民族の歴史とゝもにはじまつてゐるものゝごとくである。ただ原始的群團や民族共同社會にあつては、その社會の構成員の生産的協力は、それ自體すでに社會的な協働として、直接的に、かかる共同社會の目的達成に協力せるものとして現はれてゐる。

然れども今日のごとき資本主義制社會にあつては、事情は異なる。この社會の構成員各自は、一應、相互に獨立なる生産者として現はれる。そうして彼等構成員の生産的協力も、もはや、そのまゝでは直接的に社會的な寄與としては現はれない。それはたゞ間接的にのみ、すなはち社會の評價を經てはじめて、社會的寄與の一部分としての意味を待ち得るにすぎない。このことはまことに肝要であつて、社會の各構成員の生産的協力が、直接そのまゝの形において社會的な協働としての意味を有するか、

あるひはたゞ間接的にのみ社會的總寄與の一部分たるにすぎざるかは、これら兩種の社會構成のうへに、根本的なそうして異質的なる相違をもたらすにいたるものなのである。

斯くのごとく、社會の構成員がその分業勞働に干與する仕方は、あるひは直接的であり、あるひは間接的であつて、社會組織の異なれるに從つてそれぞれ異なる。かくして社會の生産および再生産の態樣も、また、それぞれ異なつてくる。原始社會にあつては、自然的分業のうへに、もつぱら、共同社會の需要充足を目的とせる財貨の生産が原則となつておつた。從つて交換はまつたく偶然のことがらに屬し、たゞ共同社會の消費需要に超過せる餘剩生産物のみは、これを交換に供することもあつたといふにすぎない。すなはち、各共同社會はそれぞれの自然的環境の差異のゆゑに、その與へられたる生産手段も生活資料も異なり、從つてその生産方法や生活樣式さらにはその生産物そのものまでもそれぞれ異なれるものとなつてくる。斯くのごとき自生的な差異は、各共同社會間の餘剩生産物の交換を可能ならしむるところの原因ともなるのである。そうして直接的な生産物の交換は、まづ、各共同社會間の自然的分業のうへに現はれるにいたつたことに留意しなければならない(註二)。

註二　このやうな餘剩生産物の交換すなはち財貨の双方的移動にさきだちて、掠奪などの財貨の一方的移動の行はれたことは推察するに難くはない。そうしてこのことは論者をして財貨の移動形式として、双方的流通に對する一方的流通の優位性を强調せしめ、交換の起源を掠奪に求めしむるにいたりしものゝごとくである。しかも斯かる論者は掠奪より交換への發展過程として强制交換(Zwangstausch)とか沈默交換(Stummertausch)などの事例を擧示する(Z. B, Schmidt, Grundriss der ethnologischen Volkswirtschaftslehre. II. 1921, SS. 149—152. 高垣寅次郎博士「貨幣の生成」一三—一四頁および内田博士「日本經濟史の研究」下卷　四九九頁以下參照)。

論者あるひは交換の起源を平和的贈與のうちに求め、貢獻、賠償、罰金、購買婚などの財貨の一方的流通に就いて論ずるものもある(Vgl. K. Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. I. SS. 62—65. 高垣博士　前掲書　二三頁以下參照)。そうしてこの一方的流通の對象物と貨幣商品との偶然的なる一致は、遂いに論者をして貨幣の起源をこの財貨の一方的流通のうちに看取するにいたらしめたるがごとくである。貨幣の偶然的生成論はすなはちそれである(第四章　第四節參照)。

言ふまでもなく交換にさきだちて、まづ財貨の一方的流通のあつたことは、これを否定すべくもない。併し貨幣の生成にとつては、このこと自體が問題なのではない。財貨の移動形式そのものによりも、問題は、むしろ、財貨の移動の特殊なる形式のうちに存するのである。財貨の双方的流通すなはち交換によつてはじめて、社會構成員各自の社會に對する生産的協力を果し得ることのうちにこそ、貨幣生成の必然性の問題が看取されねばならないであらう。かくて財貨の一方的流通の双方的流通に對する優位性あるひは先行性の論究はなにら貨幣の必然性の問題の解決に寄與し得るものでは決してない。

このやうな共同社會と共同社會との間に起れる生産物の直接的交換は、やがて共同社會の内部へと浸潤してゆき、私的所有の生成を促してその社會的紐帶を分解へと導びくにいたつたのである(註三)。かくしてそのあとに個人間の交換が現はれて次第にその確立をみるにいたつた。それゆゑに、貨幣の

生成をば個人と個人との間の生産物の直接的交換のうちに看取するがごときは、すでに因果の錯倒を犯せる見解なりといふべきである。

註三　Vgl. K. Helfferich, Das Geld. 5. Aufl., 1921, S. 11.

然れども、經濟發展のこの段階における交換は、いまだ例外的であり、偶然的、偶發的のものであつて、それはこれら共同社會の存續のうへからは、なにらの重要なる意義をも有するものではなかつた。といふのは、これら共同社會にあつては、各人の分業勞働は直接的に相互に聯關を有し、全一體をなしており、各生産者が自己の生産物を交換するといふことによつて相互に關聯せしめられることを、毫も、必要としないからである。併しながら共同社會が次第に擴大するに從ひ、年齡や性別による分業も、漸時にその內容を加へ、さらに道具の發明などにより生産技術の發達を齎らすにいたつた。これがため、かゝる生産物の餘剩が不斷に生ずるにいたり、偶然的交換はこゝに規則的な交換となり、交換の普遍化とゝもにやがて現在のごとき市場交換へと發展して行つたのである(註四)。

註四　Vgl. M. Weber, Wirtschaftsgeschichte. Abriss der universalen Sozial- und Wirtschafts-geschichte. Hrsg. v. S. Hellmann u. M. Palyi. 1923, S. 3.〔黒正博士譯「マックス・ウェーバー社會經濟史原論」六頁參照。〕

偶然交換より市場交換へのこの發展は、社會構成員の身分的拘束の弛緩、私的所有の生成と相表裏するものであつて、市場交換の確立は社會構成員が個々の私的生産者として獨自の存在を營める資本主義制社會において、はじめてその全面的なる展開を見るにいたつたのである。いな、分業と私的所有とによつて相互に獨立な個々の生産者にまで分裂してゐる現在のごとき社會にあつては、社會構成員の聯關は、もつぱら彼等成員の生産物の交換を通じて、こゝにはじめて樹立せられるにいたるのである。かくして交換は、孤立的生産者の私的活動をして社會的協力となし、彼等の生産的寄與が生産共同體としてのこの社會の生産全體の一構成部分たらしめ、これによつて社會の生産および再生産が可能となるのである。蓋し、この社會にあつては、たがひに獨立したる生産者の私的活動として相互に個別的に營まれる特殊勞働の質的な差異は、複雜に編成されし社會的分業を構成しており、交換を通じて個々の私的活動が社會的な協働となり、從つてまた社會的な分業勞働の一部たることを實現し得るからなのである。

また交換の發展の過程は、價値理念の生成發展、確立の過程でもある。すなはち評價社會（Bewertungsgesellschaft）の成立、分化の過程としても考察することが出來る。生産物相互の交換たる物々交換は、交換過程の原初的な形態である。そうしてそれは財貨の商品への轉化のはじまりを示してゐる。直接的な生産物の交換にあつては、交換さるべき財貨はいまだ使用對象物であつて、自己の消費需要

の充足をその直接の目的としてゐる。たゞ生産者にとつて、それが彼の直接の欲望を超過せる場合にのみ、非使用對象物として交換に供せられ、こゝにはじめてそれらは商品となるのである。これら生産物の交換は、まつたく偶發的であり、孤立的であつて、したがつてその交換の割合のごときもまた、もとよりはじめは偶然的な大いさであつた。例へばビスマルク群島にあつては、同じ大いさの寶貝(Dewarra)と魚とが等價値のものとして交換されることが報告されてゐる(註五)。これは未開種族の知能の發達程度が低くかつたことによるのではあるが、他面において交換の偶發性は、往々にして、それぞれ異なれる交換單位を所持せる二種族間に交換の行はれるにいたりたる場合、それら二つの交換單位をば等價値のものとして扱はしめたるがごとくである(註六)。

註五　Vgl. Helfferich, Das Geld. S. 13.

註六　Vgl. G. Simmel, Philosophie des Geldes. 4. Aufl. 1922, SS. 104—105.

このやうに、未開社會における價値比較、したがつて交換の割合はまつたく偶然的なものであり、かつまた大いさや或いは重さのごとき單に量的な一致に基づけるものたるに過ぎなかつた。ことに、傳統と慣習とがあらゆる意味においての生活の規制者であつた未開社會にあつては、交換の割合も漸時に固定化して、そこに便宜的な慣習的な交換の割合が生じ、それはこゝに社會的な妥當性を獲得して、ながく交換取引を規定することゝなつたのである。併しながらそこではいまだ、總べての財貨が相互に交換せられたるがごときことはなかつた。それは、生産物の商品性格がいまだ確立するにはいたつておらず、從つて交換價値もなほ直接的に使用價値に結びついてゐたからなのである。高價なるものはたゞ他の高價なるものとのみ交換せられ、あるひは耐久性あるものとのみ、損耗し易きものはたゞかゝるものとのみ交換せられたるに過ぎなかつた。そこでは、交換の割合が便宜的な大いさで固定化してゐるばかりではなく、交換はたゞ特定物と特定物との間に行はれたるに過ぎなかつた。このことは未開社會の旅行者をして物々交換の不便と煩瑣たることについて、しばしば物語らしめたるところである。例へばアフリカにあつては、生活必需品を調達し得る普通の交換手段をもつては、奴隷は得られず、少なくとも象牙とか小銃や火藥とでなければ交換されなかつた。またポルトガル領アフリカのアンゴラ地方では象牙を買ふに火藥と小銃とを要し、ベチュアーネ族は牛類を煙草とは交換せず、鐵または道具と交換し、そうして彼等の外套はまた生きた家畜とのみ交換されたるに過ぎなかつた。ボルネオのダヤーク人の神聖なる壺は金の粉末、瑪瑙、奴隷とのみ交換され、ヂャッガ人における槍は殆んどたゞ小銃と交換されたるだけで、他の商品は不承々々にかつ例外的にしか受取られなかつた。桶匠に布地と交換に小刀を與へやうとしたネグロ人は、彼の村人たちによつ

てそれを妨げられたと言はれてゐる(註七)

註七 Vgl. H. Schurtz, Grundriss einer Entstehungsgeschichte des Geldes. Weimar 1898, SS. 80—81; G. Simmel, Philosophie des Geldes. S. 288; K. Helfferich, Das Geld. SS. 17—18; G. Cassel, Theoretische Sozialökonomie. 2. Aufl. Leipzig 1921, SS. 331, 332; ditto, Grundgedanken der theoretischen Oekonomie. Leipzig u. Erlangen 1926, S. 30. 福井孝治教授『『價値』生成に關する一考察」(大阪商大「經濟學雜誌」第一卷　第九號)一三頁參照。

このやうに交換は特定物の特定物に對するものたるに過ぎずして、慣習的な交換割合は交換取引に對して規範として通用し、そこはなにらの不便も不都合もなかりしがごとくである。たゞこの間の事情に通せず、總べての財貨が總べての財貨と交換され、一切のものは貨幣さへ持てば自由に獲得し得るところの現在の社會事情に馴れたる旅行者にとつては、この未開社會における特定物間の交換は、まことに煩瑣なる過程として映ずることであらう。これ物々交換の不便、困難のうちに貨幣の生成を看取せんとする論者が、未開社會の旅行記よりかゝる特定財貨間の交換情況を好んで引用する所以である(註八)。かくして、原始的な物々交換のうちに複雜にしてかつ廣汎多岐にわたる價値關係を想定し、そこに生ずべき交換の諸々の難點から貨幣の生成を推論せんとするがごときは、まさに時代錯誤の甚だしきものと言はねばならない(註九)。

註八 Z. B., C. Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 2. Aufl. Wien u. Leipzig 1923, SS. 245—246 Anm.; W. S. Jevons, Money and the Mechanism of Exchange. 25. ed. London 1923, p. 2.

註九 Z. B., A. Smith, Lectures on Justice, Police, Revenue und Arms, ed. by E. Cannan. Oxford 1896, pp 182 et seq.; C. Menger, Grundsätze. SS. 242 ff.

やがて生産物の餘剩が不斷の現象ともなれば、これら餘剩の生産物に對する欲望は次第に確立するにいたる。人はこゝに左右田博士の謂はゆる評價社會(Bewertungsgesellschaft)の成立の意味を思はねばならない。生産物は生産物としてそれが有する自然的屬性のゆゑに、すなはち一定の屬性のもつた消費對象物として欲求され、生産されもしたのであつた。從つて生産物を消費の對象物として、すなはち財貨そのものとして評價する社會なるものは、それ自體としてはすでにはやくより存在しておつたのである。併し評價社會がたゞ單にかゝるものとして存在し、そうしてかゝるものとしてとゞまつてゐるに過ぎざるかぎりに於いては、それはいまだ眞に自己の存在の意味を十全的に發揮するにはいたらない。もともと自己の欲望充足の對象物として生産され、欲求されておつたに過ぎなかつたものも、軈てはこれが生産者にあらざる人たちによつても欲求され、需要せられるにいたる。そうしてこれら(餘剩)生産物に對する非生産者のかゝる需要の擴大、充實を通じて、これまで生産物を消費對象

物として評價しておつたこの社會もみづからのひろさと、その內容の豐富さとを加ふるにいたる。かくしてまたこの評價社會とその對象との關係は、さらに、密接となりかつ確實なるものとなつてくる（註一〇）。こゝに交換は不斷に生じ、その反復によつて一つの規則的な社會的過程となる。そうしてさらに生產物の一部分は、最初から、交換を意圖して生產されねばならなくなる。いまや生產物は、それが生產者にとつての非使用對象物としての性格をますます判然と顯はして來るとゝもに、他方非生產者にとつての使用對象物としての性格が一層顯著となつてくる。そうして生產物は、このやうな二つの性格を荷へるものとして現はれてくる。こゝにおいて生產物を生產物として評價しておつた社會は、みづからとは異質的なかつ對立的な評價社會をみづからのうちに含むにいたる（註一一）。

註一〇　Vgl. K. Soda, Geld und Wert. SS. 107—108.〔前掲全集　卷第二　三一五頁參照。〕

註一一　Vgl. K. Soda, op. cit. SS. 111 ff.〔前掲全集　三二一頁以下參照。〕

いまや生產物は、それが實體的特性に基づける有用性のゆゑに評價されるのみならず、それはまた、交換のための有用性のゆゑにも評價されることゝなる。そうしてこれら二つの有用性が次第に明確なる性格と化し、それがクナップの謂はゆる「實質的滿足」(reale Befriedigung)」の對象たることゝ、「流通的滿足 (zirkulatorische Befriedigung)」の對象たることゝの二つの側面が截然と分離してくる（註一二）。生產物は、その自然的屬性による有用性の把持者たるのみならず、またこのことのゆゑに非生產者によつて欲求され、非生產者のための使用對象物として現はれ、從つて生產者にとつては直接的には非使用對象物として、すなはち交換の可能性の把持者として現はれてくる。それは、このことを通じて間接的にのみ生產者自身の欲望が充足せらるべき對象として現はれる。このやうに評價社會は、もともと使用價値の評價社會として生成し、かゝるものとして發展することによつて、みづからのうちに分化を生じ、異質的なそうしてみづからに對立するいま一つ他の評價社會を生むにいたる。これ、すなはち、交換價値の評價社會なのである。そうして、「かゝる二箇の社會は、これに參加する同一の諸個人のもとに、しかもまた全然同一の對象に就いて考へられる」にいたる（註一三）。

註一二　Vgl. G. F. Knapp, Staatliche Theorie des Geldes. 4. Aufl. 1923, S. 4.

註一三　Vgl. K. Soda, Geld und Wert. S. 114.〔前掲全集　卷第二　三二六頁參照。〕

斯くして、そのはじめ餘剩的な生產物のまつたく偶然的であつた交換の割合も、交換を目指せる生產が次第にひろく行はれるに及んで、それら生產物の生產事情そのものに依存し、それによつて規定されるやうになつてくる。蓋し、もしもこのことが行はれるにいたらなかつたとすれば、交換を目的とせる生產は、やがてひき續き行はれ難くなるであらうからである。交換の反復のうちに、偶然的な

交換の割合は不斷の改變を經て、次第にその時々の生産事情に、それゆゑにまたその時々の社會事情に適合するにいたる。そうしてそれは、斯かる意味において合理的なる交換の割合として、こゝに慣習的な固定性を得、社會的な妥當性を持つてくる。それとゝもに慣習は、それら生産物をば價値の大いさとして固定化させることゝなる(註一四)。

註一四　福井教授「『價値』生成に關する一考察」(前掲雜誌　第一卷　第九號)七頁以下參照。

直接的な生産物の交換にあつては、その交換に供せらるべき餘剰生産物はいづれも、それが生産者にとつては、直接的には、他物獲得力の把持者として現はれ、非生産者にとつては、その反對給付として提供すべきみづからの財貨に値ひするもの、それの價値の表示者として現はれる。併しながらそれは言ふまでもなく、その餘剰生産物を使用對象物として評價する個人が存在することを前提とするかぎりにおいてゞある。從つて交換せらるべき財貨は、いまだ、それ自體の實體的特性から、あるひは交換參與者の個人的欲望から獨立した價値なる形式規定を與へられてはいない。これ原始社會における物々交換が特定物と特定物との交換にすぎなかつた所以である。ただ斯かる評價個人したがつてまた評價社會が確立するにおよんで、この形式規定は必然的なものとなつてくる。詳言すれば、生産が漸時に交換のみを意圖するものとなり、これが生産物の使用價値の評價社會が確立し、さらに評價客體の數量と種類とが增大してその評價社會の內容を豐かにし、擴充し來たるとゝもに、交換財貨はこゝに必然、特殊なる價値形式を帶ぶるにいたるのである。左右田博士が、「媒介價値」の評價社會たる概念規定を導入し、「對象が第二の媒介價値の評價社會を有して、手段としての職分の把持者として認識せられる」にいたることを說き、「價値觀念の概念的發展上におけるこの段階」においてはじめて貨幣の生成への端緒の得らるべきことを强調せるは、まことに卓見と言はねばならない(註一五)。

註一五　Vgl. K. Soda, Geld und Wert. S. 117.〔前掲全集　卷第二　三三〇—三三一頁參照。〕

もちろん左右田博士の主張におけるがごとく、この交換價値の把持者が直ちに間接交換の媒介者として貨幣となるといふのでは決してない。生産物を交換價値の把持者として、價値對象物として評價する社會の發展は、生産物の使用對象として評價する社會の發展、したがつて生産物の商品性格の發展の結果であり、それはまた同時に「價値」理念の生成し、發展し、確立してゆく過程であることを顧みなければならない。この形式規定の發展の所産としてそこに貨幣の生成が看取せらるべく、貨幣こそはまことに發展せる形式規定の一つたるに過ぎないのである。この形式規定の把持者が感性的なる財貨であり、特殊の商品でなければならないといふことは、こゝに多くの貨幣本質に關する誤解を生むにいたれるがごとくである。

生産物を生産物として評價する社會の發展は、生産物を交換價値の把持者として評價する社會の發展と一致し、あいともに進行するものである。餘剰生産物が交換に供せられるにいたつて、財貨がこに非生産者にとつての使用對象物としての、從つて商品としての形式規定を獲得するにいたる過程は、同時にまた商品としての性格を確立し、交換價値の把持者としての性格したがつて商品の價値性の完成してゆく過程にほかならない。生産物と生産物との直接的な交換にあつては、生産物はいまだ確乎たる商品性格を持つにはいたつてゐない。こゝでは生産物は財貨すなはち單なる使用對象物であつて、それが生産者の直接の欲望を超過せる部分のみが交換に供せられるにいたり、これによつてはじめて他人のための使用對象物として、商品としての性格を與へられるにいたるのである。すなはち一定の生産物が單にそれが生産者の使用對象物ばかりではなく、さらに非生産者にとつても使用對象物となり、その一生産物を使用價値として評價する個人が存在することによつてはじめてその一生産物は商品となる。從つてこの一生産物の商品形式はかゝる評價個人の存在にかゝつてゐるわけである。かゝる評價個人したがつて評價社會の確立し、外延的にも擴大するとゝもに生産物の商品性格もまた確乎たるものとなつてくる。このやうにある生産物が商品としての明確なる規定を次第に帶びてくることは、それが生産者にとつてはその商品の交換の可能性の擴大してゆくことであり、從つて商品の交換價値の評價社會の發展であるわけなのである。かくして使用價値の評價社會の發展は交換價値の評價社會の發展と一致し、その步調を一つにする。それはまた價値性格の確立の過程でもあるわけなのである。

この使用價値の評價社會の外延的なる發展はまた交換價値の評價社會の內包的なる發展を必然に伴ふ。すなはち生産物の商品への轉化とゝもに、非生産者により使用對象として評價されることが擴大すればするほど、その商品と交換される商品の種類が增大し、これによつてその一商品の商品性格は確立、すなはち商品形式の發展する一方、その一商品の交換價値としての規定、したがつてそれの價價性は發展し、深化してゆく。併しこの段階にあつては、ある一つの商品が他の數種の商品と交換されるにいたつたといふことそれ自體は、たゞ、一つの商品が他の數種の商品に對する關係において一定の大いさをもつた價値物として評價されるにいたつたといふことを表明するだけである。その一つの商品の關係するところの他の商品の種類が增加し、その數量が大いに加はるとともに、その一つの商品の商品性格はますます確立し、從つてそれの價値性もまた著しく發展してくる。そうしてそのことだけであつて、そこではいまだこれら交換の圈內に入り來たれる多くの他の商品がいづれも同質的なる價値物として評價されるにはいたつてはゐない。それら他の商品の數量的增大は、いづれも、か

の一つの商品の價値性格の完成化の程度の表現以外のなにでもない。從つてそこにはすべての商品がすべての商品と相互にとり替へられるがごとき全面的な商品交換はいまだあることなし。いな、ありえないのである。このことをもつて論者は直ちに貨幣なき交換の不便を說き、この不便、この交換阻害の事情をもつて貨幣生成の根據となすにいたれるものゝごとくである。併し全面的な交換のなきところに貨幣の存在はない。未開社會における特定物と特定物との交換のなかに、發達せる全面的な商品交換を持ち込むの時代錯誤を犯せる論者は、この社會における特定物と特定物との交換をもつて、從つて全面的なる交換の行はれてゐないことをもつて、恰かも貨幣なきがゆゑの不都合に因るものと錯覺して、貨幣あることによつて直ちに全面的なる商品交換の行はれ得るものゝごとくに斷ずるにいたつた。しかれども商品の全面的交換の行はれざるは、貨幣なきがゆゑの不都合、したがつて交換阻害の事情に基づけるものではない。それはいまだ商品性格の發達せざるがゆゑであり、それはまたすなはち商品の使用價値の評價社會がいまだその充分なる發達を見るにいたつてゐないがゆゑである。商品の商品性の發展に伴へる交換價値の評價社會の深化、發展は、價値性の深化、發展である。その商品の價値性格は、次第に多くの商品によつて表示し得られるものとなり、從つてますます擴大、深化してゆく。この一商品の價値性格の發展はそれゆゑに、その商品の商品性格の發展の結果であり、それの發展の表現たるにすぎない。まことに使用價値の評價社會の發展こそは、交換價値の評價社會の發展のうちに、從つて商品の價値性の發展のうちにその表現を得、みづからの姿を顯はにすると言ふことが出來るであらう。

一方においてこの商品なる形式規定の發展、すなはち一商品があらゆる他の商品においてその價値性を表現するにいたるといふことは、他方においてこれら他のすべての商品はその一商品と交換せられることによつて、それぞれの價値性格をその一商品でもつて統一的に、一般的に表現することにほかならない。そのはじめ生產物は餘剩となることによつて交換に供せられ、非生產者の使用對象物としてはじめて商品としての性格の把持者となつた。こゝでは生產物は交換によつて商品となるとゝもに、交換によつて再び使用對象物としてその歸趨を見出し、商品たることをやめる。從つて直接的な生產物の交換の段階にあつては、生產物の商品性はいまだ確乎たる存在を持つにはいたつてゐない。いなその生產物の商品形式は確立してゐない。併し交換が規則的な社會的過程となり、交換に入りきたる商品の數量と種類とが增大して、使用價値の評價社會が外延的にも內包的にも擴充されてくるとともに、生產物の商品性は確立し、商品形式そのものも發展する。すなはち一つの商品と交換せらるべき商品の量的な質的な增大は、その一商品の商品性格の確立、發展であるとゝもに、他方、それと

交換せらるべき多くの商品そのものの商品性の發展でもある。この商品が商品として發展することは、それゆゑ交換そのものゝ發展は、商品をしてますます他人のための消費對象物たるの存在意味を明確にすることであつて、從つてそれは商品の全面的なるとり替へを必然ならしめる。しかしながら、この商品の全面的なるとり替へは、商品が特殊の社會的規定を受取ることなくしては不可能であり、それゆゑにまた、その商品性を完成することなくしては不可能である。この商品性を完成するがためには、商品はいづれも同質化されねばならない。すなはち交換價値として一樣な存在を得、かゝるものとして評價する社會が確立しなければならない。換言すれば、ある特殊の一商品のうちにそれぞれの價値性格を見出し、統一的な一般的なる價値表現をそこに見出すことによつて、そのことがはじめて可能となるのである。この統一的な、一般的な價値表現が特殊の一商品に固定化するとき、その他の商品はいづれも完成せる商品性格を獲得し、それらは、交換過程においてまことの意味における商品となり、こゝに全面的なる交換が、はじめて、展開し得られることゝなるのである。この一商品が統一的な一般的な價値の表示者となり得ることは、決してその一商品の生產者の意思にかゝることではない。一つの商品が他の種々の商品でもつて自己の價値を表示するといふことは、まつたくその所有者の自由意思にかゝり、まつたく個人的な主觀的なることがらである。併し他のすべての商品がたゞ一つの特定の商品でもつてそれらの價値の表現されることは、その特定の一商品の所有者の主觀に依存することがらでは決してない。それはたゞ客觀的な社會的なことがらであり、それの結果たるかぎりにおいて、その特定の一商品は一般的な統一的な價値の表示者としての機能を果し得るのである。

直接的な生產物交換とゝもにはじまれる、生產物の商品への轉化、それの發展、したがつて生產物あるひは財貨の商品性格の確立發展は、孤立的、單一的な價値表現を、ついで孤立的複數的な表現を得、やがて統一的、一般的價値表現を特殊の一商品において見出すにいたつたのである。すなはち、質的にまつたく相異なれる生產物は、特殊の一商品のうちにみづからの價値表現を見出すことによつて、はじめて、こゝに完全なる商品性格を獲得するにいたる。それらはいづれもこの特殊の一商品によつてその特殊の一商品は統一的な一般的な價値表現なる形式規定を獲得するにいたる。この形式規定が社會的に固着せる特殊の商品は、貨幣商品となる。かくして交換價値の評價社會、したがつて價値性の確立、發展は、使用價値の評價社會の發展の結果であり、財貨の商品への轉化、商品性格の發展、確立の結果にほかならない。貨幣たるものは商品形式の發展の所產であつて、それは一つの客觀的社會的な過程であり、この過程の結果として財貨は商品となり、特殊な商品は貨幣としての規定を把持し得るにいたるのである。從つてそれはな

にら人爲の所產でもなく、また商品以外のものゝ把持し得る規定では決してない。それは實に、商品いな財貨が自然的に社會的な過程の結果として獲得するところの一つの歷史的な形式規定たるにすぎないのである。

社會の存續は社會構成員各自の生產的協力によつてはじめて可能となる。私有財產と分業とによつて個々の獨立の個人にまで分散せる社會にあつては、その生產物は商品となり、その商品の交換を通じて彼等獨立の個々人の社會的な結合がなされ、かゝる生產的協力によつてその社會そのものゝ存續が可能となるのである。ところで商品の交換は、直接的には私的な生產物の社會的な評價を得る過程であり、それは貨幣をまつてはじめて可能となる。すなはち私的な活動が貨幣によつて社會的な協働としての評價を得、かくして各自の社會的協力の責務が果されるのである。それ故にまた商品の全面的なる取り替へも實現されるのである。かくして私的所有と分業を基調とせる現存の經濟社會の存續のためには、商品の全面的交換が必然であり、商品の全面的交換は貨幣の發生によつて可能となる。したがつて貨幣は商品の全面的交換可能の條件であり、全面的交換の必然性によつて貨幣存在の必然性が制約されてゐると言ふことが出來るのである。この商品交換の全面的交換への發展の過程は貨幣生成の過程にほかならない。併しこのことは間接交換手段としての貨幣の必然性が商品の全面的交換の必然なることによつて直接的に與へられてゐるわけではない。前述のごとく評價社會の發展によつて商品が交換價値の把持者として、その性格を確立して行くことによつて、從つてその商品が所有者にとつて直接的交換手段たるとゝもに、非所有者にとつては自己の所有商品の價値の表示となり、すべての商品がその特殊の一商品によつて統一的な一般的な價値の表示を得るにいたり、この一般的價値の尺度としての機能を規則的に營むことによつて、その特殊の一商品は貨幣となるのである。それゆゑに商品は直接的交換手段たることにより、從つてそれの商品性格の發展によつて、價値の統一的な一般的な尺度としての規定を固定的に與へられることによつて貨幣となるのである。かくしてまた貨幣は間接的交換の手段としても作用し得るにいたるのである。從つて左右田博士の言へるがごとく、間接的交換手段であり價値の客觀的表彰たるがゆゑに、特定の商品が貨幣たるのではなく、むしろ直接的交換手段であり、從つて價値の表示者であるが故に、特定の商品はやがて一般的な價値の尺度となり、こゝにこの規定を確保することによつてそれは貨幣となるのである。

由來、このやうな一般的價値尺度なる形式規定の把持者としての商品は、國により時代によりそれぞれ異なれるところである。それが如何なる商品であつたかは、最初はまつたく偶然的に定まつたこ

とである。それが、多くの貨幣論者におけるがごとく、商品そのもの、個別性や自然的屬性などのうちに必然的な根據を持てるものとなすことは、全く現實に緣遠きことゝ言はねばならないであらう。むしろ貨幣たるべき商品について決定的なる事情としては、大體、つぎの二つのものが考へられる。すなはち、事實上ある共同社會の生產物の交換價値の原生的なる現象形態となつたところの、交換により他の共同社會から得て來たもつとも重要なる商品が、最初の貨幣となつた　或ひはまた共同社會自體のうちに生じたる讓渡し得べき富の主たる要素となつてゐる使用對象物、たとへば家畜のごときが貨幣となつたのである。貨幣なるもののまづ生じたのは遊牧民族の間においてゞあると言はれてゐる。それは遊牧民族の所有物は、いづれも動產的な、從つてまた直接讓渡し得るところの形をもつてゐるものであり、かつ彼等はその生活の態樣のうへからも絕えず他の共同社會と接觸し、かくして生產物の交換を行ふことゝなつたからである。

このやうな最初の貨幣商品決定の二つの事情は、貨幣の起源に關して種々なる見解を生むにいたつた。すなはち他の共同社會より交換によつて得られし珍奇なる寶石や貝殼などが裝飾に供せられしことあるべく、こゝに貨幣の起源をば人間の裝飾欲の對象のうちに求められるにいたつたわけである（註一五）。また貝殼ことに子安貝のごときは生產性を象徵するものとして宗敎的なる意味を賦與され、子安貝の貨幣たりし所以をもつて、貨幣の宗敎的起源を代辯せしむる論者も現はれた。彼等はこのことを裏書するものとして貴人の死體などに飾られし子安貝が常に人體の特定の箇所にかぎられてゐるといふ考古學的な考證を擧げたりなどしてゐる（註一六）。

註一五　高垣博士「貨幣の生成」一一四―一一六頁參照。

註一六　西村眞次郎博士「日本古代經濟」交換篇　第四册　貨幣　第八章　第四節參照。

他方、貨幣となれるものが家畜のごとく共同社會における讓渡し得べき富であつたことは、貨幣の生成をば私有財產制と結びつけ、マックス・ウェーバーのごときは「發展史的に考ふるならば、貨幣は個人的財產の創造者である。貨幣はこの特質を最初から持つてゐるものである。そうして逆に、個人的所有の性質を有せざるものにして、貨幣的性質を有する如何なる客體も存しない」とさへ述べてゐる（註一七）。言ふまでもなく、貨幣は交換を前提し、從つて貨幣たるものはなにらか讓渡し得べきものでなければならず、それはまた個別的な所有の對象でなければならない。從つて貨幣生成の社會的條件の一面に觸れてゐることはこれを認むべきも、いまだ貨幣生成の必然なる所以に就いてなにら說明するところがない。そのほか狩獵民族にあつては獸皮とか武器が、あるひは農耕民族にあつては煙草とか、海岸の住民間にあつては鹽などが貨幣となつた。人間が人間自體を奴隸として貨幣としたる

こともまたよく知られてゐるところである。併し土地をこの目的に使用することはいまだ知られざるところであつた。このことは土地がながく私的所有の對象でなかつたことを物語るものである(註一八)。

註一七　Vgl. M. Weber, Wirtschaftsgeschichte. 1923, S. 208.〔黒正博士邦譯書　四〇七頁參照。〕

註一八　Vgl. K. Helfferich, Das Geld. SS. 8—9., W. Lotz, Die Lehre vom Ursprunge des Geldes. Jb. f. Nationalök. u. Stat. Bd. 62. (III. F. Bd. 7.) 1894, S. 344. 內田博士「日本經濟史研究」下卷　五一八頁參照。

これらの商品貨幣はいづれも、品質において不同であり、耐久性においても、その他の貨幣としての特性においていまだ充分ではない。それらの財貨が斯かるものとして貨幣たり得たるは、商品交換の比較的未發達なる段階においてのみである。ところで商品交換がその地方的制約を打ち破り、外延的にも內包的にも發展して、商品價値が同質的なたゞ量的にのみ異なるがごとき社會的性格をもつにいたると、それに對應して、もともと普遍的な價値の尺度としての社會的機能を果すに適したる商品であるところの貴金屬が、貨幣なる形式規定の把持者となつたのである。金屬が貨幣として現はれることの他の商品に比しておくれたる所以は、實に、價値理念の未發達なる段階にあつては、その必要をみざりしによるものといふべきである。

第三節　結　論

貨幣の必然性は、以上において明らかなるがごとく、特殊的な社會的構造のうちにその根據を有するものと言はねばならない。貨幣の存在は、從つて、メンガーの言へるがごとき單なる自然的な存在でもなければ、また宗教的起源說におけるがごとき、偶然的なる存在でもない。それは歷史的な、社會的な產物であつて、一定の經濟發展の段階にあつては必然的な存在である。かくして論者のごとく貨幣の經濟史的な事實の單なる敍述をもつて足れりとなすことは許されない。むしろこれら經濟史實のうちに貨幣の必然性の論理的な意味聯關を汲みとることであつて、それが生成の論理的構造を究明することでなければならない。このやうな方法は、從つて認識論における心理發生的な見地とは、およそ緣とほきものである。シュムペーターなどが物の本質はそれが史的發展のうちには看取さるべくもないとなせるがごとき反駁は、こゝにはまつたくあたらない。

この貨幣必然性の社會的、歷史的性格を明らかにすることは、また、貨幣の根本機能如何の問題に對しても一定の方向づけを强制するものであり、これは、また、さらに、貨幣の價値の問題に對しても論理的なる連繫を持つてゐるものなのである。

すなはち貨幣が商品交換の過程において特殊の商品に固定化さるべき一つの歴史的な必然的なる社會的規定であるといふことによつて、すなはち一般的な價値の尺度としての規定がある特殊の商品に自然的に固定化されることによつて、その商品が貨幣となつたことが明らかになつたのである。このことは貨幣の基本的機能が何にであるかを制約し、規定することは當然であつて、このやうな貨幣必然論が價値の尺度をもつて第一の根本的機能となす立場に導かれることは當然と言はねばならない。この價値の尺度なる機能がクニース的なる意味において理解さるべきは論のまたざるところである。それは謂はゆる計算貨幣、あるひは價値の表示手段、あるひは價値の客觀的表彰、あるひはまた價値の公分母などとはまつたく異なる。これらの見解はいづれも價値の實體的なる表示手段とはおよそ緣遠い。貨幣が商品價値の實體的存在形式であるかぎりにおいて、それは價値の尺度たり得るものなのである。このことは貨幣が商品のとれる特殊の形式規定たることより來たれる當然の歸結であつて、商品のみが把持し得るところの一つの形式規定なのである。從つて貨幣の價値は商品の價値に溯及さるべく、商品價値決定原理は直ちに貨幣價値決定原理たり得るわけである。そうしてこのゆゑにこそ、價値の尺度機能を採る立場は、貨幣の固有價値をば必ず素材價値に結びつけて解決せんとする立場に通じてゐるのである。そうして貨幣の固有價値を素材價値以外のものをもつて基礎づけんとする立場とは對立する。いな價値尺度學說によることなくして貨幣の固有價値の基礎づけの不可能をすら强調せんとするものなのである。

人は、貨幣がその生成の端緒においては商品貨幣であり、ことに、金屬貨幣がながく支配的な形態であつたことを、單なる歴史的な事實として承認することだけにとゞまつてはならない。さらに斯かる金屬貨幣がやがて一葉の紙片となれるこの史的事實を單に與へられたるものとして、これを理論的究明の對象としてとり上げやうとしない態度も、また、吾々の共鳴し得ざるところである。これ蓋しかゝる歴史的な發展の事實のうちに貨幣の本質の論理的なる展開の過程の看取せらるべきが故であつて、これが究明は、かくしてこゝにはじめて貨幣そのものゝ價値の說明に對して輝かしき結果を約束してゐるからである。吾々は、徒らに、過去の貨幣が金貨幣であつたといふそれの華かなりし遠き昔しへの追懷に耽けつてゐるものではない。むしろそこに嚴然たる論理的な意味聯關を見んとするものなのである。貨幣そのものは、いまなほ、金でなければならない。それにも拘らず、貨幣の特定の形式規定の把持者としては、なほ一葉の紙片でも充分であることが强調されねばならない。そうして金貨幣より紙幣への史的發展のうちに論理的なる意味聯關を看取すればこそ、貨幣の價値、ことに紙幣の價値の基礎づけが可能となるのである。

しかるに斯かる意味聯關をそこに看取することをなさざる論者は、貨幣としての金の存在を單に過去のものとなして僅かに自らの慰めとなし、金貨幣とは無關係に紙幣の價値そのものを端的に究明すべきことを强調しながらも、敢て貨幣の價値の基礎づけの問題には立ち入らうとはしてゐない。吾々は謂はゆる交換手段學說の貨幣價値理論における動態論的性格觀の理論的根據をば、遠くこゝに溯源することを見出すのである。このゆゑにこそ吾々は、貨幣本質論の理論體系部分としての貨幣必然論の存在理由を昂揚するものなのである。

このやうに貨幣必然論が貨幣本質論の理論的體系部分として、基本的機能論および貨幣價値論とゝもに緊密なる聯關を有し、相ともに貨幣本質論の有機的構成部分をなすのである。そうして貨幣必然論における唯一の正しき見地のみが、貨幣の基本的機能に關し、さらには貨幣の價値に關し、その正當なる見解を約束し得るのである。この意味において、貨幣本質論にとつての理論的體系部分としての貨幣必然論の存在理由と、それが理論體系上の重要性とが、こゝに繰返し、强調されねばならないであらう。

第三編　貨幣問題餘論

第六章　貨幣の本質と價値

――中山教授の反批判に答へて――

第一節　序　説

かつて私が「貨幣本質の諸問題」なる著書において、シュムペーターならびに中山伊知郎教授に對して呈示したる異見が、恩師高田保馬博士の御高敎をたまはるの機縁に惠まれ(註一)、いままた中山教授はその「貨幣の本質とその價値」なる論文において(註二)、高田博士への答辯とゝもに、わざわざ私見に對しても御敎示の勞をとられ、後進指導の熱意を示すことを吝まれなかつた。從つて私は、こゝに、敎授の御敎示に從つて反省せるの結果を率直に表明し、もつて敎授の御好意に酬ゆるところあらんとする。もちろん私はそれにさきだちて、高田博士の御高敎に答へてもつて謝意を表明すべきが本筋ではあるが、貨幣の生成に關する私見を展開したるのちに讓ることによつて却つて問題の解決に便宜なるを思ひ、これを他日に期することゝした次第なのである(註三)。

註一　高田博士「貨幣本質に關する若干の問題」「經濟論叢」第四十五卷　第四號所輯）。

註二　中山教授「貨幣の本質とその價値――高田博士に答ふ」（「經濟論叢」第四十六卷　第四および第五號所輯）。

この論文はその副題からして明らかなるがごとく、前註一に掲げたる論文における中山教授の貨幣の基本的機能觀についての高田博士の批判に答へたるものである。そうしてこの論文の前半はもつぱらそれにあてられ、その後半は貨幣の價値の問題に關し私の批判を反批判されたものなのである。

註三　本章の概要は、すでに、「貨幣の本質と價値」と題して「經濟論叢」第四十七卷　第一號（昭和十三年七月號）に發表せしところである。問題の論點を簡單に捉へんと欲せられる讀者はそれに就いて見られたし。

まづ中山教授の主張されるところと私見との異同を說明して、問題の所在を明らかにしておかう。

中山教授は貨幣の根本的機能として單なる交換手段機能を否定される。そうして貨幣をして貨幣たらしめるがための價値、すなはち貨幣の固有價値、したがつて貨幣の價値の質的靜態的問題の究明への絲口をそこに看取せんとされる。この點については、私も教授の意圖にまつたく贊成してゐるものなのである。

併しながらこの同じ目標への到達に際して採らるべき道程は、それぞれ異なつてゐる。すなはち教授は限界效用理論、あるひはそれの一層擴充されし一般均衡の理論に據つて成就せんとされる。これに反して私は、むしろ、そこにはこの目標にいたる道の見出され難きことを强調するものなのである。

從つてこれらの差異は、貨幣の根本的機能として、教授は計算貨幣機能を主張されるが、私はむしろ價値の尺度としての機能をとることに聯繫をもつてゐる。あるひはまた、教授が價値の尺度たる機能を捨てゝ計算貨幣としての機能を貨幣の第一の機能とされる立場は、貨幣の價値の理論において主觀的な價値學說を採られることゝ必然の聯關あるものと言ふことが出來やう。

中山教授のこのやうな見解に對する私の考へを結論的に言へばこうである。

貨幣の根本的機能は價値の尺度たるの點にある。この見地に立つことによつて、はじめて、貨幣が貨幣たり得る所以の價値、すなはち貨幣の固有價値が說明され得ると思ふ。併し交換の手段をもつて貨幣の根本的機能となす貨幣本質觀における謂はゆる交換手段學說にあつては、貨幣の固有價値の基礎づけは不可能であり、從つて貨幣の價値の質的問題はついに看過されざるを得ない。而して限界效用理論または一般均衡の理論にあつては、結局、價値の尺度をもつて貨幣の第一機能となす見解は許容されず、從つてまた貨幣の固有價値の解明は與へられないであらうと。

私はすでに「シュムペーターの貨幣本質觀と貨幣數量說」なる論文（昭和七年）において、主觀主義的價値學說のうへに立てるシュムペーターにあつては、結局において、價値尺度機能をもつて貨幣の基本的機能とする見解の支持し、貫徹さるべくもなきこと、それとゝもに彼の貨幣の價値とは商品

の價格の逆數概念たる購買力でしかなきことを、明らかにしたのであつた。そうして購買力變動の理論たる貨幣數量説が、シュムペーターの基本的機能觀――交換手段中心觀――したがつて指圖證券學説の當然の歸結なることをも明らかにするところがあつた(註四)。ところがその翌年に、中山教授は、「純粋經濟學」なる著作において、私のこのやうな消極的な見解とは反對に、シュムペーターにおける價値尺度規定を生かさんとされたのであつた。そうして教授は、貨幣の交換手段機能に對する計算貨幣機能の優位性、すなはち概念的先行性を强調されてもつて物價の逆數概念である貨幣の購買力とは異なれる貨幣の價値、したがつて貨幣の固有價値の基礎づけをば、貨幣の材料價値に依據することなくしてなしとげんと企圖されるところありしがごとくである。しかれども、「純粋經濟學」において展開されし教授の簡潔なるしかしきはめて含蓄にとめる敍述の眞意を、汲みとることの出來なかつた私は、「貨幣本質の諸問題」(昭和十一年)なる著書のなかで、ふたたび、前掲のごとき見解を提示して中山教授の御教示を煩はしたる次第であつた(註五)。

註四　「內外研究」第五卷　第二號および第三號所輯。

註五　拙著「貨幣本質の諸問題」第二章　第三節および第四節參照。なほ「內外研究」第十卷所載の拙稿「貨幣價値論の動態論的性格觀の批判」および「貨幣價値の歷史的連續性の構想の性格について」(本書　第一編　第一および第二の兩章)參照。

これらの諸問題について中山教授は前掲の論文「貨幣の本質とその價値」において、私見への反批判として御教示されるところがあつた。私はこれを次節において述べることゝしやう。

第二節　中山教授の反批判

中山教授は、まづ、その行論を三段にわかちて論じたるうへで、前節にかゝげたるがごとき私見への反批判を展開しておられる。

教授はその「行論の第一段において交換手段としての貨幣の量的性質を」かく述べておられる。すなはち、「交換手段としての貨幣の價値は第一義的には貨幣の購買力にほかならず、この購買力の大いさ並びにその變動は先づ貨幣と財貨との對立の指圖證券的解釋によつて、從つてまた存在する貨幣の數量との關係に於いて導き出されねばならないであらう。吾々はこの點に於いて貨幣の價値の問題をその量的變動の問題、換言すれば貨幣の購買力の變動の問題として把握する多くの論者に贊同すると共に、むしろ問題をこの方向に推し進めることによつて個別的價格比例の問題から物價水準決定の問題への足場を得たいと考へつゝあるものである」と(註一)。

註一　中山教授「貨幣の本質とその價値」(「經濟論叢」第四十六卷　第五號)四八頁および四六頁參照。

ところで併し中山教授の貨幣觀にあつては、「貨幣が貨幣として右のごとき交換價値を有し得ることの根據は單純にそれが交換手段たるところから由來するものではない。それはたゞ謂はゆる計算貨幣を實現するかぎりに於いてさうであるにすぎない。……すなはち計算貨幣を實現することは交換手段をして抑も貨幣たらしめる根據であること以上のごとくとすれば、その貨幣の貨幣としての價値もまた計算貨幣の實現と關係を保たねばならないのはむしろ當然とされるのである」(註二)。かくして教授はその行論の「第二段においてはかゝる貨幣をして抑も貨幣たらしめる所以の價値」、すなはち計算貨幣の關係すべき價値が貨幣素材の價値に非らざることを說かれる。そうしてこの貨幣の固有價値に就いては、その著「純粹經濟學」においてもすでに言及せることを强調され、「主觀價値論の體系の上」でもそれの基礎づけの可能なることをもつて、私見を論難されるのである。この教授の行論の謂はゆる「第二段」なるものはまことに重要なる部分であつて、私見への反批判はすべてこれを基礎として展開されてゐるがゆゑに、教授の主張を主觀的な變容を加へることなく讀者に傳へんがためそれをそのままこゝに引用しておくことゝする。

註二　中山教授「貨幣の本質とその價値」四六頁參照。

中山教授はまづ舊著の次の一節を引用される。すなはち、「吾々が本來の貨幣を以つて計算貨幣の一の實現であると考へるならば貨幣はなにらかの形に於いて價値に關係したものでなければならないことは云ふまでもない。計算貨幣そのものがさらに根本的には價値の比較を本質とすることを考へれば

この關係は一層明となるであらう。勿論ここに貨幣が關係を保つところの價値は必ずしも貨幣の材料價値たることを必要としない。材料價値はそのもつとも自然的な形態であるけれども、廣義の貨幣の場合のごとく貨幣が固有の材料價値を有しない場合には當然他の價値であり得る。けれどもいづれにしても貨幣が一定の價値に關係することはそれが常に計算單位としての貨幣を背景として成立することから生ずる當然の歸結で」あると(註三)。そうして教授はさらに補足的にかく論せられる。

註三　中山教授「純粋經濟學」一二頁および前掲論文「貨幣の本質とその價値」四六―四七頁參照。

「まづこゝに言ふところの貨幣の價値は前段にいふ貨幣の交換價値ないし購買力そのものではない。それは言はゞかゝる購買力をして眞に購買力たらしめるがための價値、換言すれば貨幣をして抑も貨幣たらしめるがための價値である。本文に述べたごとく斯くのごとき價値と貨幣との關係は計算貨幣たる財と交換手段なる財とが同一の財である場合、さらに簡單に云へば貨幣みづからが素材價値を有する場合にもつともよく理解され得るであらう。貨幣の成立を交換の便宜から說明する說明の仕方が多くの有用性をもつてゐる所以である。しかしながら貨幣が計算貨幣を實現するといふ條件は必ずしもかゝる場合に於いてのみ滿されることではない。計算貨幣を實現するところの貨幣は現實に於いてもつともよく看取し得るやうにしばしばそれみづからなにらの素材價値を必要としないのみならず、さらに溯つて計算貨幣の機能そのものは必ずしもそれみづから價値ある財を前提として行はれることを必要としないであらう。いな現實の貨幣がしばしば素材價値をもたずしてよく貨幣たり得ることは、むしろ溯つて計算貨幣の機能そのものが必ずしもそれみづから價値ある財を前提としないことの結果と解すべきである。この解釋は私の云ふところの計算貨幣の本質を單なる價値の尺度に解する場合にはあるひははじめから、成立しないやうに見えるかも知れない。しかし既に述べたごとく私の計算貨幣は決して單なる價値尺度ではない。それはむしろこれによつて間接交換の達し得べき限界を規定するものである。この規定が通常さうであるやうに價値尺度たることと切り離し難いとしても、計算貨幣の本質はかゝる規定そのものにあつて價値尺度たることとそれ自身にはない。もしこの點が充分に强調せられるならば、貨幣が一面において計算貨幣を實現しつゝ他面においてその素材價値と分離し得る所以はたゞちに明らかとなるであらう」と(傍點筆者)(註四)。

註四　中山教授「貨幣の本質とその價値」四七―四八頁參照。

このやうに中山教授は、計算貨幣と單なる價値の尺度との異なれることを强調されて、計算貨幣との聯關において解決せんとするところの貨幣の固有價値の決して素材價値にあらざることを指示しておられるのである。そうして中山教授はこの敍述につづいて「少なくともこゝに貨幣と關係を保つと

ころの價値が『必然に材料價値でなければならない』といふ岡橋教授の批評が、當らないことゝなる筈である」と論難される(註五)。併しこゝに牢記さるべきことは、前掲の引用文においても傍點をほどこして讀者の注意を喚起しておいたがごとく、計算貨幣の結びつくべき價値が材料價値たることを必要としないことが、從つて貨幣の固有價値が貨幣素材の價値以外のものでもつて基礎づけ得られることが「充分に强調せられるならば」といふ假定のなされてゐることである。この貨幣の固有價値の基礎づけについて、そこにはなにら具體的なる論證がなされてゐるわけではない。さればこそ教授は、その基礎づけの可能性が「充分に强調せられる」と肯定的に述べておられない所以であらう?!

註五　中山教授「貨幣の本質とその價値」四八頁および拙著「貨幣本質の諸問題」一八〇頁參照。

こゝに引用せるところのものは、中山教授の行論の謂はゆる「第二段」と稱せられてゐるところの主張の全部に當るものである。そうしてこれは貨幣の固有價値に就いての所說のすべてでもある。この第二段の問題と交換手段としての貨幣の價値、すなはち購買力に關する第一段の問題とを論じたる教授は、さらに、その行論の第三段として、「これら二つの貨幣の價値が相互に如何なる關係に立つかといふこと」を問題とされる(註六)。この教授の行論の謂はゆる「第三段」ものちに重要なる證人として現はれるがゆゑに、冗長をもいとはずそれをこゝに引用しておかう。

註六　中山教授「貨幣の本質とその價値」四八頁參照。

すなはち中山教授は貨幣の固有價値とそれの購買力との關係について、その嘗て述べられしところを引用されてかく說いておられる。――「これ(貨幣の二つの價値の關係―筆者註)に對して私はかつてつぎのやうに述べた。『交換手段としての貨幣は一方に於いては固有の材料價値を必要とせず、他方に於ては一定の價値に關係をもたねばならぬことゝなる。このことは貨幣の價値の問題を著しく複雜ならしめる原因である。貨幣の價値を常にその材料たる金屬の價値から說明せんとする謂はゆる金屬主義と、これを全く一の記號または表章と解するところの謂はゆる名目主義との爭もまたここに由來するものである』と。この敍述はこゝでもまた問題の所在を明にするために役立つであらう。否、あへて云ふことを許されるならば、この敍述はその中に既に問題の解決への一つの方向を指示してゐる。卽ちそれは貨幣の價値を單にその數量との機械的關係に於いて見ることなく、むしろかゝる見方に對する一種の齒止めを常に貨幣をして抑も貨幣たらしめるところの價値に認めようとするものである。吾吾はこゝでもまた金屬主義と名目主義との相剋の間に具體的な成長を見るところのこの問題に對して詳論の餘裕なきことを遺憾としなければならぬ。しかしこの問題解決の方向に關してはさらに若干の言葉を重ねてその意味を明白ならしめなければならぬ。既に前段に述べたごとく交換手段としての貨

幣が一定の交換價値ないし購買力をもつと云ふことは、それが交換手段として云はゞ財貨の世界に對立することから生ずる歸結であつて、從つてその限りに於て貨幣素材の固有の價値は必要なる前提條件ではない。普通に貨幣論上の名目主義と呼ばれるものが鋭く指摘するのはこの點であり、貨幣價値の變動原因として主として貨幣數量の側の變動が注目せられるのもこれがためである。吾々は斯くのごとき意味に於いて貨幣價値論の最も重要な主題が量的變動論の領域にあることを述べた。しかし乍らこのことは未だ吾々が直ちに形式的な數量說を採ることを意味するものではない。謂はゆる貨幣數量說は右の考へ方を形式的に徹底せしめたものとしては充分に意味をもつであらう。けれども、それは唯それだけの意味に於いてはあくまでも形式的な表現にすぎないものであつて、貨幣の交換價値の決定を規定すべき內容をもつものではない。實際貨幣數量說がかゝる內容をもつためには增加される貨幣量が如何なる具體的徑路を以つて經濟社會の中にとり入れられるかの分析を必要とし、かゝる分析はやがて根本的に增加される貨幣量が如何にして貨幣として作用するかの基礎問題の考察に導かれざるを得ないのである。數量說が唯かゝる道によつてのみ眞に價値ある理論內容に到達し得るであらうと云ふことは舊い認識であつていま改めて强調する必要はないかも知れぬ。しかし吾々が數量說に對するかゝる批評から讀みとり得る一つの歸結については尙充分にこれを强調しなければならぬ。約言すれば數量說を內容づけることが貨幣の貨幣たり得る所以の價値を省ることなくしては達成し難いであらうと云ふことこれである。しばしば述べたごとく玆に貨幣が貨幣たり得る所以の價値と云ふものは單純に素材價値を指すものではない、それはむしろ端的に貨幣の均衡表現の作用に關聯しての價値である。從つて貨幣數量說の內容づけのためにかゝる價値背景を考慮せねばならぬとすることは尙ほいまだ貨幣の價値の決定に關して名目主義と金屬主義との素朴なる併合を必要とすると云ふ意味ではない。それはむしろ貨幣の均衡表現作用を個々の物價水準の間の關係に追及して行くことによつて數量說を動態的に活用しようとする用意をふくむものである」と(註七)。

註七　中山教授「貨幣の本質とその價値」四八—五〇頁參照。

以上のごとき三段の行論からして明らかなるがごとく、中山教授は、貨幣の根本的機能を計算貨幣たるの點に求め、この計算貨幣機能の價値尺度機能を前提せざることよりして、「計算貨幣の機能そのものが必ずしもそれみづから價値ある財を前提」するの必要なきことを結論される(註八)。そうして貨幣の固有價値は「端的に貨幣の均衡表現の作用に關聯しての價値」(註九)すなはち「價値關係」(註一〇)によつて基礎づけらるべきことを表明して、貨幣の固有價値を單純に貨幣素材の價値に結びつくべからざることをふたゝび强調して、私見を論難されるのである。しかもこゝでは「純粹經濟學」におけ

るとは異なつて、すでにワルラスに問題の解決への一つの方向づけの存することを昂揚されて、彼の謂はゆる「所望の現金（encaisse désirée）」をもつて貨幣の固有價値を主觀主義的に基礎づけんとする意圖を表示されるところがあつた。しかもシュムペーターにあつてもワルラスと同樣の企圖のなされておつたことに言及され、彼の貨幣數量說のうちに多くの貴重なる暗示の存することをも敎へられる（註一一）。

註八　中山敎授「貨幣の本質とその價値」四七頁參照。

註九　中山敎授　前掲論文　五〇頁參照。

註一〇　中山敎授　前掲論文　五三頁參照。

註一一　中山敎授　前掲論文　五〇—五一頁參照。

第三節　中山敎授の反批判への批判

前節における詳細なる引用によつても明らかなるがごとく、そこには「純粹經濟學」において展開されし見解よりの發展はまつたくなく、問題の解決は少しも含まれてゐない。しかも敎授みづからも認めておられるがごとく、それは「たゞ吾々の問題に對する方向を指示する以上には出」てゐないものである（註一）。從つて私の批判は、これを撤回するの必要なきがごとくである。併しこの反批判によつて敎授の解決への「意圖」のみは、前著におけるよりも一層明白にこれを理解することが出來た。そうして主觀主義的價値論ないしは一般均衡の理論などに就いての私の消極的な見解に對して、反省の機緣を與へられた敎授のこの御好意に對しては、こゝに萬腔の謝意を表しておきたい。とはいへ私のかゝる消極論の背景には、主觀的價値理論による交換論的貨幣理論樹立への野望、したがつてこれがための理論的苦難行がかくされゐることを强調しておかねばならない。さればこそ私の消極論は、いづれも常に「內在的批判」の形において展開されてゐる所以である。併し結果から言つて、私は、それからますます離れてゆかねばならない自分を見出した。從つて私は、たんにワルラスやシュムペーターを引き合ひに出されただけでは、いまだ「素朴」とはいへ、私見を棄てるには忍びない。ただ

教授は、シュムペーターを再び援用するについての理論的根據とも見らるべきものに多少言及しておられるをもつて、私もそれにつき自己の考ふるところを明らかにしておかう。

註一　中山教授「貨幣の本質とその價値」五一頁參照。

私の狹い知識からみて、シュムペーターにおいてはもともと問題になつた貨幣の價値といふのは、それの購買力、すなはち客觀的交換價値にほかならなかつた。それは物價の逆數概念であり、從つて反映價値たるに過ぎない。貨幣の固有價値のごときは、それゆゑに貨幣の「購買力をして眞に購買力たらしめるがための價値、換言すれば貨幣をして抑も貨幣たらしめるがための價値」(註二)のごときは、彼にあつてははじめから問題にはならなかつたやうに思はれるのである。さればこそ「貨幣の本質を交換手段に認める見方からは指圖證券的な貨幣價値觀(すなはち反映的な價値觀―筆者註)が生れ、また從つて貨幣の數量說的な把握が導かれることは既にしばしば指摘せられたところであつて改めて言ふまでもない」(傍點筆者)(註三)ほどの自明のことがらと斷言し得られるのであらう！　しかるにこれほどの自覺にも拘はらず、中山教授は、――「數量說を內容づけることが貨幣の貨幣たり得る所以の價値を省ることなくしては達成し難」く、それが「內容づけのためにかゝる價値背景を考慮せねばならぬとすることは、なほいまだ貨幣の價値の決定に關して名目主義と金屬主義との素朴なる併合を必要とするといふ意味ではない。」「それはむしろ端的に貨幣の均衡表現の作用に關聯しての價値」背景を考慮することであつて、このことは「貨幣の均衡表現作用を個々の物價水準の間の關係に追及して行くことによつて數量說を動態的に活用しやうとする用意をふくむものである。さうしてかくのごとき用意は、吾々の見るところを以つてすれば、たんに上述の理論の理論的歸結として要求されるのみではなく、すでに多少とも數量說の內容に立ち入らうとした人々によつて實際に試みられてゐるところである」――と述べ、私見とは反對に、「シュムペーターの數量說をもこゝに數へいれることが出來る」としておられるのである(註四)。

註二　中山教授「貨幣の本質とその價値」四七頁參照。

註三　中山教授　前揭論文　四五頁參照。

註四　中山教授　前揭論文　五〇頁參照。

而して中山教授はその主張の根據とも言はるべきものを若干例示されてかく述べておられる。すなはち、「不幸にしてシュムペーターに於いては交換手段概念の一方的なる强調のために數量說の敍述に現はれたるその內容的意義は比較的に注目されてゐない。しかし乍ら三つの命題を以つて示された其の數量說の內容は決して貨幣價値と貨幣數量との機械的なる關係を示すものではなく、それらはいづ

れもその簡單なる形式の中に含まれたる貨幣の具體的なる動きを規定するものに外ならない。積の和を以つて示されたこの數量說の表現から同義反覆以外の何ものをも讀みとり得ないとする人々は全くこの點に眼をおほふものであらう。これらは唯若干の例示に止まる。さうして吾々がこれに依つて示さんとすることは貨幣價値理論に於ける唯一の理論的財產とも云ふべき貨幣數量說に對して眞に價値ある內容を與へるの道は常に之が示す形式を超えて眞に貨幣の動く姿を捕へることであり、之を捕へるがためには貨幣が貨幣たり得るがための價値關係は遂に看過され得ないと云ふことである」と(註五)。

註五　中山敎授「貨幣の本質とその價値」五〇—五一頁參照。

これによつて吾々の知り得ることは、シュムペーターの謂はゆる貨幣理論の基本方程式に關する三つの命題の示す內容が「その簡單なる形式の中に含まれたる貨幣の具體的なる動きを規定するものに外ならない」といふことだけである。それは決してそこにシュムペーターが貨幣の固有價値を論じて居ることを例示せるものでは決してない。貨幣數量說を眞に內容のある有意義のものとするがためには、「これが示す形式を超えて眞に貨幣の動く姿を捕へることであり、これを捕へるがためには貨幣が貨幣たり得るがための價値關係は遂に看過され得ないと」はいへ、シュムペーターにおいてそのことがなされたわけでもなければ、いな實際はなされ得なかつたのである。さればこそ私は「シュムペーターを超へて」進まねばならないことを强調したのであつた(註六)。

註六　拙著「貨幣本質の諸問題」第二章第七節參照。

このやうに、中山敎授がその想源をそこに求められしシュムペーターにあつては、よし貨幣の固有價値の問題が解決されておらなかつたとしても、敎授が彼に據つて意圖されしところのものが奈邊にあるかは、もとより明白である。併しその意圖されし貨幣の固有價値の問題の解決をばシュムペーターの貫き得なかつた道に求めて行かんとされるかぎりは、依然として、その前途には幾多の障害の橫たはつてゐることを覺悟しなければならないであらう。私はこゝに再びこのことを繰返し强調せざるを得ざるの遺憾をおもふものである(註七)。

註七　拙著「貨幣本質の諸問題」第二章第三節および第四節參照。

さらに中山敎授の私見への反批判の積極的なる他の論點にうつらう。

すなはち、「氏(岡橋—筆者註)の主張は要するに私見(中山敎授の—筆者註)が貨幣としての價値と貨幣が貨幣たり得る所以の價値との關係を無視するものであるとし、之を無視するがゆゑに價値尺度の强調においてシュムペーターから一步を踏み出しながら、結局はシュムペーターの指圖證券學說へ逆戻りしてゐるものであると斷定されるのである。……けれども……二つの貨幣の價値の關係が無視せられて

ゐるとは抑も何處から得られる論斷であらうか」と論難せられ、そうして私の教授への批判の當らざる理由として前掲のごとき教授の行論の謂はゆる「第三段」に言及される。そうして「このことは前節第三段の問題群が私の貨幣觀において如何に重要な地位を占めるかを看取せられる讀者に對しては、もはやなにらの附言をも必要としない」と斷せられる(註八)。

註八　中山教授「貨幣の本質とその價値」五二―五三頁參照。なほ本書二八一―二八三頁參照。

私は決して、二つの貨幣の價値の關係が、中山教授にあつては、單純に「無視せられてゐる」と言つたのではない。教授の引用されし文言に續づいて私は「たゞ兩種の價値の存在を察知しておられるがごとくではあるが、間接的に言及しておられるに過ぎない」と述べておいたわけで、たゞ「言及」はあつても「論證」のなきことを暗々裡に强調するところあつたのである(註九)。而かも教授が有力なる論據として參照を求められる「前節第三段の問題群」なるものも、私が豫めこのことに備へんがために、第二節の二八一―二八三頁にわたつて引用しておいたがごとく、なにら私見への反批判に値ひすべき「論證」を含むものでは決してない。このことは讀者もすでに前節において看取しておられるところであらう　そこには成るほど中山教授の主張せられるがごとく、貨幣の固有價値と購買力との關係について「言及」せられるところがあつた。併しそれら二つの價値の關係の「ある」こと、そうしてこの認識がさらに多くの問題の解決に資することに「言及」されて、教授の意圖の決して素朴ならざる所以を强調されたにも拘らず、それらが如何なる意味において關係があるかといふことに就いては少しも觸れてはおられないのである。肝要なことは、この後の點に存するのであつて、ことに貨幣の固有價値の問題に對する解決のなきかぎりは、教授はその熱意にも拘らず、「貨幣の貨幣としての價値(貨幣の購買力―筆者註)と貨幣が貨幣たり得る所以の價値(貨幣の固有價値―筆者註)との關係を無視」せざらんと欲するも、「無視」せざるを得ないであらう(註一〇)。

註九　拙著「貨幣本質の諸問題」一八一頁および同書第二章第三節ならびに第四節參照。なほ中山教授「貨幣の本質とその價値」五二頁參照。

註一〇　中山教授　前掲論文　五二―五三頁および四八―五〇頁參照。

それはともあれ、中山教授がかゝる二つの貨幣の價値の關係を「無視」せられることなく、むしろシュムペーターの古い考へに從つて、この問題の解決への道を開拓せんとされしことに對して、私は心からなる敬意を表したのであつた。なぜなれば、私はすでにそのことを志して果し得なかつたからなのである。併しながらシュムペーターにあつては、そのことは成就されてはおらず、こと志しと相違してゐる事情を明らかにし、それと同時に、この同じ動向を辿らんとされし教授の意圖が少なくと

も具體的なる形においては表明されてゐないことに失望を感じたわけなのである。中山教授が貨幣の固有價値を基礎づけんとされる意圖を抱持してをられたればこそ、私は教授の開拓の勞を高く評價することを忘れなかつたのである。併しながら教授の意圖の如何にも拘らず、かゝる動向においては、遂に、その所期の目的の達成せらるべくもなきことを表明したるに過ぎない。いまや教授はこの點に關して、まことに含蓄のある敍述をもつて示唆されるところがあつた。それは前節二七七―二七九頁に引用せるところの教授の行論の謂はゆる「第二段」なのである。この「第二段」の主張のうへに立ちて、教授はさらに貨幣の固有價値の問題の主觀主義的價値理論による解決の可能を强調して、私見を論難されるのである。

すなはち、前掲の二八九―二九〇頁に引用せるところの論難に續いて、中山教授は、その反批判をかく展開される。「この場合、岡橋教授をして右のごとき論斷に到達せしめた唯一の理由は、貨幣の關係を保つところの價値を以つて必ずしも貨幣の材料價値たることを必要としないと述べた私の一句にあるものゝごとくである。或ひは教授をして言はしむれば、若しこれが證明せられないならば結局において貨幣の二つの價値の關係は解かれてゐないとされるであらう。しかしこの點についてはすでに前節の第二段においてふれたところであるから茲には繰りかへさない。簡單に言へば貨幣が計算貨幣を實現するかぎりに於いて關係すべき價値はむしろ一つの價値關係であつて決して單純なる計算貨幣の素材價値ではないのである」と(傍點筆者)(註一一)。

註一一　中山教授「貨幣の本質とその價値」五二―五三頁および四六―四八頁參照。

しかしながら中山教授は、「貨幣が計算貨幣を實現するかぎりに於いて關係すべき價値は、むしろ一つの價値關係であつて、決して單純なる計算貨幣の素材價値ではない」といふことを、「すでに前節の第二段において」「證明」したとでも考へておられるのであらうか！　一體、われわれは、「貨幣が計算貨幣を實現するかぎりにおいて關係すべき價値は……決して單純なる計算貨幣の素材價値ではない」といふこの簡單なる表意以上のものが、その謂ふところの「前節の第二段」において見出し得るであらうか。このことを豫めさけんがために、吾々は第二節において教授の謂はゆる「第二段」の主張の全文を引用し、特に傍點をも附してすでに讀者の注意を喚起しておいた所以なのである。しかも教授みづからも、そこに說けるところはただ「問題に對する方向を指示する以上には出」てゐないことを冒頭して前述來の反批判を展開しておられるのである(註一二)。私も遺憾ながら「前節の第二段」からは、遂に、問題に對する方向の「指示以上」のものを讀みとることが出來なかつた。この點についてさらに啓蒙の勞を吝みたまはざれば、たゞに筆者の幸ひとするところなるのみならず、貨幣の價

値の靜態理論において見るべきものゝ乏しきわが學界にとつても、その裨益せられるところ決して尠少ではないであらう。

註一二　中山教授「貨幣の本質とその價値」五一頁參照。

ともあれ、中山教授は貨幣の價値の基礎づけといふ問題を「單純に素材價値との連絡と見」る私見に極力反對され(註一三)、したがつて教授にとつては「ミーゼスのごとき基礎づけの仕方が主觀主義學說から期待し得る唯一の殘されたるものとも考へられない」と述べて、ワルラスやシュムペーターにおいてもすでにそれとは異なれる主觀主義的なる基礎づけのあることに、留意すべきことを敎示されるところがあつた(註一四)。

註一三　中山教授「貨幣の本質とその價値」五三―五四頁參照。

註一四　中山教授　前掲論文　五六頁參照。

もちろんワルラスは「所望の現金」をもつて保有效用をとなへ、ミーゼス流の消費效用のほかに限界效用理論のいまひとつ他の適用の仕方を見出してゐるがごとくである(註一五)。併しこのやうな概念規定の導入によつて到達しうるところは、一種の動機理論であり、それに一脈相通ずるところあるがごとくである(註一六)。そうしてそこにはさらに幾多の困難なる問題の伏在せることが豫感される。いまの私にはワルラスに就いてこれを論ずべき地位には居ない。たゞ敎授のごときその人を得て、ワルラスのうちに埋れたるまゝとなつてゐるかゝる寶が學界の共有財産として吾々の利用し得るがごとき狀態におかれることの一日も早からんことを期待してゐやう。

註一五　安井琢磨氏「貨幣と經濟的均衡」(「經濟學論集」第八卷　第四號)六九頁その他參照。

註一六　本書　第一編　第二章　第三・四節および第三章　第四節參照。

第四節　栗村氏の論難について

最近において栗村氏も盛んにワルラスを振りまわされる。私にとつてはまことに迷惑なことである。ことにシュムペーターを論ずる場合にも、ワルラスの理解を缺いては「駱駝を針の穴に通すことよりも尙ほ困難である」と强調されるにいたつては呆然とならざるを得ない(註一)。それは、價値の尺度としての貨幣の必然なることを說けるシュムペーターがいつの間にかこれを放棄して、交換の手段としての貨幣をのみ論ずるにいたれる所以が、シュムペーターみづからによつてなにら說かれてゐるところのなきことをば指摘せる私に對して、栗村氏はワルラスの影響をもつてすべてを簡單に片付けてをられるからである。もちろんシュムペーターの見解のうちにはワルラスよりの影響のあと著しきものがあらう。併しながら單にワルラスを引合に出すだけでは、問題が解決されるわけのものではない。しかも栗村氏のこの批判なるものが、私の著書「貨幣本質の諸問題」を讀んだうへでのことなのだから、私はまつたく面喰はざるを得ない。なにらかの成心あつての言葉（敢て誹謗とは言はないでおくが）として見ればいざしらず、そうでない純然たる學問的な友情から出たるものだとすれば、栗村氏からかかる奇襲をうけやうとは孫子の兵法書にも見出しがたき新手であつた。たゞ見解上の相違があるのであれば、これは餘儀なきことである。もしもそうであるならば、堂々と自己の所信を披瀝して啓蒙の勞を吝むなかれ。

註一　栗村雄吉氏「貨幣の根本機能に關して高田博士に敎を乞ふ」（「經濟學研究」第七卷　第四號）一五七頁以下參照。

元來わたくしは、貨幣の基本的機能觀と貨幣の價値理論との聯關性を强調するものなのである。貨幣の根本的機能が貨幣の價値の問題と無關係に論ぜられるときには、その貨幣の理論の體系の十全性、それの完足性は破壞されざるを得ないと考へてゐる。このことはまた、商品の價値理論との聯關の問題にも通じてゐることは言ふまでもなきところである。從つてまづ栗村氏の貨幣價値理論について論じたる私は、この視角からして氏の貨幣の根本的機能觀に對して一つの問題あることを指摘したわけなのである(註二)。商品價値理論と貨幣價値理論との聯繫についてしきりに强調される栗村氏が、もつと手近かな貨幣の價値の理論と貨幣の根本的機能の理論との內的聯繫を顧みやうとしないのはなにゆゑか？　氏の貨幣必然理論、したがつてその貨幣の根本的機能觀そのものについては、もとより私は異論をもつてゐる。併しこれはまた論ずべき機會が他にもあらう。といふのは、その異論なるものが、いつに貨幣の基本的機能理論と價値理論とのこの內的聯繫を看過せることに基づけるものであると言ふことが出來るからなのである。それで問題はなによりもまづ、この間の聯關を考へることである。

註二　「内外研究」第十卷所載の拙稿（本書　第一編　第一章および第二章）參照。

併しながら、價格の一般的表現の手段なる貨幣の機能が貨幣價値の理論と商品價値の理論とを聯繫せしめ得るものであるとすれば、それは價値の尺度機能を前提とせざるかぎりは不可能である。いな嚴密には、價格の一般的表現の手段なる貨幣の機能は價値の尺度なる機能へといたるか、むしろ逆に交換手段としての機能への從屬的地位にあまんじてゐるか、のいづれか一方に徹底化し、醇化されねばならないであらう。しかれども後者への方向を辿るにおいては一應はかゝる二つの價値の理論と理論との内的聯關は斷ち切られざるを得ない。（もちろんこの場合にあつても動態論的な商品價値理論と貨幣價値理論との聯繫のなほ見出し得ることについては、もとより異論の餘地はなからう）（註三）。この點にあつては、シュムペーターはむしろ栗村氏よりも徹底して價値の尺度機能の重要性を強調してゐる。併し彼はその價値の尺度機能をも放棄するにいたつたが、それをもつてなにがゆゑに終始し得なかつたかの理由については、むしろ彼の方法論的なる缺陷のうちにその説明を求めねばならないであらう。こゝにこそシュムペーターが交換手段をもつて貨幣の根本的機能となすにいたれる根據が祕められてゐるのである。その點に思ひをいたすことなくして、ワルラスを引合ひに出すのみでは、問題の解決はなく、たゞ解決の徒らなる遷延あるのみである（註四）。

註三　本書　第一編　第一章ことにその第三節參照。

註四　拙著「貨幣本質の諸問題」第二章參照。

栗村氏のワルラス論を俟つまでもなく、シュムペーターは遂いに價値の尺度機能を棄てゝ交換手段としての機能をとり、從つて指圖證券學説を樹立せざるを得ざるにいたつたことについては、シュムペーターがワルラスよりの影響のあつたかいなかに拘らず、彼の理論體系を貫ける方法論的なる制約に因由することは明らかである。私はワルラスに依據することなくして、栗村氏の讀まれた筈の私の著書のなかで、このことをば强調しておいたのである。それをいまさら栗村氏からワルラスを持ち出して敎へられやうとは、まつたく皮肉なまはりあわせである。私は敢へて同じく學徒たる栗村氏のために、氏の暴言をこゝに詳細に引用することを控へておく。たゞ一言だけ附加してこのまつたくの枝論を結んでおかう。

お互ひはいまだ未熟なる一介の學徒にすぎない。勉强はまだこれからだ。切磋琢磨もつて鞭撻し合ふことだ。内容のなき空疎なる言葉で高壓的に出ることはやめやう。お互に謙虛な氣持でものを考へることだ！

第五節　結　語

以上において明らかなるがごとく、中山教授の私見への反批判はなにら問題の解決を含めるものではない。教授の反批判の内容は「純粋經濟學」における問題の見解を再述したるものたるに過ぎない。たゞ外見的なる差異を擧ぐれば、ワルラスの援用によつて問題の解決への絲口が舊著におけるがごとく主としてシュムペーターにばかりでなく、ワルラスにも看取され得ることを指示せられし點これである。併し教授自身も述べておられるがごとく、それは單に「問題に對する方向を指示する以上には出てない。」從つて私の教授に提示せる異見は、依然、その撤回の必要を見ないであらう。併し以上の私見への反批判を通じて教授の意圖の奈邊にあるか、その全貌だけは、次第に明確となつた。そうしてそれが私の意圖せるところと、全く、その軌を一つにせるものなることを知つて、非常に意を强くしたところである。たゞ教授のとらんとされる道程と私の辿つてゐるそれとの間には相當の懸隔がある。いなそれら二つの道程はむしろまつたく對蹠的なる關係に立つものと言ふべきであらう。

前節において私見への中山教授の反批判に答へたる私は、さらにかゝる教授の反批判の根據ともなつて居る計算貨幣中心說に對して自己の抱ける二三の疑問を提示してこの一篇を終ることゝしやう。

まづ第一に教授の計算貨幣の必然論について率直に言ふことが許されるならば、それはまつたく教授の意圖を裏切るものではなからうか！　高田博士の主張せられるがごとく、「一般均衡の成立は必ずしも一般的價値尺度を必要とせず、それはたゞ、間接交換を前提とするだけで」充分であらう(註一)。もちろん一般的均衡の狀態にあるすべての商品の價格は、ある特殊の一商品をもつて表示せるそれら總べての商品の價格と「一定の關係」になければならないであらう。この特殊の一商品を numéraire と呼ぶならば、これあることによつてはじめてかの一般均衡の方程式の呈示するところの價格間の「一定の關係」が成立するといふのではない。既でに存在してゐるところの關係が numéraire によつて統一的なる表現を得るといふこと以上を意味するものではない。表現せらるべき關係そのものは numéraire を俟ちて、はじめて、生じ得るものではない。ワルラスの裁定方程式に就いての高田博士の解釋は、この點を强調せんとされしにあるものゝごとくである(註二)。ワルラスの一般均衡の方程式の表明するところのものは、たゞ、「一般均衡が成立してゐる場合における各經濟數量間の關係の記述である」(註三)。この方程式に關するかぎりにおいては、そこには numéraire の必然性についてはなにら含意されるところなきがごとくである。いまこの點を措くとするも、中山教授の計算貨幣が貨幣素材の價値に關係をもたざるかぎりは、貨幣の交換手段機能に對する計算貨幣機能の優位性、それの概念

的な先行性は論證され難いであらう。これ私が計算貨幣なる機能にかはつて價値の尺度なる機能をもつて貨幣の根本機能なりとなし、このことを貨幣の必然性の論理を通じて明らかにせんとせし所以なのである(註四)。

註一　高田博士「貨幣の本質について」(「經濟論叢」第四十六卷　第四號)三一頁參照。

註二　高田博士　前掲論文　三六―三七頁參照。

註三　高田博士　前掲論文　三五頁參照。

註四　本書　第二編　第五章「貨幣必然性の論理」參照。

さらに中山教授は貨幣の購買力とこの購買力をして購買力たらしめるところの貨幣の價値、すなはち固有價値とを認めておられる。そうして紙幣をもなほ固有價値の保持者としておられるがごとくである(註五)。このかぎりにおいて教授は貨幣の購買力、反映價値と貨幣の固有價値との關係を如何に解決せんとされるか？　こゝにも相當困難なる問題の存することが强調されねばならない。貨幣の反映價値を問題とする貨幣數量説をば内容づけるがために、教授は貨幣の固有價値の顧みるべきことを强調される(註六)。そうしてこの貨幣數量説の内容づけは、貨幣の固有價値をそれの素材價値に結びつけんとするところの「素朴」な理論のよくなしとげ得るところではないと斷定される(註七)。まことに貨幣素材の價値に依據せずして貨幣の固有價値を基礎づけることの困難もさることながら、さらに貨幣の固有價値と反映價値との關係の問題をも一擧に解決せんとせられる中山教授の深遠なる貨幣理論のごときは、まさに私にとつては夢想だにもなし得ざるところのものである。

註五　中山教授「貨幣の本質とその價値」四七頁參照。

註六　中山教授　前掲論文　四五―四六頁および五〇頁參照。

註七　中山教授　前掲論文　五三―五四頁參照。

ともあれ少なくとも私の意圖そのものは、中山教授の意圖されるところとまつたく異なるところなきがごとくである。たゞ教授の辿られる道程と私のそれとの間には相當の懸隔がある。自己の不敏にも顧みず、ふたゝび問題の所在を明らかにして教へを乞ふ次第である。たゞ教授を煩はすことなきやをおそる。敢へて啓蒙の勞を吝まれずば幸ひである。

第七章　貨幣本質論への一寄與

——竹島教授「貨幣本質の研究」を讀みて

第一節　序　說

貨幣の本質をめぐる研究は、その發するところ遠くかつ古い。古來、いくたの先哲、諸賢はそれぞれその時代とともに考へ、惱みそうしてそれに答へんとしたのであつた。こゝに紹介せんとするところの竹島富三郎教授の新著「貨幣本質の研究」なる一篇も、時代とともに考へ、惱み、その問題の解決に想を練ることながき著者が一般社會人のためにその向ふべきを指示せるまことに警世的なる根本的指針の書なのである。

本書は全體を九つの章にわかたれてゐる。最初の二つの章は、謂はゞ序論篇とも稱せらるべきものである。そうして第三章以下の七つの章は、その本論にも該當すべきものなのである。

著者は第一章において、まづ「貨幣の本質の研究に於いて如何なる對象が問題とされ、その問題が如何なる體系のもとに研究されるか」、すなはち本書の「問題と體系」とを確定される(註一)。そうしてその第一の問題をば、「貨幣の意義」如何であるとなし、第二は貨幣の本質の問題であり、第三の問題は貨幣の機能の問題これである(註二)。これら三つの問題が「貨幣の研究に關する根本問題」であり、また原理的な部分である(註三)。さらに、このやうな本質的なもの、原理的なものが、如何に現象し、具現化するかといふことも、これ、また、看過し得ざるところである。蓋し、現實の貨幣事象なるものは、かゝる本質の現象し具現すべき形式であり、それが媒介體でもあるがゆゑに、それを通じて逆に、間接的に、貨幣の本質を解明すべき鍵が與へられるからである。かくして教授は、第三章以下の七つの章において、「貨幣の研究に關する根本問題について、そのこれが原理を思索、研究すると同時に、これが事實すなはち現象形態をも調査、研究」しておられる所以である(註四)。

註一　竹島教授「貨幣本質の研究」(昭和十一年　文雅堂發行)三頁參照。
註二　竹島教授　前掲書　三―七頁參照。
註三　竹島教授　前掲書　八頁參照。
註四　竹島教授　前掲書　八頁參照。

ところで教授は、さらに、これらの問題の展開にさきだちて、斯かる行論の展開のうへに、一貫して保持されし研究の方法をば、第二章において明示しておられる。この著者の研究的態度は、また、行論の體系的構成をも制約し、各章はそれぞれ有機的なる聯關のもとに論述されてゐるのを見うるのである。

以上のごとく教授は、貨幣の本質をあるひは直接的に、原理的に究明するかとおもへば、あるひはまた間接的に、事實から逆に歸納してこれを捉らへんとし、原理的研究と事實的研究と兩々相まちて全面的なる本質の解明を展開しておられるがごとくである。しかもそれが僅々二〇〇頁にたらざる紙幅のうちに、實に、手ぎはよく壓縮されてゐるのであつて、その手練のほどは、まことに、教授の深き造詣をしのばしむるに足りる。そこには理論あり、實踐あり、本質と實在との渾然融合せる輪奐の美は、驚異に値ひするものがある。もとより私は、これらの問題について著者の見解をば、一々とりたてゝこゝに紹介せんことを意圖するものではない。それは私のよくなし得るところでもなければ、また他に適當なる人があることであらう。

それはともあれ、本書の中心的なるテーマーは貨幣そのものゝ本質の究明であり、從つて第三、第四、第五の三つの章につきるものとも言ひ得るがゆゑに、私もこれら三つの章のうちにもられし數あ

る問題のうち、たゞその二三の點についてのみ教授の見解を紹介し、あはせて私みづからの讀後感を述べてみることゝしやう(註五)。

註五　本章に收錄するところのものは、もと同じ題目のもとに「銀行研究」第三十二卷　第二號（昭和十二年二月號）に新刊紹介として發表せるところのものである。

第二節　貨幣本質觀

竹島教授は、一體、如何なる貨幣の本質觀にたつておられるか？

これは吾々のなによりも第一に知らんと欲するところの疑問である。私はまづ教授の「貨幣の意義」について聞かう。教授に從へば、「そもそも貨幣の意義は……貨幣の職能と關聯してゐるのである。すべて社會的生成物は自然的產物とは異なつてゐて、それの意義は自然的產物のごとく、その體もしくは構造によつて決定されるよりは、寧ろその用もしくは機能によつて規定されるのである」と(註一)。すなはち貨幣の概念規定は、ものそのものゝ自然的屬性のうちに求めらるべきではなくして、それの機能のうちに求めらるべきものなることを主張せられる。「しからば、貨幣の機能、とくに本質的機能は如何なるものであるか。それが根本問題である」(註二)。「かくて貨幣の意義はつぎのごとくに定立される。すなはち、貨幣は一般的な流通の手段たるとゝもに、一般的な流通の手段たるのみのものであると。かくのごとく、貨幣は常に流通の手段として轉輾、流通いな循環してやまぬものであるから、流通手段といふよりも、むしろ循環手段と謂ふべきである。この意味で貨幣は循環手段であると見られる」と(註三)。

註一　竹島教授「貨幣本質の研究」二五―二六頁參照。

註二　竹島教授　前掲書　二六頁參照。

註三　竹島教授　前掲書　三七―三八頁參照。

このやうに教授は、貨幣の概念をば「一般的な流通の手段である」と規定して、さらに貨幣の本質をもつてそれの「絶對的手段性」、「代替性」または「自由(化)性」、「束縛性」にありとされる(註四)。而して貨幣の「手段性」とは、それが「流通の相手物たる物、すなはち財が存するかぎりにおいてのみ、始めて存立の意味を獲得するところのものであるに過ぎない。物あつての貨幣、財あつての貨幣で」あり(註五)、「それ自體は如何なる場合においても、手段たるのみのものであつて、目的の世界に進入することを豫定されてゐないものである」といふ點に求められる(註六)。そうして「商品は交易、流通の相手物たる點において手段であるが、常に、……手段であるのではなくして、やがては相手物たる地位を脱却して、ついに財として交易場裡から脱却して、生産または消費の世界に成佛するものである。しかもこの離脱、成佛が最初から豫定されてゐるものである。この意味で商品の手段性は相對的のものである。しかるに貨幣の手段性は、これに反して絶對的のものである」(註七)。

註四　竹島教授「貨幣本質の研究」四七―五三頁參照。

註五　竹島教授　前掲書　四三―四四頁參照。

註六　竹島教授　前掲書　四七頁參照。

註七　竹島教授　前掲書　四七頁參照。

しからば貨幣の本質としてのその「代替性」、「自由(化)性」とは何にか？　教授に從へば、「貨幣あるによつて、主觀的、品質的、價値的、文化的のものが、客觀的、數量的、價格的、經濟的のものに轉化され得るのであり、元來、比較、計量し得ない主觀價値が、貨幣あるによつて、數量的に容易に比較、計量され得ることになつて、やがて個別的、特殊的のものが、總體化され、一般化され得ることになるのである。……故に、貨幣あるに基づいて、人的束縛關係、すなはち強制關係が頗る緩和され、自由化されて來るのである」と(註八)。換言すれば、例へば債務關係にあつても、貨幣でもつて辨濟し得るならば、他の物的辨濟に比して束縛性が少なく、かつ如何なる貨幣でもつてもなし得るところであるがゆゑに、「貨幣の本質には、手段性以外に、なほ代替性、したがつて自由化性が認められる」と言はれるのである(註九)。

註八　竹島教授「貨幣本質の研究」五〇頁參照。

註九　竹島教授　前掲書　五一頁參照。

また、「貨幣によつて吾々人間は解放され、自由となるのであるが、その反面において、又たそれとは逆に、吾々は貨幣によつて頗る拘束され、強制されもするのである。すなはち貨幣あるによつて、吾人は肉體的奴隷の境地より解放され得ても、その反面において特に資本的奴隷の地位に沈潜せざるを得ないことになるのである。この意味において、貨幣には束縛性が認められる」と言はれる(註一〇)。

註一〇　竹島教授「貨幣本質の研究」五二―五三頁參照。

ところで、およそものゝ本質とは、そのものをして他者より區別し、そのもの自體に固有の特質がこれなのではなからうか。果してしからば、貨幣の本質として前掲のごとくに、手段性や代替性や自由化性やあるひはまた束縛性を云々することは、實際、妥當であらうか。貨幣をして貨幣たらしむるものは、それの單なる手段性でもなければ、代替性でも、自由化性でもない。況んやそれの束縛性でもなほさらない。もちろんかのフランス大革命以來、われわれは法律のまへにはいづれも平等なる自由人となり得た。それにも拘らず、經濟的には必ずしも平等ではなく、「資本的奴隷」の形において束縛されるにいたつた。このやうな貨幣經濟に特有なる束縛性は、これを看過し、無視するを得ない眼前の事實である。併しながらこのことは貨幣經濟に特有のものではあつても、貨幣そのものに固有の本性であるとは言ふことが出來ない。むしろこれらの側面は、貨幣がみづからの本性をあらはにせんとするに際してひきおこせる人間生活におけるかづかづの波紋たるにすぎないのではなからうか。この點なほ究明さるべき餘地が多分に殘されてゐる。さればこそ教授は、「貨幣の本質(貨幣の貨幣たる所以)は、流通手段性に求められるのである」(傍點筆者)となせる所以ではなからうか(註一一)。

註一一　竹島教授「貨幣本質の研究」五三頁參照。

かくのごとき貨幣の本質は、また、貨幣の機能を規定し、逆にその本質を理解すべき鍵がそこに存するがゆゑに、換言すれば、「貨幣の本質的機能は貨幣の本質で規定され、貨幣の本質は貨幣の意義と關聯し、貨幣の意義は貨幣の本質的機能で決定されるのであつて……それは相互に不可離の本質的聯關に、すなはち一如の關係に置かれてゐる」がゆゑに(註一二)、吾々はつぎに教授の貨幣の機能觀を一瞥しやう。

註一二　竹島教授「貨幣本質の研究」二六頁註八參照。

第三節　貨幣機能觀

竹島教授は貨幣の機能をば本來的すなはち本質的機能と附隨的機能および派生的機能の三つに分たれる。そうして從來おほくの論者によつて擧げられし幾多の貨幣の機能をば、それぞれのもとに類別し、整序しておられる。たゞこゝに私のとくに關心を有する一點は、貨幣の本質的機能が「一般的に流通の手段たることにあり、かつ流通の手段たるのみのものである」とされることである(註一)。そうして流通の手段以外のすべての貨幣の機能は、あるひは附隨的機能とし、あるひは派生的機能としておられる。かくして吾々が教授の貨幣の概念規定、その本質論および機能觀を通じて知り得ることは、あるものはそれが流通の手段または交換の手段たることによつて、そうしてそれのみによつて貨幣となるといふことこれである。このやうな貨幣の本質觀はまた貨幣の商品性の否定に導かるべく、したがつて教授は名目主義者であり、私の謂ふところの「交換手段學說」を奉持しておられるがごとくである(註二)。

註一　竹島教授「貨幣本質の研究」六二頁參照。

註二　拙著「貨幣本質の諸問題」二〇頁以下參照。

しからば斯かる貨幣の本質觀に立ちて、從來、貨幣の機能として述べられし多くのものをば、あるひはこれを本質的機能とし、あるひはまた附隨的機能ないしは派生的機能として、一つの有機的なる聯關のもとに持ちきたすことを得るものなのであらうか。左右田博士のごときは、むしろ、貨幣の機能としてはもつぱら交換の手段、あるひはそれの反面たる價値の客觀的表彰のみしか認めず、それ以外の機能をもつて貨幣本來の機能ではないと論斷してゐる。これは貨幣の本質觀として交換手段學說をとれる博士としては當然の歸結といふべく、本質的機能以外によし附隨的ないしは派生的の機能としてゞあれ、諸々の機能をなにらの無理もなく有機的な統一のもとに體系化することが果して可能であらうか(註三)。こゝにも異論の餘地が殘されてゐる。併しながらこの點はいま姑らく措くとするも、なほ「價値の基準」たる機能に關して問題がある。それは交換手段學說のうへに立ちて、そのさいに語らるべきところの「價値の基準」なる貨幣機能の持てる意味內容なるものは果してなにであるか、といふ點である。このことは貨幣の價値の概念規定とも密接なる聯關を有するものなのである。

註三　拙著「貨幣本質の諸問題」第一章とくに四三頁註參照。

しかれども教授はこの新著においては、貨幣の價値に關しては、たゞ、斷片的に、言及しておられるに過ぎない。これは、すでに他の著書において論ぜられたるがゆゑにか、あるひは恐らくは、この

新著の問題とされるところが貨幣の問題のうちでとくに「貨幣本質問題、貨幣の質的、靜的問題」、すなはち「貨幣の本質それ自體に關する問題」であつて、貨幣の價値の問題とは「量的、動的の問題」であるがゆゑにか、それらのいづれかの理由によることであらう(註四)。いまもしその理由が前者によるものとすれば、いまだ私は教授の舊著「貨幣原論」を偶目するの機會をもたないがゆゑに、しばらくこれを措く。併しながらもしも後者の理由にもとづくものとするならば、貨幣の本質の問題としてなほ貨幣の價値の問題もそのうちに含められねばならないことが强調されねばならない。しかも貨幣の價値の問題とは、動的な、量的な問題がその全部をなせるものではない。むしろ「貨幣の價値の特質は貨幣の本質で規定され」、靜態的に究明さるべきものなのであつて、これこそは貨幣の價値の問題のもつとも重要なる部分である。そうしてその量的な動的なる問題はたんに從たる部分をなすに過ぎないのではなからうか。この意味において教授が本書のうちで貨幣の價値の特質に關してたゞ斷片的に言及せられしに過ぎざることを、多少ものたりなく思ふのである。それはともあれ、教授は貨幣の價値についてその特質をば本書の諸所に吐露しておられるがゆゑに、私はこれによつて貨幣の價値の基準としての機能に對する教授の見解に關し、若干の疑問を呈示して御教示を煩はしたいと思ふ。

註四　竹島教授「貨幣本質の研究」一八四頁、なほ七頁および一八―一九頁參照。

教授は「一般的な價値の基準」としての貨幣の機能と「一般的流通手段」なる機能との關係をかく說いて居られる。すなはち「貨幣の本質的職能は……一般的に流通手段たることにあり、かつ流通の手段たるのみのものである。すなはち一般的流通手段たるかぎりに於いて貨幣である。これは貨幣の第一次的な、必然的な、特有な、職能である。しかも貨幣が流通の手段となるに當つては、それは價値的流通であるから、勢ひ價値割合、價値比率が同時的に存在し、しかもその價値比率の一方的基準が、常に貨幣におかれてゐるものであるから、貨幣は流通の手段であると同時に、必然的に一般的な價値の基準とならざるを得ない。貨幣のこの流通手段たる職能と價値規準たる職能とは、同時的に必然的な關係におかれてゐて、不可離のものであるが、貨幣としては流通手段たることが主たる職能であつて、價値規準たることは、從たる職能と見ざるを得ない」と(註五)。

註五　竹島教授「貨幣本質の研究」六二―六三頁參照。

しからば教授は「價値の基準」としての貨幣の機能の「必然的な附隨的職能」たる所以をば如何に論證しておられるか？　教授に從へば、「貨幣が價値規準となり得るのも、貨幣が一般的交換手段であるからである。否な嚴密に言へば貨幣は一般的な交換の手段たることによつて、價値の基準と……もなり得るところに、貨幣たる特質(本質)が臥つてゐるのである。畢竟ずるに、經濟價値あるものは、

ある程度において、すべてが價値の基準たり……得るところである。たゞそれぞれその經濟價値の成立の根據に相違が存し、この相違に基づいて、その經濟價値が財となり、商品となり、資本となり、貨幣となるに過ぎない。かくて貨幣の經濟價値の成立の根據は、貨幣が一般的な交換の手段たることを、それの本性としてゐる點に求められるのである」と(註六)。

註六　竹島教授「貨幣本質の研究」三六―三七頁參照。

すでに引用せしがごとく、「貨幣の價値の特質は貨幣の本質で規定される。」從つて交換手段機能をもつて第一次的な根本的の機能なりとする交換手段學說をとつておられる教授にあつては、貨幣の價値（經濟價値）の成立の根據が交換の手段なるこの基本的機能のうちに求められることは、その當然の歸結と言はねばならない。かくして、一方においては、經濟價値あるものはいづれも價値の基準となり得るかぎりは、このやうな機能をもつて貨幣そのものに固有の機能なりとは言ひ得ざるのみならず、他方においてはまた、貨幣の價値そのものが貨幣の固有の機能たる交換手段機能に基づけるにおいては、價値の基準たる機能はなにら貨幣に固有なかつ基本的な機能とはなし得ざるところである。

しかれども貨幣の價値とはかゝる機能價値、したがつてまた反映的なる價値（註七）たるのみのものであらうか？　換言すれば、貨幣にはかゝる反映的なる價値のほかに、それ自體に固有の價値、教授の謂はゆる「實體價値」なるものは認められないのであらうか？　もししかりとすれば、ミーゼスやヘルフェリッヒが當面せしがごとき難點を教授は如何に解決せんとされるであらうか。こゝにもなほ異論なきを得ない（註八）。さらにこれと關聯して交換手段としての機能と價値の基準としての機能との先後の問題、そのいづれが、根本的な基本的な機能なりやの問題についても、問題は問題を生んで異論はつきない（註九）。いまこれらの點はすべてこれを看過するとしても、教授の謂はゆる「價値の基準」なる機能そのものゝ意味內容が問題となる。

註七　竹島教授「貨幣本質の研究」七七頁參照。

註八　拙著「貨幣本質の諸問題」第一章　第四節および第五節とくに一〇八頁以下參照。

註九　前揭　拙著　第一章　第三節の四「一般的價値の尺度としての機能」および二一頁以下、二七六頁參照。

教授に從へば「貨幣あるによつて、主觀的、品質的、價値的、文化的のものが、客觀的、數量的、價格的、經濟的のものに轉化され得るのであり、元來比較、計量し得ない主觀價値が、貨幣あるによつて、數量的に容易に比較、計量され得ることになつて、やがて個別的、特殊的のものが、總體化され、一般化され得ることになるのである」（註一〇）。こゝに教授の謂はゆる「價値の基準」としての貨幣の機能の意味があるものゝごとくである。併しながらみづからに固有なる價値、換言すれば實體價

値なき貨幣が教授の言はれるがごとき「價値の基準」として機能し得るであらうか？　教授は貨幣の價値の反映性を主張される(註一一)。貨幣の價値は貨幣たるがゆゑの、その機能のゆゑの價値であり、從つて貨幣と交換される財貨の價値で決定されるがゆゑに、一種の反映價値である。從つてそれは貨幣たり得るがための、貨幣となり得る基礎であり根據であるところの價値、すなはちそれ自體に固有の價値ではない。かゝる反映價値をもつて財貨の價値が比較され、計量されることが可能であらうか。同じく貨幣の價値の反映性を主張するミーゼスは、貨幣による財貨の價値の計量を不可能なりとして、價値の基準としての貨幣の機能をば、たゞ價値の表示手段たるの意味においてのみ用ふべきを主張してゐるのである(註一二)。かくして教授も貨幣の價値の反映性を主張せられるかぎりは、その言ふところの「價値の基準」なる機能は、クニース的な價値の尺度なる機能ではあり得ない。むしろそれは、ミーゼスやヘルフェリッヒあるひは左右田博士の言はれるがごとき「價値の表示者」、「價値の客觀的表彰」などとまつたく同一の內容のものに歸しはしないであらうか。そうしてこれこそが貨幣本質觀における交換手段學說の必然の歸結とも言ふことが出來る(註一三)。併しこれらは所詮、立場の相違から教授の眞意を理解し得なかつたことによるものであらう。

註一〇　竹島教授「貨幣本質の研究」五〇頁參照。

註一一　竹島教授　前揭書　七七頁參照。

註一二　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. 2. Aufl., 1924, I. Teil, Kap. 2.

註一三　拙著「貨幣本質の諸問題」第一章　第三節の四參照。

第四節　結　語

それはともあれ、竹島教授の「貨幣本質の研究」なる一卷は、貨幣學界近來の收穫であつて、非常にアンビシアスなる勞作であると言ふことが出來る。それは從來唱へられ來たつた多くの主義や主張が網羅され、收錄されており、よくこの一卷のうちに壓縮され、包括されてゐるからである。この點が本書の著しき特色であつて、各章にわたつて看取せられるところである。例へば貨幣の意義に關しても、その博引旁證なるはもちろんのこと、また貨幣の機能についても、從來說かれしところのものは悉くこれに言及しておられるのである。人はこの一卷のうちに豐かなる思想を汲みとり得るとゝもに、その巧みなる構成美に驚くであらう。しかれども他面において、このやうな豐富なる材料も狹少なる紙幅のうちに壓縮されておつて充分なる連絡をもつて說かれてはおらない。そうしてそれらはいづれも非常に暗示的に述べられてゐるがために、ややもすれば著者の意圖せる全體的な構圖がみうしなはれんとするの憾みがある。この點いま少し啓蒙的なる詳說が望ましい。前揭せる私の異見のごときも、畢竟は、この著作のきはめて簡潔にして暗示的なる敍述が私をして教授の眞意を理解し得ざらしめたるものなることを曝露するにすぎないであらう。もとより本書の學的價値を寸毫も損するものではない。ただ教授が吾々後進のためにいま一層の啓蒙の勞を吝まれざらんことを切望して、この紹介の筆を擱く。

（一二・一・一二）

貨幣價値論序說　終

附　　錄

I　參考文獻目錄
II　人　名　索　引

I 參考文獻目錄

A

Aftalion, A., Monnaie, Prix et Change. Expériences récentes et théorie. Paris 1935.〔**松岡孝兒譯**「アフタリヨン・貨幣・物價・爲替論」昭和十二年〕

Altmann, S. P., Zur deutschen Geldlehre des 19. Jahrhunderts. Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19. Jahrhundert, Gustav Schmoller zur 70. Wiederkehr seines Geburtstages, 24. Juni 1908. Leipzig 1908. I. Teil, Abhandlung VI.

荒木光太郎,「貨幣概論」昭和十一年.

Aristotle, The works of Aristotle. Ross' ed.

Vol. IX. Ethica Nicomachea, trans. by W. D. Ross. Oxford 1925.

Vol. X. Politica, trans. by B. Jowett. Oxford 1921.

Ashley, W., Review of "Bernhard Laum, Heiliges Geld: eine historische Untersuchung über den Sakralen Ursprung des Geldes. Tübingen 1924." The Economic Journal. Vol. XXXV. 1925.

B

Böhm-Bawerk, E. v., Kapital und Kapitalzins. II. Abt. Positive Theorie des Kapitals. I. Band. 4. Aufl., Jena 1921.

Bordes, W. de., The Austrian Crown. Its depreciation and stabiliz tion. London 1924.

Bortkiewicz, L. v., Der subjektive Geldwert. Schmollers Jahrbuch f. Gesetzgebung, Verwaltung u. Volkswirtschaft im Deutschen Reiche. 44. Jahrg. 1920.

Bücher. K., Entstehung der Volkswirtschaft. Vorträge und Aufsätze. I. Sammlung. 16. Aufl., Tübingen 1922.〔**權田保之助譯**「經濟的文明史

論」改刻再版　大正十年〕

Butchart, M., Money, selected passages presenting the concepts of money in the English tradition 1640–1935. London 1935.

C

Cameron. V. L., Across Africa. 2. vols. 1877.

Cassel, G., Theoretische Sozialökonomie. 2. Aufl., Leipzig 1921.〔**大野信三譯**「社會經濟學原論」大正十五年〕

————, Grundgedanken der theoretischen Oekonomie. Leipzig u. Erlangen 1926.

D

Döring, H., Die Geldtheorien seit Knapp. Ein dogmenhistorischer Versuch. 2. Aufl., Greifswald 1922.

F

福田徳三,「經濟原論教科書」第三版　大正十四年.

————,「經濟學原理」流通篇（下）（改造社版經濟學全集 第四卷 昭和五年）.

福井孝治,「『價値』生成に關する一考察」（大阪商大「經濟學雜誌」第一卷 第九號　昭和十二年）.

————,「計算と貨幣」（「經濟學雜誌」第三卷　第三號　昭和十三年）

G

Gide, C., First Principles of Political Economy. London 1922.

Greidanus, T., The Value of Money. London 1932.

H

Helfferich, K., Geld und Banken. I. Teil: Das Geld. 5. Aufl., Leipzig 1921.

Hilferding, R., Literarische Rundschau. „Ludwig v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. 1912." Die Neue Zeit. 30. Jahrg. 2. Bd., 1912.

Hirsch. W., Grenznutzentheorie und Geldwerttheorie. Jena 1928.

J

Jevons. W. S., Money and the Mechanism of Exchange. 25. ed. London 1923.

K

Keynes, J. M., A Tract on Monetary Reform. London 1923.〔**岡部管司・內山直共譯**「ケインズ貨幣改革問題」大正十三年〕

Knapp. G. F., Staatliche Theorie des Geldes. 4. Aufl., München u. Leipzig 1923.〔**宮田喜代藏譯**「貨幣國定學說」大正十一年〕

Knies. K., Geld und Credit. I. Abt. Das Geld. Neudruck. Leipzig 1931.〔**山口正吾譯**「クニース貨幣論」昭和五年〕

栗村雄吉,「貨幣の限界效用と價格一般」（九州帝大「經濟學研究」第四卷 第二號　昭和九年）

————,「需要函數論」（九州帝大法文學部十周年記念經濟學論文集　昭和十一年）

————,「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（「經濟學研究」第六卷　第四號 昭和十一年）

————,「交換に於ける貨幣存在の論理的必然性」（「經濟學研究」第七卷　第一號　昭和十二年）

————,「貨幣の根本機能に關する考察」（「經濟學研究」第七卷　第二號　昭和十二年）

————,「貨幣の根本機能に關して高田博士に敎を乞ふ」（「經濟學研究」第七卷　第四號　昭和十三年）

L

Laum. B., Heiliges Geld. Eine historische Untersuchung über den Sakralen Ursprung des Geldes. Tübingen 1924.

Lotz. W., Die Lehre vom Ursprunge des Geldes. Eine methodologische Studie. Jahrb. f. Nationalök. u. Stat. Bd. 62. (III. F. Bd. 7.) 1894 (I).

M

Marget, A. W., The Definition of the Concept of a "Velocity of Circulation of Goods." Economica. No. 41. 1933.

正 井 敬 次,「貨幣價値の研究」昭和十年

Menger, C., Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Erster, allgemeiner Theil. Wien 1871.〔**安井琢磨譯**「メンガー國民經濟學原理」昭和十二年〕

————, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 2. Aufl., Wien u. Leipzig 1923.

————, Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften, und der politischen Oekonomie. The collected works of Carl Menger. Vol. II. London Sch ol of Econ mics and Poliitcal Science. Series of reprints of scarce tracts in economic and political science. No. 18. London 1933.〔**戸田武雄譯**「メンガー社會科學の方法に關する研究」昭和十二年〕

————, On the Origin of Money. The Economic Journal. Vol II. 1892.

————, Geld. Handwörterbuch d. Staatswissenschaften. 2. Aufl., Jena 1900, IV. Bd.

Miller, C., Studien zur Geschichte der Geldlehre. Die Entwiclung im Altertum und Mittelalter bis auf Oresmius. Stuttgart u. Berlin 1925.

Mises. L. v., Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. 2. Aufl., München u. Leipzig 1924.

————, Zur Kassifikation der Geldtheorien. Archiv f. Sozialwissenschaft

u. Sozialpolitik. 44. Bd., 1917–1918.

Monroe, A. E., Monetary Theory before Adam Smith. Cambridge 1923.

N

中 山 伊 知 郎,「純粹經濟學」岩波全書　昭和八年

————,「數理經濟學研究」昭和十二年

————,「數理經濟學方法論」(改造社版經濟學全集　第五卷「經濟學の基礎理論」昭和七年)

————,「貨幣の本質とその價値」(「經濟論叢」第四十六卷　第四・五號　昭和十三年)

西 村 眞 次,「日本古代經濟」交換篇第四册　貨幣　昭和八年

O

岡 橋 保,「貨幣本質の諸問題」昭和十一年

————,「シユムペーターの貨幣本質觀と貨幣數量說」(「內外研究」第五卷第二・三號　昭和七年)

————,「貨幣本質論への一寄與——竹島教授「貨幣本質の研究」を讀みて」(「銀行研究」第三十二卷　第二號　昭和十二年)

————,「貨幣價値論の動態論的性格觀の批判」(「內外研究」第十卷　第二號　昭和十二年)

————,「貨幣價値の歷史的連續性の構想の性格について」(和歌山高等商業學校創立十五周年記念論文集・「內外研究」第十卷　第三一六合併號　昭和十二年)

————,「貨幣生成論の諸相」(「內外研究」第十一卷　第三・四合併號　昭和十三年)

————,「貨幣の本質と價値」(「經濟論叢」第四十七卷　第一號　昭和十三年)

P

Plato, The Republic of Plato. Trans. by B. Jowett. 3. ed., Oxford 1888.

S

坂 西 由 藏,「經濟生活の歷史的考察」 大正十四年

Schmidt, M., Grundriss der ethnologischen Volkswirtschaftslehre. II. Bd. Stuttgart 1921.

Schumpeter. J., Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie. Leipzig 1908. 〔**木村健康・安井琢磨共譯**「理論經濟學の本質と主容內容」 昭和十一年〕

————, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. 2. Aufl., München u. Leipzig 1926. 〔**中山伊知郎・東畑精一郎共譯**「經濟發展の理論」昭和十二年〕

————, Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige. Archiv f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik. Bd. 44. 1917–1918.

Schurtz, H., Grundriss einer Entstehungsgeschichte des Geldes. Weimar 1898.

柴 田 敬,「理論經濟學」 全二卷 昭和十・十一年

————,「主觀價値と貨幣價値論」(「經濟論叢」 第三十二卷 第六號 昭和六年)

Simmel, G., Philosophie des Geldes. 4. Aufl., München u. Leipzig 1922.

Smith, A., Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms. Ed. by E. Cannan. Oxford 1896.

Soda, K., Geld und Wert. 2. Aufl., Tübingen 1924. 〔**川村豐郎譯**「貨幣と價値」「左右田喜一郎全集」 卷第二 昭和五年〕

————,「左右田喜一郎全集」 全五卷 昭和五・六年

————,「左右田喜一郎全集」 卷第二「貨幣價値論研究」 昭和五年

T

高 田 保 馬,「經濟學新講」 全五卷 昭和四—七年

————, 第三卷 「貨幣の理論」 昭和五年

————,「利子論研究」 昭和十年

————,「貨幣本質に關する若干の問題」(「經濟論叢」 第四十五卷 第四號 昭和十二年)

————,「貨幣の本質について」(「經濟論叢」 第四十六卷 第四號 昭和十三年)

高 垣 寅 次 郎,「貨幣の生成」 貨幣の理論 第一 昭和二年

————,「貨幣價値に關しての私論二題」(「商學研究」 第三卷 第三號 大正十三年)

竹 島 富 三 郎,「貨幣本質の研究」 昭和十一年

田 中 金 司,「金本位制と中央銀行政策」 昭和四年

————,「限界利用說と貨幣の客觀的價値」(「國民經濟雜誌」 第四十九卷 第五號 第五十卷 第三號 昭和五・六年)

————,「貨幣の價値の本質」(一)(「國民經濟雜誌」第六十四卷 第四號 昭和十三年)

U

內 田 銀 藏,「日本經濟史の研究」 全二卷 大正十年

W

Weber. M., Wirtschaftsgeschichte. Abriss der universalen Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. Hrsg. v. S. Hellmann u. M. Palyi. München u. Leipzig 1923. 〔**黑正巖譯**「マックス・ウェーバー社會經濟史原論」昭和二年〕

Wicksell, K., Ueber Wert, Kapital und Rente, nach den neueren nationalökonomischen Theorien. London School of Economics and Political Science. Series of reprints of scarce tracts in economic and political science. No. 15. London 1933. 〔**北野熊喜男譯**「ウィクゼル・價値・資本及地代」昭和十二年〕

————, Geldzins und Güterpreise. Eine Studie über die den Tauschwert

des Geldes bestimmenden Ursachen. Jena 1898. (English trans. 1936)
〔豐崎稔譯「金利と物價」昭和十二年〕

————, Vorlesungen über Nationalökonomie. Auf Grundlage des Marginalprinzipes. Theoretische Teil. II. Band: Geld und Kredit. Jena 1922.

Wieser. F. F. v., Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft. G. d. S. I. Abt. II. Teil. 2. Aufl., Tübingen 1924.

————, Gesamelte Abhandlungen. Tübingen 1929.

————, Der Geldwert und seine geschichtlichen Veränderungen. Zeitschrift f. Volkswirtschaft, Sozialpolitik u. Verwaltung. XIII. Bd.. 1904.

————, Der Geldwert und seine Veränderungen. Schriften des Vereins f. Sozialpolitik. 132. Bd., 1909. Referat Wien.

————, Geld. I. Theorie des Geldes. (Allgemeine Lehre vom Gelde.) Handwörterbuch d. Staatswissenschaften. 4. Aufl., Jena 1927, Bd. IV.

Y

安井琢磨,「貨幣と經濟的均衡——ワルラス貨幣理論の一研究」(「經濟學論集」第八卷 第四號 昭和十三年)

Z

Zwiedineck, O. v., Kritisches und Positives zur Preislehre. Zeitschrift f. d. gesamte Staatswissenschaften. Jahrg. 65. 1909.

————, Die Einkommensgestaltung als Geldwertbestimmungsgrund. Schmollers Jahrbuch f. Gesetzgebung, Verwaltung u. Volkswirtschaft im Deutschen Reiche. N. F. Jahrg. 33. 1909.

II 人名索引

數字は本文頁數を示し，ゴチック
數字は序文頁數を示す。

Aftalion, A. ……54, 91, 137–184.
Altmann, S. P. ……6, 8, 13, 30.
荒木光太郎 ……9.
Aristotle ……200–203, 210, 240.
Ashley, W. ……229.

Böhm-Bawerk, E. v. ……133–135.
Bordes, W. de ……145.
Bortkiewicz, L. v. ……60, 63.
Bücher, K. ……243.
Butchart, M. ……203.

Cameron, V. L. ……195–196.
Cannan, E. ……249.
Cassel, G. ……248.
Cournot, A. A. ……34.

Döring, H. ……48–49.

福田德三 ……223–224.
福井孝治 ……248, 252.

Gide, C. ……195–197.
Greidanus, T. ……183.

Helfferich, K. …32, 41, 49, 59–60, 94–97, 120, 121, 123–124 132, 204–208, 213, 218, 227–228, 244, 246, 248, 264, 319–320.
Hilferding, R. ……60, 69.
Hirsch, W. ……61, 64, 69, 113–114.

Jevons, W. S. …195, 198–199, 219, 249.
Jowett, B. ……202.

Keynes, J. M. ……144.
Knapp, G. F. ……199, 215, 250–251.
Knies, K. ……49, 121–123, 126, 266.
黒正巖 ……223, 244, 264, 320.
栗村雄吉 ……9, 16–19, 28–30 33, 35–37, 48, 50–51, 55, 70, 73–75, 98, 99–120, 125, 296–299.

Laum, B. ……226, 229.
Lotz, W. ……221–222, 264.

Marget, A. W. ……145.
正井敬次 ……9, 48, 50–51, 70, 81–98, 118, 124, 134.
松岡孝兒 ……59, 140.
Menger, C. …111, 134, 195–196, 203–204, 209–219, 228, 236, 249, 265.
Miller, C. ……203.
Mises, L. v. …2–5, 13, 15–16, 28–30, 32, 41, 43–44, 50–51, 55, 57–67, 69–70, 73–74, 76–80, 82–84, 87, 91–94, 97–98, 99–100, 102–106, 108–109, 111, 113–117,

120, 121, 125–133, 135, 137–139, 165, 182, 294, 319–320.
Monroe, A. E. ……203.

中山伊知郎……16, 21, 23, 25–26, 35–37, 116–117, 137–138, 271–294, 300–303.
西村眞次 ……225, 233.

Oresmius, N. ……203.

Perry, W. J. ……225.
Plato. ……202, 210.

Roscher, W. ……1.
Ross. W. D. ……201.

坂西由藏……48–50, 52.
Schmidt, M. ……243.
Schumpeter, J. 4, 36–38, 43, 49, 60, 78–80, 111–112, 190–191, 235–236, 238, 266, 271, 273–274, 284–289, 291, 294, 296, 298–300.
Schurtz, H. ……248.
柴田敬 ……12–13, 23, 28, 33–35, 48–51, 53–55, 73, 75, 84, 99–100, 105, 114–117, 123, 126.
Simmel, G. ……246, 248.
Smith, A. ……203, 249.
左右田喜一郎……47, 49–50, 199, 215, 240 250–251 253, 320.

高田保馬……8, 18, 29, 30–31, 48, 50–51, 53, 61, 271–272, 301.
高垣寅次郎……48–50, 52, 243, 263.
竹島富三郎……9–10, 305–322.
田中金司 ……9, 48–50, 53–55, 63, 70–80, 81, 83, 98, 99–105, 111, 118, 123 125, 171.

內田銀藏 ……220–223, 243, 264.

Walras, L. ……34, 36–38, 137–139, 284–285, 294–296, 298–301.
Weber, M. ……222, 244, 263.
Wicksell, K. ……36–39, 49, 60.
Wieser, F. F. v. ……49, 67, 78–80, 91, 128–129, 131, 133–135, 155–156, 178–180.

安井琢磨 ……138, 203, 295.

Zwiedineck, O. v. …49, 67–68, 73, 134.

昭和十三年十一月十二日印刷
昭和十三年十一月十八日發行

貨幣價値論序說
定價金參圓
（外地定價三圓三十錢）

著作權所有

740

著作者　岡橋保（おかはしたもつ）

發行者　江草重忠
東京市神田區神保町二丁目十七番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

東京市神田區神保町二丁目十七番地

發行所　有斐閣書店
電話九段三二二一・三二二二
振替口座東京三七〇番
東京市本郷區帝大正門前
電話小石川一九二〇番
本郷支店

東京　精興社　神田

岡橋保著

貨幣本質の諸問題

菊判總布裝　定價四・八〇
總紙數　五六九　送料　二二

「貨幣とは何ぞや」といふことは理論經濟學上の最も困難な中心的問題であつて、古來數多の學者は貨幣の本質をめぐり各種の貨幣理論を展開し來つた。著者は本書に於て貨幣本質に關する多くの先哲や先輩の論究に對して犀利嚴正なる批判吟味を加へつゝ、間接に自らの描く新たなる貨幣理論體系の設計圖を大膽に展開せられてゐる。卽ち或は貨幣の本質觀の類別方法に關し一つの重大な試論を提示し、或は貨幣本質觀と貨幣數量說との內的且つ論理的な聯關を追求して其の理論體系上の地位を明かにし、或はこの學說に對する贊否の諸論の誤謬を指摘し更に金本位制度の「自動性」の主張に潛む誤謬を明かにして貨幣數量說の妥當領域を一層明確にする等、極めて示唆多き力作にして斯學最近の貴重な收獲である。

內容目次

第一章　貨幣機能價値學說の批判　第二章　貨幣指圖證券學說と貨幣數量說　第三章　アダム・スミスの貨幣本質論　第四章　ヴェントの貨幣數量說擁護論　第五章「財貨の流通速度」論批判
第六章　金本位制度批判の背後にあるもの　附錄　引用文獻目錄

有斐閣刊行書目

——經濟——

矢作榮藏編　和田垣〔謙三〕教授在職二十五年記念　經濟論叢　菊判布裝　二・七五〇

河津遥編　金井〔延〕教授在職二十五年記念　最近社會政策　菊判布裝　二・〇〇品切

森莊三郎編　河津〔遥〕教授還曆祝賀記念　經濟學の諸問題　菊判布裝　六・〇〇〇

國家學會編　國家學會創立滿三十年記念　明治憲政經濟史論　菊判布裝　二・八〇〇

國家學會編　國家學會五十周年記念　國家學論集　菊判布裝　六・〇〇〇

法學協會編　法學協會五十周年記念　記念論文集第一部第二部　菊判布裝　各四・〇〇〇

法學協會編　法學協會五十周年記念　法學協會雜誌總索引　菊判布裝　一・〇〇〇

ジェボンス原著　小田勇二譯　經濟學原論　菊判布裝　二・五〇〇

ラブレー原著　原田光三郎譯　經濟學原論　菊判布裝　三・〇〇〇

ポリュー原著　原田光三郎譯　經濟學原論　菊判布裝　三・五〇〇

松浦要著　國民經濟學概論　第一分册　菊判紙裝　一・七〇〇

M・ウェーバー著　戸田武雄譯　社會科學と價値判斷の諸問題〔經濟學名著翻譯叢書1〕　菊判布裝　三・八〇〇

L・Vシュタイン著　神戸正一譯　財政學序說〔同上2〕　菊判布裝　二・五〇〇

G・Vシュモラー著　戸田武雄譯　國民經濟、國民經濟學及び方法〔同上3〕　菊判布裝　三・二〇〇

有斐閣刊行書目

―― 經濟 ――

M・ウエーバー著 梶山カ譯	プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神〔同上4〕	菊判布裝	二・八〇 一四〇
竹内謙二著譯	アダム・スミス研究	菊判布裝	四・〇〇 二〇〇
アモン著 山口忠夫譯	理論經濟學の對象と基礎概念	菊判布裝	三・一四 一四〇
ストリューヴェ原著 山下芳一譯	經濟學の基調としての合理主義	四六布裝	一・二〇 〇六〇
田島錦治著	經濟ト道德	菊判背革	三・〇〇 一〇〇
田島錦治著	勞賃ト利潤	菊判背革	三・〇〇 一〇〇
田島錦治著	經濟原論	菊判背革	五・五〇 二〇〇
田島錦治著	東洋經濟學史	菊判布裝	二・八〇 一四〇
吉川秀造著	士族授產の研究（日本經濟史研究叢書第三册）	菊判布裝	三・六〇 二〇〇
本庄榮治郎著	經濟史概論（日本經濟史研究叢書第四册）	菊判布裝	二・〇〇 一四〇
本庄榮治郎著	幕末の新政策（日本經濟史研究叢書第五册）	菊判布裝	三・二〇 一四〇
日本經濟史研究所編	幕末經濟史研究（日本經濟史研究叢書第六册）	菊判布裝	三・八〇 二〇〇
松好貞夫著	新田の研究（日本經濟史研究叢書第七册）	菊判布裝	三・〇〇 一〇〇
堀江保藏著	アメリカ經濟史概說（日本經濟史研究叢書第八册）	菊判布裝	三・二〇 二〇〇

有斐閣刊行書目

―― 經濟 ――

宮本又次著	株仲間の研究（日本經濟史研究叢書第九册）	菊判布裝	四・二〇 二〇〇
江頭恒治著	高野山領莊園の研究（日本經濟史研究叢書第十册）	菊判布裝	四・五〇 二〇〇
小野武夫著	日本兵農史論（比較土地制度史研究第一卷）	菊判布裝	三・五〇 二〇〇
山崎覺次郎著	全訂改版 經濟原論	菊判布裝	二・〇〇 一四〇
山崎覺次郎著	改訂 銀行論	菊判紙裝	一・五〇 一〇〇
山崎覺次郎著	貨幣問題雜觀	菊判布裝	二・八〇 一四〇
山崎覺次郎著	若干の貨幣問題	菊判布裝	二・八〇 一四〇
山崎覺次郎著	貨幣瑣話	四六布裝	二・五〇 一四〇
荒木光太郎著	貨幣概論	菊判布裝	四・三〇 二〇〇
岡橋保著	貨幣本質の諸問題	菊判布裝	四・八〇 二〇〇
エルスター原著 入澤民政譯	貨幣論	菊判布裝	四・〇〇 二〇〇
アフタリヨン著 松岡孝兒譯	貨幣・物價・爲替論	菊判布裝	三・四〇 二〇〇
ヨハンネス・ラウレス著	スコラ學派の貨幣論	菊判布裝	三・二〇 二〇〇
飯島幡司著	支那幣制の研究	菊判布裝	三・八〇 二〇〇

有斐閣刊行書目

―経済―

小川郷太郎 汐見三郎 著 財政学 菊判布装 四・五〇二〇

汐見三郎著 日本財政の特殊問題 菊判背革 四・〇〇二〇

汐見毛里 武田・益田 著 國民所得の分配（財政金融研究會紀要Ⅰ） 菊判布装 二・五〇一四〇

中谷実一郎 大野榮 著 預金通貨の研究（財政金融研究會紀要Ⅱ） 菊判布装 二・五〇一四〇

汐見三郎 柏井象雄 佐伯文洞 伊藤武夫 著 各國所得稅制論（財政金融研究會紀要Ⅲ） 菊判布装 三・五〇二〇

楠見一正 島木融 著 獨逸金融組織論（財政金融研究會紀要Ⅳ） 菊判布装 五・〇〇二〇

杉程次郎著 最新 經濟學 菊判布装 四・五〇二〇

杉程次郎著 訂正改版 最近銀行論 菊判布装 二・七〇一四〇

松岡孝兒著 金問題研究 菊判布装 二・七〇一四〇

楠見一正著 金輸出解禁問題 菊判紙装 二・〇〇一四〇

土方成美著 稿本 租稅論講義 菊判布装 三・五〇二〇

大畑文七著 租稅國家論 菊判布装 三・一〇二〇

松崎藏之助著 列强戰時 財政經濟政策 菊判布装 五・五〇二〇

ジイ・ジエーク原著 竹田武男譯 應用統計學 菊判布装 六・〇〇二〇

有斐閣刊行書目

―経済―

ジイ・ジエーク原著 岡崎文規譯 統計的中數値論 菊判布装 五・〇〇二〇

岡崎文規著 人口統計研究 菊判布装 三・〇〇一四〇

岡崎文規著 統計研究文獻 菊判布装 三・一〇一四〇

田井要助著 經濟統計學要論 紙装 一・一〇一四〇

楢崎敏雄著 航空經濟政策論 菊判布装 三・五〇二〇

楢崎敏雄著 軍用航空と民間航空 菊判布装 二・一〇一四〇

楢崎敏雄著 貿易政策論 菊判布装 二・七〇一四〇

野村兼太郎著 英國資本主義の成立過程 菊判布装 五・八〇二〇

大塚久雄著 株式會社發生史論 菊判布装 五・〇〇二〇

有澤廣巳著 日本工業統制論（日本經濟研究叢書(1)） 菊判布装 二・五〇一四〇

土屋喬雄 岡崎三郎 著 日本資本主義發達史概說（同上(2)） 菊判布装 四・二〇二〇

河津暹著 經濟政策總論（經濟政策體系第一卷） 菊判布装 二・三〇一四〇

河津暹著 農業と農業政策（經濟政策體系第二卷） 菊判布装 三・四〇二〇

河津暹著 工業と工業政策（經濟政策體系第三卷） 菊判布装 三・五〇二〇

有斐閣刊行書目

―― 經濟 ――

河津遥著　商業と商業政策（內國商業）（經濟政策體系第四卷）　菊判布裝　三・二五〇

河津遥著　商業と商業政策（外國貿易）（經濟政策體系第五卷）　菊判布裝　四・〇〇〇

河津遥著　社會問題と社會政策（經濟政策體系第六卷）　菊判布裝　三・六〇〇

小島昌太郎著　海運賃率論　菊判背革　三・五〇〇

小島昌太郎著　海運同盟論　菊判背革　六・三〇〇

小島昌太郎著　金融動態論　菊判布裝　三・八〇〇

小島昌太郎著　經營學論　菊判布裝　一・五〇〇

小島昌太郎著　保險本質論　菊判背革　四・八〇〇

米谷隆三著　保險の研究　菊判五六布裝　三・〇〇〇

森莊三郎著　現代保險問題　菊判四六布裝　二・五〇〇

森莊三郎著（經濟資料）　日本家屋保險國營論　菊判四六布裝　三・五〇〇

森莊三郎著　社會保險論集　菊判四六布裝　二・八〇〇

野津務著　相互保險の研究　菊判背革　四・〇〇〇

野津務著　保險の社會化　菊判四六布裝　一・八〇〇

有斐閣刊行書目

―― 經濟 ――

石丸優三著　社會保險論　菊判布裝　四・〇〇〇

稲川宮雄著　商業組合の理論と實際　菊判布裝　三・〇〇〇

堀新一著　百貨店問題の研究　菊判布裝　四・八〇〇

谷口吉彦著　貿易統制の研究（第一卷）　菊判布裝　三・四〇〇

谷口吉彦著　貿易統制の研究（第二卷）　菊判布裝　二・八〇〇

谷口吉彦著　貿易統制の研究（第三卷）　菊判布裝　三・〇〇〇

油本豐吉著　商業政策（第一部外國貿易理論）　菊判布裝　四・〇〇〇

上林正矩著　各國株式取引所論　菊判布裝　三・〇〇〇

上野道輔著（新稿）　簿記原理　菊判背革　三・八〇〇

上野道輔著（新稿）　貸借對照表論（第一分冊）　菊判紙裝　一・四〇〇

上野道輔著（新稿）　貸借對照表論（第二分冊）　菊判紙裝　一・四〇〇

上野道輔著　簿記原理大綱　菊判布裝　二・八〇〇

上野道輔著　簿記理論の研究　菊判布裝　三・三〇〇

木村和三郎著　銀行簿記論　菊判布裝　三・六〇〇

有斐閣刊行書目

―― 經濟 ――

高橋茂著　商業簿記理論　紙裝　一・四〇〇

ゲーファーニッツ著 山崎覺次郎譯　大工業論（附錄、木綿工業に於ける機械の發明並に其の普及）　菊判布裝　四・〇〇〇

目崎憲司著　計畫經濟　菊判布裝　三・〇〇〇

目崎憲司著　鐵鋼及び石炭業に於ける企業組織　菊判布裝　三・八〇〇

小島精一著　本邦鐵鋼業の現在及將來　菊判布裝　三・六〇〇

小島精一著　鐵鋼業發展史論　菊判背革　七・五〇〇

竹內謙二解說　リーフマン企業組織論　菊判布裝　二・八〇〇

リーフマン原著 竹內謙二譯　企業合同論　菊判布裝　一・八〇〇

日本學術振興會二十一小委員會編　時局と農村 (1)　四六上製　二・五〇〇

日本學術振興會二十一小委員會編　時局と農村 (2)　四六上製　二・〇〇〇

堀新一譯　ケネー商業と農業　菊判布裝　三・二〇〇

八木芳之助著　農村產業組合の研究（增訂）　菊判布裝　三・八〇〇

ブツヘンベルガー著 八木芳之助譯　農業政策　菊判布裝　四・〇〇〇

八木芳之助著　米價及び米價統制問題　菊判布裝　四・八〇〇

有斐閣刊行書目

―― 經濟 ――

八木芳之助著　農村問題研究　菊判布裝　二・八〇〇

本位田祥男著　農產物の價格統制　菊判布裝　三・五〇〇

本位田祥男著　綜合蠶絲經濟論（上卷）　菊判布裝　四・八〇〇

本位田祥男著　綜合蠶絲經濟論（下卷）　菊判布裝　四・二〇〇

河田嗣郎著　農業經濟學（增補）　菊判背革　九・〇〇〇

岩井尊人著　最近の丁抹と農業の合理的共同經營　菊判紙裝　二・五〇〇

橫井時敬著　農村制度の改造　菊判布裝　二・五〇〇

小林巳智次著　農業法研究―農地法の根本問題―　菊判布裝　三・四〇〇

樋田豐太郎著　日本農業法制 中卷（小作、勞働、農會、組合、移民、金融）　菊判加除　五・〇〇〇

稻田周之助著　植民政策　菊判紙裝　三・〇〇〇

矢內原忠雄著　植民及植民政策　菊判布裝　四・八〇〇

ゾルフ原著 長田三郎譯　將來の植民政策　菊判布裝　二・二〇〇

孫田秀春著　勞働法論（總論 上論）（改訂）　菊判布裝　五・〇〇〇

沼越正巳著　退職積立金及退職手當法釋義　菊判布裝　五・〇〇〇

IHN19

有斐閣刊行書目

―― 經濟 ――

後藤清著　退職積立金及退職手當法論　菊判布裝　三・二二〇

後藤清著　勞働協約理論史　菊判布裝　三・二二〇

森弘元著　勞働保險論　菊判布裝　二・二一〇

ビグー著　玉井茂譯　失業問題　四六判布裝　二・二〇八

小島憲著　文化の特質と社會問題　菊判布裝　三・八二〇

河田嗣郎著　社會政策原論　菊判布裝　二・五一〇

河田嗣郎著　社會問題總論　菊判布裝　二・七一〇

河田嗣郎著　賃金制及利潤分配制　菊判布裝　三・二二〇

河田嗣郎著　勞働組合論　菊判布裝　三・二二〇

河田嗣郎著　勞働爭議及調停制度　菊判布裝　三・二二〇

河田嗣郎著　新賃金政策　菊判布裝　三・二二〇

河田嗣郎著　社會保險論　菊判布裝　三・八二〇

河田嗣郎著　中等階級問題及サラリーメン問題　菊判布裝　三・二二〇

河田嗣郎著　農村問題　菊判布裝　三・二二〇